緑谷夫妻のやり直し

伊乃

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

巨悪は斃れ、英雄もまた死す。

ヴィラン連合との抗争の果て、首魁を討つも代償として

僕、緑谷出久は己と己の最愛の命を失った。

…はずだった。

―――――――――――――――――――――

原作準拠で話を進める予定ですが、敢えて原作の読み返しは行いません。

その為、台詞や言い回し、展開に差異が生じると思いますが、目を瞑っていただきたいと思います。

誤字や展開の違和感等は感想等を使い、ドシドシお送りください。

２０１９／０９／０７

原作情報による一部変更のお知らせ（対象ページ：１４話）

後書きに変更点を記載しました。

楽しんでいるみなさまにはご迷惑をおかけして申し訳ございません。

目次

Re：
1．The end of Hero（英雄の最期）―― 1
2．Retrograde（逆行）―― 6
3．Confirmation，Reunion，Partner（確認、再会、相棒）―― 13
4．Talking about…（話すことは…）―― 20
5．Check my status（能力確認）―― 25
6．Hang up after you（君の後に切る電話）―― 30
7．How to reach the best（最高に至る筋書き）―― 36
8．The end of heroine（彼女の最期）―― 41
9．Three family conferences（三家族会議）―― 48
10．My decision＝Our decision（僕の決意＝僕らの決意）―― 54
11．Naked relationship（裸の付き合い）【暴走回】―― 60
Turn：past
12．Master teacher（師匠の師匠）―― 65
13．Past Master vs Future Disciple（過去の師匠vs未来の弟子）―― 70
14．Heroes like bone（骨のようなヒー

ロー）――― 76
15．10th successor（第10代継承者） 81
16．A little step, Maximum change（小さな一歩、最大の変化）――― 87
17．Old maid（ババ抜き）――― 93
18．Slap with your hand（平手打ち） 99
19．Adversity Builds Character（雨降って地固まる）――― 105
20．Red Riot（烈怒頼雄斗）――― 111
21．Faceless（無貌）――― 117
22．Peaceful act（平穏な一幕）――― 122
23．Limited license（限定免許）――― 128
24．VS Childhood Friend（VS幼馴染）――― 133
25．”Together” increases（『一緒』が増える）――― 139
26．Dance & Chase!!（ダンス&チェイス!!）――― 145
27．Training ／ Dark clouds（トレーニング／暗雲）――― 151
28．Darkness／Growth（暗闇／成長）――― 157
29．Blood Madness Muscular（血狂いマスキュラー）――― 162

Re：1．The end of Hero（英雄の最期）

その日は、夏の暑さの残る処暑だと朝のニュースで言っていた。
およそ十年間続いた連合との戦いに終止符を打つべく作戦会議を行った後にほんの数分見た天気予報が思い出され、どうでもいいと頭を振る。
諸悪の根源は打倒した。
奴の力の源の両の手のひらは上腕中程で折れており、右腕に至っては関節の数を数えるのが億劫になるほど、ぐしゃぐしゃにしてしまったほどだ。
今は打撃による脳震盪と痛みによるショックで青天の様相で昏倒している。
勝利の余韻よりも喪失感の方が大きい。
勝ちの代償としては失うものが大き過ぎた。
僕だけに限って言ってもまず間違いなく助からない。
右目の喪失と左足首の切断。
左脇腹もボロボロに崩壊してしまっていて止め処なく出血している。
その為か、夏の暑さは感じず、逆に震えるほど寒い。
適当に拾い上げた、半ばで崩れ落ちた標識を杖に、痛む身体を推し、血の足跡を残しながら進む。
最愛の人が斃れた場所を目指して。

まるで神野の悪夢の再現だ。
どこもかしこも崩れ、壊れ、いびつな更地になっている。
歩きにくい足元を霞む目で確認しながら歩く。
途中で転がることなく、歩む僕は存外器用だったのかもしれない。
亀にも劣る歩みで進むと子供の圧し殺した鳴き声が遠退く聴覚を

叩いた。
もう少しだと一踏ん張り。
瓦礫の小山を這って登り、その一番上から幼い女の子と最愛の人が居るのが見えた。
「…ッ!?デクぅぅぅぅぅ!!!」
僕に気付いた女の子は擦り剥いて流れる血を気にせず僕に駆け寄ってきた。
「もう大丈夫だよ。悪い敵（ヴィラン）はやっつけたから」
痛みも疲れも何もかもを置き去りに笑顔を浮かべてみせた。
この子は不安だったんだ。
心配ない、と安心させてあげなきゃいけない。
僕はヒーローなんだ。
だから、これはやらなきゃいけない。
ヒーローとしての義務なんだ。
痛みも疲れも感じさせない笑みを浮かべろ。
それ以外に拘っている暇は今はない。
「でも…っ!ウラビティがっ!あたしを庇って…っ!!」
「大丈夫。インゲニウムがこっちに向かってるって。君はもちろん僕らも必ず助かるさ」
元気を繕い、声を張って彼女に応えた。
「ここは瓦礫の陰になって見つかりにくいかもしれないから君は瓦礫の向こうにまっすぐ歩いて行ってくれるかな?もう危険はないから大丈夫だからね?」
本当なら彼女を連れて行くべきなんだが、如何せんこれ以上どこも動かせそうにない。
一人前のヒーローとして、情けない限りだ。
「で、でも…っ!」
「大丈夫だから。僕はウラビティの応急処置をするから先に行ってて?ね?」
愚図る彼女を奮い立たせ、何とか助けを呼びに行ってもらった。
それを横目に確認しながら再度標識を握った。

少女が辿った十数歩があまりに遠い。
残り五歩程度の距離で握力を無くし、ベシャリと倒れ臥す。
「遅くなってごめんね、お茶子さん。」
不恰好な匍匐前進で残りの五歩を埋めた後、割れたバイザーを除けながらそう声を掛けた。
「…あー…デクくん…おつかれさまぁ…。」
寝起きのような半目でこちらを見る彼女の髪を左手で撫でつけながら「ただいま」と言う。
「…あー、髪。僕の血で汚しちゃった。落とすの大変かも…ゴメンね…」
「…いー…よー…。お互いボロボロだし…仕方ない…よ…。」
息も絶え絶えの様相なのにそう感じさせないような、ふにゃりとした麗らかな笑みを浮かべる。
「その表情。ずっと好きだったんだよなぁ、僕…。もっと早く言えば良かったね…」
「そんなん…今更やん。私だって…デクくんの笑顔ずーっと…好きやったよ…」
お互いに血塗れ、死の手前だと言うのにそう感じさせない雰囲気を醸し出してる。
「デクくん…今インゲニウムが…オーバーキュア連れて…こっちに走ってる…って…。」
「飯田君とエリちゃんが…。間に合う…ゴポッ…かなぁ…。」
不意に訪れた吐血に身体を動かすこと叶わず、手で抑えるのみに止まった為、数滴彼女の頬を濡らした。
「ゴメンね、汚しちゃったね…。」
「大…じょーぶ…。デク君のなら…へーき…へーき…。」
えへへ…と力無く、されど力強い笑みを浮かべる彼女。
そんな笑顔を見てこちらも笑顔になる。
「長い戦いも…終わったし…これから平和な時代になる…よね…」
「そーだよ…私たちが頑張ったんだ…って…きっと教科書にも載っちゃうよー…」

「『斯くして…ヴィラン連合の首魁はヒーロー…ウラビティとヒーローデクの奮戦に…より…討たれたのである』って感じ…かな…？」
「…えー…私の方が…先…なの？」
「僕はそうが…いいなぁ…」
「じゃぁ…そう出版社の人に…お願いしないと…だね…」
「まずは無事に…生きて戻らなきゃ…だね…」
「そー…だねー…」
　取り留めもない会話を続けるもの呼吸が段々浅くなっていく。
　繋いだ手の力が抜けて行くのを互いに感じていた。
「なんだか…寒いねー…」
「僕も寒いや…なんだか…眠くなってきたよ…」
「ダメだよー…『寝たら死ぬぞー』…って言うじゃない…」
　彼女は冗談めかして言い、状況にピッタリなものだった為に、お互い小さく声に出して笑い合った。
「デク君…『次』って…あるのかなぁ…」
「どうだろう…あったら…ゲフッ！ゴポッ…いい…なぁ…」
　先程吐いてから抑えていた血が気道から逆流し、我慢しきれず再度吐く。
「お互い…間に合いそうに…ないねぇ…」
「そー……だねぇ…。」
　コンクリート地の窪地に倒れていたこともあって僕らの血は瓦礫に染み込むこともなく混ざり合い、小さく浅い池となりヒタヒタと水面を揺らしていた。
「次も…君を好きになるよ…」
「あたし…もー…」
　互いに笑い合い、そしてそのまま目を閉じた。
　眠る時のように意識が浮上する感覚。
　手に握ったままの彼女の手の感覚がある気がする。
　こうして。
　デクこと緑谷出久とウラビティこと緑谷お茶子はその生涯に幕を下ろした。

…はずだった。

2．　Ｒｅｔｒｏｇｒａｄｅ（逆行）

……て……

……く…

遠くから声が聞こえた気がした。
真っ暗闇。
僕は確か死柄木との戦いで重傷を受け、出血多量で死んでもおかしくない状況だったはずだ。
飯田君が間に合ったのかなぁ…？
だとしたら早いうちにお礼を言わなきゃ、だね。
重傷と疲労によってから瞼を開けるのも気怠く、億劫に感じるが、呼ばれているのならば起きなくては、と奮起するも睡眠の心地良さに抗いきれない。

……おき……ず…

今度は身体を揺さ振られる感覚。
重傷者を揺さぶるとは何たる愚行か。
早く目を開けて一言言って聞かせなくては。
億劫を押し退けてゆっくりと瞼を持ち上げて光を取り込む。

「やっと起きた出久。全く、お寝坊さんね？」
「かあ…さん？」
視界に入ってきたのは若かりし頃の母さんだった。
いや、おかしい、あり得ない。
だって母さんは二年前に死柄木たちに捕らえられ、首だけを送り返された筈だ。
それにいくらなんでも若過ぎる。
「今日の【個性】診断が楽しみで夜更かしでもしてたのー？それで寝坊

してちゃ本末転倒よー？」

【個性】診断!?

全国で行われる【個性】の有無を確認するあの検査？

つまりは…今日は二十年前のあの日…なのか…？

「母さん、今日って何月何日？」

「…？おかしな子ね？今日は９月２日でしょ？」

「…何年？」

「２ｘ１９年でしょ？」

僕の記憶が確かなら今日は２ｘ３９年の９月２日だ。

と言うことは…

「…戻った…？」

早く着替えてご飯食べる準備しなさいねー、と言葉を残して部屋から出て行く母さん。

その言葉が耳を通り過ぎて反対から抜けて行くようだった。

ぐるりと周囲を見渡すと母さんに誕生日にもらったオールマイトの１／１０スケールフィギュアがサイドチェストの上に鎮座していた。

その他にフィギュアやポスターが所狭しと置いてあった筈だが、そんなもの影も形もない。

視線を下ろしてみれば、傷ひとつない小さな右手。

布団を捲れば、失ったはずの左足首が小さくなったものの付いていた。

あまりの事態に理解が追いつかない。

僕とお茶子さんは命を落としたと思ったら、２０年前に戻ってきた。

事態はあまりにシンプルだが、シンプルな為に受け止められない。

布団を吹き飛ばし、リビングに走るとテレビのリモコンを引ったくりテレビを付けた。

どのチャンネルも以前行っていた番組ばかりだ。

どれもこれも既に終了した番組ばかりでこんな事を仕込むことな

んてきっと出来ない…。
「２０年の時間を巻き戻った」としか思えない。
夢や幻ではないかと疑い、右手で頬をつまみ上げグイグイ引っ張っても確かな痛みを残すのみに終わった。
「出久！早く着替えてきなさい！ご飯も早く食べてちょうだい！」
「は、はい！」
起きて部屋から出てきたと思えば寝間着のままだった僕を見てキッチンから怒声を飛ばす母さん。
出掛ける用事も有るし、急いで準備することにする。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「出久にもきっとすぐに【個性】が出るわよ。何たって私と久さんの子供ですもの」
右手を母さんに引かれながら過去に【個性】診断を受けた病院へと進んで行く。
『ヒーローになるのは諦めた方がいい』と伝えられたあの病院だ。
【個性】を持つ人間が人口の八割。
残りの二割の【無個性】で有ると、烙印を押されたその日その場所であった。
どうやら二十年前に巻き戻ったらしい。
しかし、巻き戻ったらしいのだが、どうやら違うらしかった。

しゃけの塩焼きと漬け物、味噌汁とご飯と言う和の朝食を食べながら母の目を盗んで【個性】を使おうと右人差し指に力を入れた。
僕の【個性】は力を発現させると緑色のスパークが走る。
その現象が間違いなく起こったのだった。
どうやらワン・フォー・オールは持ったまま過去に戻ってきているらしい。
なんで？どうして？何が原因？
脳裏に浮かぶ疑問は尽きない。

なんで僕だけ？
こう疑問が浮かんだ時、本当に僕だけか？と連鎖的に浮かび上がった。
もしかしたらお茶子さんも戻ってきてるかもしれない！
そう思うと確認したくてたまらなかったが、今は母さんの目もあるし、難しい。
どうにか公衆電話で電話する術を考えなくては…。
「母さん、お願いがあるんだけど…」
「どうしたの出久？いつもなら『お母さん』って言うのに今日は朝から『母さん』って呼んで？あ、もしかして今日から大人の仲間入りだからって背伸びしてるのかなー？」
いつの頃から呼び方を変えたから今にしては思い出せないが、確かに幼い頃は『お母さん』と呼んでいた。
些事であった為、慣れた呼び方をしていたのは失念だった。
「そ、そんなことより、お願いがあるんだけど、診断が終わったら電話したいんだ！二百円くらいちょうだい！」
出来るだけ幼い口調を心掛けながら、考えた作戦の通りのおねだりをしてみる。
「公衆電話の使い方覚えてる？テレフォンカードの方がいいかしら」
「どっちでも大丈夫！けど、テレフォンカードの方が楽でいいかもしれない」
「それじゃあ、このカードあげるわ？しっかりオールマイトのお財布に入れておくのよ」
背負わされたリュックサックの中に入っていたオールマイトを模したポシェットのような財布にしまってくれた。
これでいつでも電話は出来る。
あとは隙を見て公衆電話で連絡するだけ…。
僕はいくつかの電話番号を諳で覚えていた。
自宅、実家、自分の携帯、相棒の携帯、そして彼女の携帯と実家だ。
戦闘の影響で何度携帯電話を壊したか分からないが、その為にその

数件に関しては必要に駆られて覚えたのだった。
【総合カウンター】と書かれた表札が見える。
　母さんが受付をしに、そちらに向かう途中病院の見取り図を横目で確認した。
　公衆電話はトイレの少し奥だ。
「出久、少ししたら骨の写真を撮るからしばらくここで待ってましょうね」
「うん」
　トイレに行きたいと言えば行かせてもらえるだろうが、ここは我慢だ。
――――――――――――――――
「結論から言うと、諦めた方がいいね」
　その台詞は昔に聞いたものと一言一句変わらなかった。
「この足のレントゲンを見れば分かるのだが、小指の末端の骨は非常に小さく、使われることのほとんどない関節がある。故にこの関節が退化し、関節が一つしかない者が進化した人類という事になる。彼の関節が二つあるのは隔世遺伝だろうが、このタイプに【個性】が発現した例は滅多にない。だから、【個性】が芽生えることは諦めた方が賢明だよ。」
　母さんが隣で口元に手を当て、ワナワナ震えているのが横目で見えた。
　きっと僕がショックを受けていると思っているのだろう。
「そうなんですか。分かりました」
なので、アッサリと飲み込んだテイを取る。
左から驚愕の雰囲気が伝わってくるが、それに取り合わず、すぐに立ち上がり部屋から退室する。
「失礼しました」
　母さんを待たずに先に出た。
「ありがとうございます」
　そう言いつつ遅れて母さんも退出。
　何と声をかければ良いか迷っているようだ。

「母さん、僕トイレ行ってくるね。ついでに電話もしてくるからさっきいたところで待ってて」
その場から歩き出し、後ろを見ながら軽く手を振って僕はトイレに向かった。
止めようか迷い、宙空を彷徨う母さんの右手を目にしながらも前を向いて歩き続けた。
角を曲がり、トイレに着くも通り過ぎ、目的の公衆電話へ。
逸る気持ちを抑えながら前後の通路の人の有無を確認。
気配を探るも誰もいないことを確認して受話器に手をかけた。
口で諳んじながらプッシュキーを押すこと十桁分。
呼び出しコールが鳴り出し、４回目。
繋がった。
『もしもし、麗日です』
お茶子さんのお母さんの声だ。
「もしもし、僕緑谷って言います。お茶子さんいらっしゃいますか？」
出来る限り子供らしく、かつ出来るだけ丁寧に。
『緑谷くん？お茶子のお友達かしら？』
「デクと言えば分かってくれると思います。代わってもらえますか？」
ちょっと待ってね、と軽く前置きの後に保留音。
数秒間が長く感じる。
どちらに転ぶか、どちらに転んで欲しいのか。
この時代に戻ってきたのは僕だけなのか…それとも…。
ガチャッ
保留音が途切れ、再び通話状態になった。
ゴクリ、と無意識に唾を飲み込んでいた。

「デクくんッ!?!?!」
記憶よりも幾分か高い声音。
されど聞き間違うはずもない愛する人の声。

自然と涙が溢れてきたのを歪む視界で気付いた。

3．Confirmation，Reunion，Partner（確認、再会、相棒）

『デクくんッ!?!?!』
耳元に届く心地よい声。
聞き慣れた少し訛ったイントネーション。
「お茶子さん、君も昨日の記憶があるんだね？」
『うん！うん！』
お互いが涙声である事はバレているだろう。
無事と言えばいいのか、過去の世界に一人で来てしまった訳ではなかったと言えばいいのか考えがまとまらない。
「お茶子さん、メモできる？ウチの電話番号教えるから。今は病院の公衆電話からかけてる。現状を伝えると今日は二十年前の９月２日みたい。」
『うん、それはこっちでも把握しとる。しかも、個性の成長は変わってないみたい。』
「それはまだ確認出来てなかった。僕の方は検査では無個性って診断されたけど、ワン・フォー・オールがある事は確認した。」
『ホントに!?制御の方は大丈夫なの？』
「まだフルカウルは試してないけど、部分制御は出来た。２０％まで流したところで辞めたんだ。【黒鞭】とか【操作】は折を見て確認するつもり。」
『無茶しちゃあかんよ。それだけは約束して』
「エリちゃんも居ないし、リカバリーガールとの伝手も無い内に無理はできないなぁ…」
と言うかする勇気もない。
互いに分かっていることを共有しあい、話が進む。
進むにつれて話題は脱線するも会話は途切れなかった。
が、ふとした瞬間互いの思いが小さく爆発した。
『「…会いたい…」』

全くタイミング。

正しく以心伝心。

異口同音、の言葉を成した。

回線による遅れを考慮しても１００％合致のシンクロ具合である。

その後、どちらからかの我慢の限界を示唆する破裂音の後、お互いに笑い声が上がった。

数十秒間笑い続けた二人は、どちらの顔も見えていないのに、きっと涙でぐしゃぐしゃにした、いびつな笑顔になっているだろう、とアタリを付け、正しくそれで当たっていた。

頬を伝う涙をオールマイトプリントのＴシャツの肩口で適当に拭うと自然な笑みへと変わる。

「お茶子さん、それはまた後で詰めよう。とりあえず、家からまた掛けるから。また後でね。」

『分かった、待ってるね？』

顔の横で開いた手のひらを小さく振る姿を幻視し、受話器を耳から離す。

ふと、思い立ち再び耳に当てると

「お茶子さん？」

『ん？なーに？』

「愛してる」

『ん。ウチも愛しとーよ』

自然と口に出た言葉は相手に渡り、帰ってきた言葉に自然と口が綻ぶ。

「またね」

『バイバイ』

ガチャン。

虚しさを象徴する音とともに通話が終了した。

だが、大きく状況が変わった。

僕は一人じゃなかった。

――――――――――――――――

「ただいま、母さん。」
「お帰り。誰に電話してたの？」
待合室に向かうとソファに腰を下ろした母さんが迎えてくれた。
迎え入れの言葉の後に続くのは、当然の疑問だった。
「それに関してなんだけど、後で聞いて欲しいことがあるんだ。家に帰ったら話すから」
「そーなの？どんなお話？」
「色々だよ。【個性】の事とか未来の事とか」
一瞬、母さんの顔に影が差すもすぐに取り繕い、「何なのかしら、気になるわ」と何でもない風を装っていた。
その後、母さんは小さくよいしょ、と声に出しながら自然に僕の手を取り、そのまま外へと向かう。
「どこかで買い物してお家でお昼食べる？それとも外食にする？」
「家で良いよ、母さん。母さんのカツ丼が食べたいな」
よーし、腕によりを掛けて作っちゃうわよー！と右腕に力こぶを作るようにする母さん。
ああ、幼い頃はこんな感じだったな、と眩しいものを見るかのように目を細めてしまった。
「あ、いずくー！」
記憶の彼方の声。
彼にこう呼ばれるのは、ちょうど今くらいの時期までだったように思える。
「かっちゃん…？」
記憶のままの姿、呼び方、態度。
道の反対側、横断歩道の先に彼がいた。
おーい、と手を高く掲げ、パチパチと破裂音をその手から鳴らしている。
爆豪勝己、僕の幼馴染。
幼稚園で仲良くなり、以後高校卒業後のヒーロー活動で影に日向に支えてくれた相棒。
約十年間関係が拗れていたが、高校二年中頃に復旧。

以後八年もの間、良好な関係を築いていたものの、敵連合の手引きで脱獄したオール・フォー・ワンと相討ちとなる形でその命を落とした。
姿、声は幼くともそれらは2年振りに感じる爆豪勝己の存在だった。
自然と潤む視界を目頭ごと抑えつけ、大きく手を振り返す。
「かっちゃーん！」
横断歩道の信号が青に変わったことを確認し、左右の安全確認をしてから、駆け足でこちらに寄ってくる。
「こんにちは！いずくのおばさん！」
「こんにちは、勝己くん。一人なの？」
「そーだよ！母ちゃんには内緒なんだ！」
「光己さんが心配するわよ？ちゃんと出掛けるのなら言わないと。」
「へーきだよ！母ちゃん、ずぶといから！」
どこでそんな言葉を覚えてくるのかしら…と困り顔の母さん。
「かっちゃん、お昼もう食べた？」
二人の掛け合いが止まったところで僕も話題を振る。
「朝ごはん食べてすぐに出たからまだだぜ！」
「そっか。ねぇ母さん。かっちゃん家に呼んでも良い？」
「放っとくよりも家にいてもらった方が光己さんも安心でしょうね…勝己くん、ウチでご飯食べてきなさい？」
「ごちそうになります！」
「あら、礼儀がしっかり出来てるわね。」
今日は出久にカツ丼作ってっておねだりされたから、腕によりを掛けるわ！と先程と同じポーズを取りながら再度宣言。
その宣言にかっちゃんもわーい、と続く。
その二人の数歩後ろを続く僕は左目から溢れた一滴の涙の跡を拳で拭った。
ふと、示し合わせたかのように振り返る二人。
二人とも同じようなことを口にする。
曰く、置いてくぞ、と。

「待ってよー！」
慌てたそぶりを作って見せ、小さな歩幅で駆け出した。
僕が死んだはずの時代ではどちらも失ってしまった。
それを再び目にすることが出来て僕は二人に隠れてコッソリと涙した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「出来たわよー」
調理完了を告げる母さんの声。
僕とかっちゃんはやっていたレーシングゲームを投げ出して、食卓へ走る。
「ほら、食べる前は手を洗いなさい。はい、洗面所までダッシュ！」
椅子を引こうとしていた僕とかっちゃんは母さんの柏手に反応して目標ルートを食卓から洗面所に変えた。
先に戻った方には大きいお肉の方を上げる、と言われてしまっては俄然やる気が出るというもの。
長くもない廊下を駆け、脱衣所と共用の洗面所に駆け込む。
ほぼ同着だが、僅差でかっちゃんの優勢。
「おっきい方は俺がいただきー！」
コック式の蛇口を開放して、水を出す。
その一瞬の動作の差で勝つ！
「ポンプは僕が先！」
「あ！ずっこいぞ、いずく！」
ハンドソープを片手に、もう片方の手を水に濡らす。
わしゃわしゃと適当に泡だて、サッと流す。
そして、壁に掛かったタオルも一本。
先にタオルを取り、手を拭く。
「おっ先ー！」
「あ！待て！」
タオルを受け取り、手を拭いたかっちゃんが猛追。

しかし、猛追虚しく
「僕、いちばーん！」
精神的には２５歳の大人なのだが、これはこれで面白いものだ。
「くっそー！いずくに負けるなんてー！」
目を強く瞑り、歯をイーッと剥き出しにしている。
これはなんて言えば良いのかな…満面の悔しみ？
「白熱したデットヒートを制した出久選手には賞品として肉の大きいカツ丼を進呈。惜しくも敗れた勝己選手。副賞として卵の多いカツ丼を贈呈いたします。おめでとうございまーす！」
お玉をマイク代わりにレース大会の司会のような振る舞いをする母さん。
何となく様になってしまっているから、新たな一面を見た気分になる。
思い出す過去の風景としては勝負事は全てかっちゃんに負けてきた僕。
こんな展開になったのは幼い時分では初めてだったのかもしれない。
少し良い気分かも知れない。
だから、こんな余興もやる気分である。
「えー！かっちゃんのが卵多いの!?そっちのが良いなぁ!!」
潜入調査の過程で培った演技力は健在。
あたかも隣の芝生は青いと宣う。
「いずくはお肉大きいから良いだろ！あーげなーいよー！」
いーな、いーな！と繰り返す。
童心に帰るというのも悪くないが、こんな場面お茶子さんには見せられないな。
恥ずかしくて。
「どーしてもって言うなら交換してやっても良いぞ！」
「どーしても！」
そう言うと、母さんは耐え切れず、遂に吹き出した。
それに伴いかっちゃん、僕の順に笑いが広がる。

こんな幼少期も有り得たのだ、と溢れる涙を拭いながら思う。
コレは笑い過ぎて出てきたものだ。
僕は自分自身にそう言い訳をした。

4．Ｔａｌｋｉｎｇ　ａｂｏｕｔ…（話すことは…）

「じゃーな、いずく。また遊ぼーな！おばさん、お邪魔しましたー！」
玄関で母さんと二人かっちゃんを見送り閉まった扉に鍵をかける。
「それじゃ、先お風呂はいっちゃいなさい。」
はーい、と気負いなく返事を返す。
着替えを用意して風呂へと向かった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「ふぅ…。」
身体を洗い、湯船に身体を沈めるに応じて肺から空気が押し出される。
夢や幻でないと断言は出来ない。
しかし、これが現実だとして…。
「またやり直せる。失った人々を救うことが出来る。」
水面に映る自分の顔。
その先に映るトレーニングとはまだ無縁の矮躯。
文字通りの幼児体型。
腕に目を向けてもかつてよりも三回り、いや四回りは細い腕に小さな拳。
「体作りが急務…と言っても成長が必要だから、あまり激しくはやれないか…」
上げていた拳を再度湯船に浸け、拳を解く。
そのまま両手で椀を作り、顔に湯をブチまけた。
「ふぅ。これから行うべき行動に順位付けしよう」
頭で考えていることを口にするのは僕の生来からの悪癖だ。
例え誰に注意されどもその悪癖は抑止もままならない。
「第一前提、敵連合の組織阻止。方法としてはオールマイトによるオール・フォー・ワンの打倒完遂及びオールマイトの重傷回避。そのためには、早い所オールマイトとの接触が急務。接触ルートの最有力候補はグラントリノ。連絡先及び住所を僕が知っていて且つオールマイトへの説明の信憑性ある証人として利用可能。第二前提、自己の

研鑽。雄英入学前約１０ヶ月間という短期間で成したあのトレーニングを自己の体型に合わせてアレンジ。目標はオール・フォー・ワンとオールマイトが接触する１０歳までにかつてと同様８０％フルカウルを無理なく使用出来る程度を目指す。そもそも、現状の使用可能許容量がいくつか把握出来ていないから、現状況の完全掌握を最優先とする。第三前提、お茶子さんとの再会。これはまだ四歳児という親の保護下から抜けられない現状であるため協力が絶対に必要。協力を得る最短ルートは…」ブツブツ…

気付けば既に十分。

湯船に浸かりすぎ、且つ考えるために頭を回転させていたためオーバーヒートを起こしかけていた。

よもや、頭から煙どころか火を噴いてしまう恐れもあったかもしれない…。

しかし、おかげで考えも纏まった。

「お茶子さんとの再会、現況完全掌握、オールマイトとの接触、自己の研鑽の順とする。」

そのためには…

「協力者を得なければならない、ね。」

ザバン、と湯船で波打つ。

その勢いのまま個室を後にした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「母さん。今少し良いかな？」

「どうしたの？改まって」

ソファに座ってニュース番組を見ていた母さん。

きっと僕の湯上がりを待っていただろう。

おもむろにリモコンを手に取ると個性的な角のキャスターが占める画面がブラックアウトした。

「ありがとう、母さん。」

「真剣な顔ですもの。話半分になんて出来ないわ」

身体ごとこちらを向いて話を聞く姿勢、スタンバイ、ＯＫ．

「今日僕に聞いたよね？『お母さんじゃなく母さん』って。理由があるんだ。」
母さんは僕の目を見て話を聞くもその内容でなく、原因に心当たりがなくて、目線が左上へと向いていた。
「そうよね、たしかに昨日まで『お母さん』って呼んでたのに、今日は朝から『母さん』って…」
疑問をぶつけたのに的を射た回答ではなかったために内心疑問が燻っていた様子。
それはそうだ。
人間、好奇心が突き動かす衝動には耐え難いものだ。
「実は、僕ね。未来から帰ってきた僕なんだ」
そのとんでもない告白にはいくら大らかな母さんでも取り乱し、混乱のあまり何もかもがフリーズした。
鳩が豆鉄砲を食ったよう、とはまさに母さんのこの表情を言うのだろう。
数十秒に渡るフリーズの後、母さんはコテンと首を落とすように傾げた。
「出久…熱でもあるの…？」
その線の方がまだ信じやすいけど、かわいそうな目で見るのはやめて。
確かに未来から帰ってきました、なんて言われりゃ頭のネジやヒューズが飛んだとしか思えない。
「変な心配させてごめんね。でも、事実なんだ。僕もまだ現状を把握しきれてないんだけど。」
朝の問答を例に挙げた。
今年が何年か。
「僕の意識では２Ｘ３９年なんだ。目が覚めたら、昔住んでいた部屋だと気付いてビックリしたよ」
一番ビックリしたのは、２度と会えないはずの母に会えたことだが、それは曖昧な笑みの裡に隠す。
自分が死んだであろうことも含め、伝えるわけにはいかない。

「電話した相手は僕のお嫁さん、母さんも初めて紹介した時は三人でテンパってたのをよく覚えてるなぁ…」
雄英高校が全寮制になって程なくしてからお茶子さんが口を滑らせたことから、僕もテンパり互いに告白し合うという意味わからない状況に陥ったのを覚えている。
両思いであると知って舞い上がり、何を口走ったかなんてまるで覚えていないが、とにかく「僕も好きだ、付き合ってください」と要約出来る内容を伝えたことだけは確かだ。
寮の共用スペースでブチまけたものだから、クラスメイト全員を巻き込んで大騒ぎになったんだよね。
かっちゃんにも「女から告白させるとかダセェことしてんな、クソがっ！」って言われたっけ？
その翌日には週末という事も相まって、外出届を出し、母さんに二人で報告しに行ったのだ。
今思えば順序も計画性も破茶滅茶で、あの頃は若かったと頬が綻ぶ。
母さんに未来の出久であることとなぜか戻ってきたことを順を追って説明するも相槌のほか、何の反応も見せないものだからつい捲し立ててしまった。
「勢いに任せて、捲し立ててごめんなさい。こんな事、いきなり言われても飲み込めないかもしれない。けど、荒唐無稽な話をしたのはお願いしたいことがあるからなんだ」
ソファに腰掛ける母さんのとなりに腰を下ろし、目線を合わせて「お願い」を伝える。
「この時代にお茶子さんも帰ってきてるんだ。だから、どうしても会いに行きたい。」
子供の座高ゆえ見上げる形にはなったが、誠心誠意お願いする。
どんな回答をされても食い下がる心算で視線に力を込めて、唇を引き結んだ。
「…ねえ、出久。」
瞬きすら忘れていた母さんが再起動。

そのまま、口から零すように僕の名前を呼んだ。
ん？と小さく返事を返せば母さんは続けて、口から言葉をポツリポツリと零した。
「私は出久にとって良い母親で居られたかしら…？」
その言葉に思わず、答えを失う。
どういう意味なのだろうか？
「当たり前じゃないか。僕にとっては最高で自慢の母親だったよ。」
薄っすらと笑みを浮かべてそう返す。
「…そっか…よし。」
持ったままだったリモコンをリビングテーブルに置き、中腰になってこちらに目線を合わせた。
「私は信じるよ、出久。可愛い息子ですもの。少し先の未来から帰ってきたって私の息子には変わりないわ。」
大好きだった懐かしい笑みを浮かべる母さんが眩しく見え、思わず目を細めてしまう。
「話に一貫性があったし、難しい言葉もちゃんと意味を理解しながら使ってるし。教えてないはずの言葉だって知ってるしね。」
毛の流れに沿うように数度僕の髪を撫で付けてから、母さんは立ち上がる。
「大人だったら一人で行けるかもしれないけど、見てくれはまだ子供ですもの。私が連れて行ってあげるわね？」
そう言いながら浮かべた笑みはいつもの包み込むような微笑みではなく、歯を見せながら笑う、まるでオールマイトのような頼りになる笑みだった。

5．Ｃｈｅｃｋ　ｍｙ　ｓｔａｔｕｓ（能力確認）

母さんの協力を取り付けられた翌日。
日の出と共に目を覚ました僕は、７時半までに帰る、と書き置きをした後家を出た。
「ココは片付ける前のまんまだなー…。」
都立多古場海浜公園。
その波打ち際。
海流の影響で海からゴミが打ち上げられ、それらが堆積している。
更に輪をかけて、ゴミを増やしているのは不法投棄。
元々ゴミだらけなんだから少しくらい増えたって良いよね、と大衆の心の内の何処かで囁くーー所謂『割れ窓理論』のモデルケースだ。
当時中学三年。
オールマイトからの課題により、この海浜公園の清掃を行った。
小さなものは割れたビン。
大きくなれば家電製品や果ては軽自動車まで捨てられていた。
現状をざっと見回しても、ボロボロのトラックタイヤが数本転がっているのが見えた。
自己研鑽に励む一環として、ここの片付けも並行して行おう。
以前は十ヶ月と言う縛りがあったが、今度は年単位で時間が取れる。
成長に合わせて行うこととする。
「さて。周りを見ても早朝と言うこともあり、誰もいないし…現状の確認をしよう」
お茶子さんは個性の成長は変わってない、と言っていた。
操作に関してはそうなのかもしれない。
受け継いだ当初は全身に０か１００しか出来なかったが、昨日試した時は右人差し指のみを強化することが出来た。
ただ許容上限に関してはどうなのだろうか？
出来ることと出来ないことの線引きの為に来た。
「フルカウル」

全身常時強化を起動。
1%で全身を強化し、親指で押さえ付け、引き絞った人差し指を弾き出す。
技として2番目に習得した〝デラウェアスマッシュ〟
まだ強化が低いからか特に反動はない。
今回の検証方法としてフルカウルで全身に纏い、デラウェアスマッシュで問題がないかを確認する。
フルカウルの上限では纏うだけで全身に負担が掛かり、デラウェアスマッシュは最悪指の腱が切れ、内出血を起こすだろう。
そのギリギリを見極める為に1%ずつ強化度合いを上げて行く。
痛みが走れば、その場で終了。

…なのだが。

━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━
「SMASHッ!!」
海面が左右に割れ、白波が飛沫を立たせる。
渦巻く風が水平線を目指して直進し、遥か彼方の雲に風穴を開けた。
「…100」
僕は唖然としていた。
今の僕は何の鍛錬もしていない子供の体のはずだ。
死柄木との戦闘直前に確認した上限はフルカウル80%だ。
瞬間的には100%も扱えるようにはなっていたが、それでも痺れや突き指の覚悟を持って扱っていたのだ。
それが幼いはずの今の自分はいとも容易く上回る結果となっていた。
フルカウルによる痛みはない。
デラウェアスマッシュでの骨折も起きていない。
ならばと今度は拳を握った。
「テキサスSMASHッ!!!」
小さな拳が空気の壁を叩き壊す音が聞こえた。

その快音は衝撃波を伴って水上を突き進み、水平線の向こう側へと消えていった。
ゾクリ、と僕の身体震える。
オールマイトの後継者として選ばれて以来この領域に至るべくずっと鍛えてきたのだ。
『筋肉が増せばそれだけ扱える領域が増える』とオールマイトは言っていたが、筋肉が無い状態の今の僕が１００％を扱えた。
「…今までよりも使えてる…これならば、もっと助けることができる…もしかしたら、鍛えれば更に出力が上がるんじゃないか…ならば、筋トレは当然として、身体の扱いが下手と言う僕の弱点の克服のために何か訓練すべきだな…リズム感の形成にダンス、可動域拡張の為にヨガ、それに我流の戦闘術よりも何かを習うべきか…？時間はある、取捨選択の幅は広い…以前の弱点克服と幼少期ならではのバランス感覚や戦闘勘などのセンスの形成…幼い頃、鈍臭く運動が苦手だった僕はそれをひっくり返すチャンスを得たんだ…下地の発育は急務だ…戦闘勘はグラントリノに稽古つけてもらえないかな…オールマイトとの接触を含めて一石二鳥だ…」
ブツブツと口に出して頭の中を整理する。
誰にも見られていないのだし、気にせずブツブツ続け、自らの成長に必要な要素を列挙する。
「筋トレやヨガによる身体作り、ダンスによるリズム感育成と体幹形成、我流でなくキチンとしたセオリーを習い移動術や捕縛術の習得、力を正しく振るう為に拳法などの技術鍛錬…幸いワン・フォー・オールの運用技術に問題はない。けれどただの力押しでは過剰な攻撃で相手を殺してしまう可能性だって大いにあるんだ。その可能性の排除の為にそう言った適切な力の振るい方を学ぶ必要がある。」
打ち寄せる波に目を向けながら自らの課題を口にする。
「まだ時間はある。ヴィラン連合が組織される前にオールマイトに協力して決着を着けるんだ…」
海上にその全貌を露わにした太陽を翳した手の隙間から覗き見ながら、最終目標を口にした。

―――――――――――――――――――――

一通り確認を終えた僕は手ぶらで帰路を駆ける。

フルカウルでの移動は試していなかったので、試験も兼ねて１００％で路地裏などの悪路を走る。

踏み込みで足元を壊さないように走り、壁や柱を足場に立体的に駆け、商店街の路地裏から壁蹴りの要領で上に上がり、そのまま屋上を飛び跳ねながら家を目指した。

「パルクールの技術指導してくれる人って誰かいたかな…」

基礎訓練だけでも構わないから、我流移動術の穴埋めをしたい。

家の近くまで来て見覚えのある一軒家の屋根から飛び上がり、マンションの三階へ向け、飛び出す。

そのまま、欄干を掴んで強化した膂力で引き上げ、自宅の前の廊下に着地した。

「出来ていたことはそのまま出来る…と言うことでいいんだろうか…？それにしても全力疾走で帰ってきたのに息が上がるどころかじんわり汗をかく程度しか変わりがないや。強化なしだとどの程度の運動能力なんだろう？」

そんな疑問を口にしながら、右手でポケットを漁って家の鍵を取り出す。

左手首に付けた子供用の腕時計（オールマイト仕様）の時間を確認する。

７時２５分。書き置きに書いた五分前だ。

「ただいまー」

遠くからお帰り、と声が聞こえた。

焼ける魚の匂いがする。

シャワー浴びるね、と靴を脱ぎながら母さんに伝え、自室の扉を開いた。

着替えを用意して風呂場に直行。

数分で潮風を浴びてベタベタになった体を汗と一緒に洗い流す。

風呂から出て、髪を乾かしながらリビングに向かうと食卓には既に料理が並んでいた。

「手伝わなくてごめんね、母さん。今の自分にできることの確認をしてきたんだ」
席に着きながらそう言い、母が差し出す茶碗を受け取る。
「いただきます」
シャケの塩焼きに手を付けると母さんから疑問が投げかけられた。
「自分の【個性】のこと？未来ではヒーローになってたって言ってたけど、どんな【個性】なの？」
「一応、突然変異型（ミューテーション）らしいんだけど、オールマイトみたいな超パワーだよ」
継承云々は言うわけにはいかないから、言い訳は嘘で誤魔化す。
その後、僕は茶碗を置いてデモンストレーションを見せる。
パリッと緑光が迸り、隣のダイニングチェアを親指と人差し指の二本だけでつまみ上げた。
本来子供の力で持ち上げるのが難しいだろう重さの椅子を持ち上げてみせた。
デモンストレーションの結果、母さんは目を開いたまま固まり、箸に乗っていたご飯がテーブルに転げ落ちた。
「母さんや父さんみたいな【個性】だと思って物を引き寄せようとしたり、火を吹いたりする練習をしてたんだよね。確か、無個性だって言われた後だから今時期か。懐かしいな」
ゆっくりつまみ上げた椅子を下ろし、僕は食事を続ける。
母さんが思考停止から戻る頃には僕の前には空の食器しかなかった。
それらを一つにまとめ流しに持っていく。
しかし、流しに入れようにも手が届かなかった。
幼く低い身長が恨めしい。

6．Hang up after you（君の後に切る電話）

『おはよーデクくん。昨日電話くれるかと思って電話の前で待ってたんだよ？』

食後お茶子さんに電話をすると僅か2コールで繋がった。

後で、と言ったのに連絡しなかったのは僕の落ち度だ。

素直に忘れてしまったことを謝るほかない。

「お茶子さんごめんなさい。かっちゃんに会ったり、母さんに現況伝えたりして忘れてしまいました。」

『せめて顔を見て謝ってほしいなー』

電話越しでも分かる不機嫌な声音。

ツンツンとした刺々しい言い草。

きっと丸く大きな目は半分ほどに細められているだろう。

「そうだね、会いに行ったら直接謝るね。」

『って、爆豪くん？あ、昔に戻ってるから生きてるはずだよね。懐かしいなー。それにお義母さんに話したん？全部？』

「未来から戻ってきた事だけだよ。【個性】のことは…まぁ、言える範囲だけ。あとは、なんで戻ってきたかとか未来では誰が何してるとかは話してないよ」

『そーやね。それが賢明かも。』

「母さんに未来の奥さんもこっちに戻ってきてるから会いに行きたいってお願いしたんだ。その為に話さざるを得なかったんだよね」

どうしてその選択に至ったか説明すれば、理解してくれる。

理解したなら、その考えを支持してくれるんだ。

そして、出来るだけの事をして支えてくれる。

初めて会った時と変わらない。

お茶子さんの特に良いところだ。

『それなら私も父ちゃんと母ちゃんに説明しておいたほうがいい？』

「出来れば一緒に説明したいって言うのは、僕のワガママかな」

『んー?どうして?』
その心は、結婚する際に麗日家に挨拶しに行った時、あまりの緊張でガチガチになって醜態を晒した。
そのリベンジを果たしたいのだ。
『なるほどね。ええよ?今度はカッコいいデクくん見してね!』
受話器から聞こえる彼女の声が僕の鼓膜を揺らす度に僕は少しずつ天に召されていると思う。
「お茶子さん。」
『なーに?』
「可愛すぎて反則です」
『か、かわっ!?』
電話口であたふたする様子が聞こえてくる。
きっと頬を真っ赤にしているに違いない。
「出来るだけ早くそっちに行くから。日程決まり次第また連絡するね」
『むー…(イキナリ可愛いとか反則はそっちやん…。)』
少し遠くからボソボソと何か言うのが聞こえたが、内容までは聞き取れなかった。
僕の言葉に反応がなかったので、何度か「もしもし?」と呼び掛ければすぐに
『あ、ゴメンね。聞こえてたよ。連絡、待ってるね』
「うん、お茶子さんも何かあったら連絡ちょうだい」
『うん!』
声音から僕の好きな麗かな微笑みを浮かべているだろう事は察しがついた。
僕もその声に感化され、自分でも分かるほどの笑みを浮かべた。
『大好き』
「大好きだ。またね」
相手が着るのを待ってから僕は受話器を下ろした。
通話を終えて振り返れば、廊下とリビングを隔てる扉から母さんが覗いていた。

「…い、出久がオトナな表情をして女の子にラブコール…」
「ラブコールってもうあんまり聞かないね…。一応、精神的には大人だし、未来の奥さんだよ？愛を囁くくらいするでしょう？」
出久が!?大人になった!?って大声で叫びながら大号泣を始める母さん。
…しまった。子供の成長を一足飛びにしてしまったから、母親の感性の成長に追いついてない。
ケアを怠ったなぁ…と右手を後頭部に回し、指先で数度掻く。
そりゃあ、数日前まで母親にベッタリな甘えん坊だったはずなのに急に凛々しく他の女の子に愛を囁いているのだ。
こんな反応も頷ける。
ましてや、僕については殊更にオーバーな母さんなのだから、こうなって当然だったのに考えが至らなかったな。
どうすべきかと、考えを巡らせているうちに母さんが泣き止み立ち上がる。
「そうよね、愛する奥さんに会いに行くんだもの。出来る限り早く会いに行くべきね。出久、先方に連絡なさい。お父様とお母様が揃ってご在宅なのはいつか確認してアポを取るのよ。」
大泣きしながら決心が決まったのだろう。
いつも見せる大らかで少し内向的な性分は鳴りを潜めていた。
その目には決意の炎がメラメラ燃えており、曰く「お母さん、頑張っちゃう」
親子歴２２年だったが、その様は初めて見る。
息子の僕をして、「お、おう…」としか反応できなかったのは致し方あるまい。
『もしもし、デクくん？』
「あー、お茶子さん。お義父さんとお義母さんっていつスケジュール空いてる？」
『えっと、父ちゃんは休みないからお昼の時間で会えると思うよ？母ちゃんも事務で一緒やから家にいるはずやし。どうかしたの？』
「えっと会いに行くのにアポを取りたいんだけど、時間作ってもらえ

ないかな？」
母さんが燃えちゃって、と言う言葉をすんでのところで飲み込んだ。
『そうしたら、聞いとく。家に来てもらうより会社に来てもらうと思うから、来客のアポイントで取っとく』
「ありがとう。こっちは母さんが張り切ってもう荷造り始めてるんだ…」
『最短だと明後日とかに会えるかな、デクくん…』
「そうかもね。待ちきれないよ、お茶子さん」
『私も待ちきれへんよ、デクくん…』
淀みなく続いた会話がプツリと途切れた。
お互い予期せぬ沈黙。
されど悪い心地はしない。
数秒の間を僕は惜しみながら破った。
「それじゃ、よろしくね。今度はそっちから連絡ちょうだい」
『うん。分かった。バイバイデクくん。』
「じゃあね、お茶子さん」
そうしてまた切るのを待つ。

待つ

待つ

切られない？
『もしもし？デクくん？』
また受話器からお茶子さんの声が聞こえた。
「どうしたの？」
『なんでデクくんいつも自分から切らないん？』
「こうやって何かあった時にすぐに話を続けられるようにするためだよ」

『そう言うコトはっきり言えるのホンマずるい…』
うぅ…と喉の奥から捻り出すような唸り声が聞こえ、思わず僕は苦笑した。
「ハハ…それじゃ、僕から切るね。またね?」
『うん。またね』

会話が途切れたところで受話器を置いた。
先に切るのは新鮮だ。
いつも僕は後から切るようにしてたからだ。
あんな風に言われたってことは何か煩わしかったのかな…?
「出久…紳士的な振る舞いなのね…」
振り返れば荷造りを始めていたはずの母さんが先ほどと全く同じ姿勢で扉から覗き見ていた。
「母さん、そんな覗くみたいじゃなく堂々と見てくれていいよ?」
そんな陰から涙を流しながら覗かれてるとストーカーや幽霊の類と勘違いして驚くから本当にやめて欲しい。
あとその涙はどう言う意味の涙なの?
子供の成長?それとも整理しきれない親心?
僕は続けて苦笑いした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
それから数時間後、昼食を摂った後にけたたましい呼出音が鳴る。
表示された番号は先ほど電話した時と同じだった。
「はい、緑谷です」
『デクくん、こんにちは。』
相手はお茶子さん。
話の内容は先ほどの回答だろうけれど、テンプレートだが、一応問い掛ける。
「お茶子さん、こんにちは。どうかした?」
『さっきのアポの件なんやけど、明後日時間作ってもらったから、十三時くらいに会社まで来て』

「うん、分かった。わざわざありがとう。」
会社の住所は分かるよね？と問われるも、以前に何度も伺ってるから問題はない。
「それじゃあ、明後日十三時に麗日建設ね」
『来るの楽しみにしとるよ！』
「僕も会えるの楽しみだよ。それじゃあね」
そう言って今回も先に切った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

Ｓｉｄｅ：Ｏｃｈａｋｏ　Ｕｒａｒａｋａ

「じゃあね」
そう言って二秒ほどで切断を示す音が鳴る。
さっきなんで後から切るのか確認したから先に切ってくれたのだろう。
私も受話器を置いて自室へと戻った。
「デクくん来るのは明後日かー…楽しみだなぁ」
そう言いながら私は、思わずニヤける口角を押さえつけるように両頬を両手で挟み込んだ。

7. How to reach the best（最高に至る筋書き）

「出久。最終確認よ」
予定を決めた日から2日。
約束した9月5日。
張り切る母さんを前に僕はボストンバッグの口を開く。
「2日分の着替え！」
「小分けにして袋詰め」
「アメニティセット！」
「オールインワンのセットが二人分」
「歯ブラシ！」
「アメニティセットと一緒。僕はこれで十分だよ、母さん？」
2日前から連れて行くことを決めてすぐさま用意して、昨日の寝る前も確認していたのに、起きてからもまた確認しているとはさすが母さん。心配性ここに極まれり、と言ったところか。
「長い時間電車と新幹線に乗るけど、大丈夫？暇にならない？」
「こんな見た目だけど、中身は大人だよ？そんなに気にしなくても大丈夫だって」
昨日のうちに買ったノートと鉛筆をリュックの中に入れて出かける準備は万端だ。
ハンカチとポケットティッシュも入れてある。
「途中でお菓子買う？」
「要らないよ。もう出ないと新幹線の時間に間に合わなくなっちゃうし、早く行こう？」
土壇場でワタワタ慌てるのは僕ら親子の悪い癖だ。
その様をみてやっぱり親子だなぁと思う。
ボストンバッグを今度は母さん自身で確認してからその口を閉じた。
その直後、自らが部屋着から着替えていないのを忘れていたため、

大慌てで着替え出す母さん。
その様を、横目に僕は部屋を出て、水回り・ガスの元栓・戸締りを確認した。
「母さん、戸締り確認出来たよ。もう出れる？」
部屋に入らずに声をかければ、あとちょっと―！と言う声が扉越し聞こえたので、僕はそのまま玄関へと足を向けた。
―――――――――――――――――――――
「ふぅ。やっと座れたね」
予定していた新幹線に乗り込み、持っていたボストンバッグを母さんに預け、飛び乗る様に席に着く。
「バッグ、重かったでしょ？私に任せてくれてよかったのに」
「このくらいなら問題ないよ。いい筋トレだと思えば、へっちゃらだよ」
そう言って母さんに顔を向けると、「久さんそっくりになってるぅ…」と口を押さえながら涙を流し始めた。
涙腺弱いのは知ってるけど、一昨日から感涙しすぎじゃないかな…。
「名古屋乗り換えだから大体一時間半くらいかしら？」
「そうだね、そこから近鉄に乗り換えて一時間半くらいだから、十二時には最寄りにつけると思う。だから、電車の中でお昼取っておいた方が合理的だと思うんだ」
そう言っていると体全体に軽やかな衝撃を感じる。
僕らを乗せた車両は西へ向けて滑る様に走り出した。
窓の外へ目を向ければ後ろに景色が早まりながら流れていく。
スマホを取り出した母さんに目を向けると凄い勢いで何かを打ち込んでいた。
横目で確認すれば、「ウチの息子が立派になって…」と言う報告を父さんに送ろうとしていたところだった。
母さんの親バカだって疑われちゃうから、ほどほどにお願いね、と音にせず独り言ちた。
リュックからノートと鉛筆を取り出す僕。

前の座席のテーブルを取り出そうとして漸く気付いた。
しまった、高さが足りない…。
座席テーブルを使って書くのを諦め、開いたノートを表紙同士を重ねて持つことで書いてる途中で曲がったりしないように書くことにした。
小さい体って実は凄く面倒なんだなぁ…。
僕は過去に思いもしなかった苦労と未来の同級生の苦労を偲んで涙を一滴零した。
峰田くん…頑張れ…。
僕はノートに今後の予定、トレーニングメニュー等をつらつらと書き連ねて行く。
母さんがその様を見ながら呆然としていたことに気付かずに新幹線は走る。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

お茶子さんの実家の最寄りに到着。
時刻は十二時丁度。
約束の時間にはやや早いが見るものもあまり無いので、やや小腹も空いてきたのもあって、駅近くのファーストフード店に入ることにした。
「半ごろにタクシーに乗れば十分前には現着出来ると思う」
「ホント、大人な出久は頼もしいわね…」
母さんのリアクションは、この三日間でもう驚きよりも呆れの割合が大きくなっている様に感じる。
見た目が幼いが故に、未だに感覚が追いつかないのだろうなぁ…。
「ねぇ、出久。これから行く麗日さんのお宅って建設会社なのよね？会社でお会いするって聞いてるけど、行ったことあるの？」
「うん、全部で４回かな？学生時代にお付き合いの報告と夏の帰省、卒業前に結婚する旨を伝えて、それから…」
母さんの葬式の後に一週間お世話になったんだ。
首だけが収まった棺桶を見つめる僕をお義父さんは肩を掴んで無言で慰めてくれたんだったな。

頭に当時の状況が過ぎるも、表情を微塵も変えない。
昔、オールマイトに教わった。
笑顔の仮面で本心を隠せ、と。
「仕事が安定してから一週間くらい遊びに行ったんだよね。資材置場も兼ねてるから敷地が広くて、訓練にはもってこいだったんだよね」
懐かしいなぁ、と呟きあたかも当時の様子を思い出しているように演じる。
考えるな。
考えるな。
今は母さんも居るんだから、何も悲しいことは無い。
だから、考えるな。

「ねぇ、出久。」
ふと、穏やかでありながら緊張を孕んだ声が掛かる。
「何か…あったの？」
その瞬間、僕の表情筋が文字通り凍り付いたと思う。
しかし、何とか不自然になる前に立て直せたので、「何でもないよ？」と誤魔化した。
「そう、それならいいわ」
そう言いつつ、母さんは笑顔を見せる。
が、それは取り繕いきれていない心配を滲ませた笑みだった。
「細かい話はまた今度話すよ。久し振りに来たし、ナゲットとオレンジジュースが飲みたいなー」
あからさまな話題のすり替えだが、母さんも話題を流してくれたので、危機は脱した。
未来に起こる不幸は未然に防ぐ…。
僕らの知り得る不幸は必ず…。
大元を辿れば今より五年後のオールマイトとオール・フォー・ワンの衝突。
そこで悪の帝王を仕留めきれなかったのが、その後に続く不幸の始まりだった。

死柄木…志村転弧の堕落、ヴィラン連合の結成、雄英高校の失墜、多くのヒーローの殉職、友人たちの死…。
僕らプロヒーローは後手に回りながらも最善を尽くし、それらの不幸に立ち向かった。
ヴィラン連合の最初の事件から関わり、教師オールマイトの一期生となった僕ら１５４期ヒーロー科はプロヒーローになってすぐに世間から『次代の【象徴】』と称された。
そして、ヴィラン連合との抗争が激化し、約半数の友人たちがその命を落とした。
そんな未来は認められない。
いくら、死柄木を、連合の首魁を倒し平和を齎したとしても、欠けたピースが埋まることはない。
僕らが過ごした世界は最善ではあったが、最高ではなかった…。
「…コレはチャンスだ…最高を目指すチャンス…」
隣でコーヒーを啜る母さんに聞こえないよう、口の中で言葉を噛み砕く。
雰囲気は努めて明るく、まるで心配などないように。
ディップしたナゲットを口に放り込んでから、母さんに向くといつもの穏やかな笑みがあった。
先ほどの心配と緊張は拭えたようだ。
話の流れとはいえ、危なかった。
まだ現実になっていない不幸を口にして心労をかけるつもりは毛頭ない。
コレは僕と僕の彼女が最善の未来を最高の未来にするためのやり直しなのだから。
その覚悟をジュースと一緒に飲みくだし、蓋を開けて氷も纏めて噛み砕いた。

8．Ｔｈｅ　ｅｎｄ　ｏｆ　ｈｅｒｏｉｎｅ（彼女の最期）

Ｓｉｄｅ：　Ｏｃｈａｋｏ　Ｕｒａｒａｋａ

ヴィラン連合との決戦。
それは私とデクくんで死柄木を抑え、その間に黒霧を捕らえる作戦であった。
付随する作戦として、私とセメントス先生でコンクリート塊の投下による新造脳無のチャンバー同時破壊を先行して行い、黒霧の取れる択を削る。
その後の捕物は黒霧に対する波状同時攻撃による人海戦術を予定していた。
神野の悪夢の時にオールマイトたちが取った作戦と奇しくもほとんど同じで、【ワープ】という個性の対策法としてこれ以上ない対処法であった。
しかし、その手法は八年前の作戦で既に手の内が割れている。

ヴィラン連合の対策としては単純。
脳無が足りなきゃ増やせばいいじゃない。
一つで足りなきゃ増やせば良いじゃない。
、と。

神野区の時は一箇所だったためにそんな単純な策が思いつかなかった、と作戦を立て指揮していたヒーロー：センチピーダーが無線越しに吠えていたのを聞こえた。
私の役割はコンクリート塊の指定ポイントへの投下だけだったので、その結果については死柄木の真ん前で聞く羽目になる。
「全ヒーローに告ぐ。狼狽えるな。黒霧を抑えれば、被害を極小まで抑えられる。脳無が出た場合のプランに切り替えろ。好き放題させ

るな、僕らが来たことを教えてやれ!!」
死柄木を睨みつけながら、オープンチャンネルで大声を張り上げるデクくん。
”勝ちたいって気持ちが強くなると言葉遣いが荒くなる”
爆豪くんのお葬式で寝顔の彼に言っていた。
一生言えないと思ってたって言葉を添えて。
”勝ち”のイメージ。
”勝利の権化”
ヒーロー爆心地は粗暴で粗野な口ぶりが目立つもその鮮烈な闘いぶりで人気を博した。
その彼が後押しするかの様に、死柄木と言葉を交わすデクくんの語調は荒れて行く。
私もサポートとして戦いながらその言葉に奮い立たされて、いつも以上の動きが出来ていたと思っている。

その均衡が破れたのは、デクくんと死柄木の最初の衝突から凡そ三時間ほどしてから。
誰かから無線に黒霧を見失ったとの報告が入る。
脳無が暴れた隙に相澤先生の…イレイザーヘッドの抹消を逃れた、と。
そこからは早かった。
数秒前まで飛び跳ねながら瓦礫を無重力にして吹き飛ばし解除して、を繰り返していた私に突如何かが触れる…生暖かく不気味な感触を。
感じた時には全てが遅かった。

まず、視界が傾いていくのを感じた。
右足で踏み込んでバランスを取ろうとするも一向に改善出来ない。
慌てて受け身を取ろうと両手を出すも左手が肘から下がなかった。
パッと後ろを振り向けば、黒い靄から覗く病的な青白さの両手が見覚えのある足と手を左右の手に持っていた。

（…やられた…っ!?）
死柄木の崩壊によって瓦礫だらけの街に変貌して、真面に足場と呼べる箇所がなくなっていたのが災いした。
右の太腿から下が無くなったがために受け身が取れず、瓦礫の山を疾走の勢いそのままに転げ落ちた。
右手だけで抑えきれず顔面を打ち付け、バイザーが粉々に砕けた。
打ち付けた際に頭も切ったようで心臓の鼓動のたびに全身あちこちから血が出てることを薄っすらと知覚した。
狭まる視界を無理に巡らせると、驚いたことに女の子がいた。
怪我は擦り傷程度で大したことがなくて本当に良かった。
崩壊と超パワーと言う二人の個性の組み合わせ上、周りに甚大な被害が出ることは予想出来ていたため、全ての住人を予め避難させたはずだった。
「…こちら、ウラビディ。〝会場〟にて…要救助者一名を…発見。…至急、保護願います…」
無線越しに誰かが誰かに指示を出している。
その無線の中で一番大きな声が響く。
『ウラビディ、自分の負傷の報告は!?大丈夫か!?』
デクくんだ。
物凄い風切り音が無線越しに聞こえる。
彼は駆けながら、居なくなった私を心配したのだろう。
『こちら、ドミナント。黒霧をこちらで捕らえた。イレイザーによって抹消されているので、逃亡の恐れなし。【個性拘束薬】を注入。無力化完了』

ドミナント…心操くん…。
遅いねん、と私は心の中で毒づく。
そもそも、なんでこんなに時間掛かってん。
死柄木と交戦始めてからもう結構経っとるんよ？
脳無を無力化するのにそんなに手間取ってたんやろか…。

「こちら、ウラビディ…。左上腕…右大腿部を喪失…それと頭部出血…。程度は…不明。現在、身動き取れません…」
無線の向こうで誰かが誰かに何かを伝えてると言うことは分かっても、誰が誰に何を言っているのか理解出来ない。
ガヤガヤとした雑音にしか聞こえない。

少しの間意識が飛んでいたようだ。
遠くにいたはずの女の子が私に縋り付いて泣いていた。
決して声を出さないように片手で口を押さえながら。
されどその嗚咽は殺しきれず、小さくしゃくりを上げていた。
「デクぅぅぅぅぅ!!!」
突如少女が叫ぶ。
次の瞬間には暖かな手の感触が背中から消えていた。
首を動かす余力もない。
倒れた時のまま右を向いてうつ伏せる。
視界の端に見覚えのある緑の服が映った気がした。
先程の少女が言ってたように彼が来てくれたのか。
「遅くなってごめんね…お茶子さん…」
やはり来てくれていた。
私の心は喜びでいっぱいになり、痛みがどこかへと飛んでいくのを感じた。
「あー…デクくん…。おつかれさまぁ…」
しかし、血を流しすぎたのだろう。
普通に受け応えしようにも、どうにも間延びして、途切れ途切れになってしまう。
気絶して休んで落ち着いたからか、頭が少し回り始める。
私の救援要請を聞いて、飯田くんがエリちゃんを連れて走っているようだ。
…正直に言えばデクくんはともかく私は無理っぽい…。
そう考えていたら、デクくんがヤバめの吐血をした。

呼吸器系と消化器官のいくつかをまとめてダメにされてるみたい。
「お互い…間に合いそうに…ないねぇ…」
「そー……だねぇ…。」
その後私たちは、二人分の血溜まりに溺れた…。
…はずでした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
まだ真っ暗だったのに目が覚めた。
今のが夢だった？
いや、それにしては随分と鮮明な夢を見たものだ。
体を起こし、ベッドの脇のチェストに手を伸ばす。
いつもそこに携帯電話を充電クレイドルに入れておいているのだ。
寝惚け眼を擦りながら、手探りで取ろうとするも…違和感を感じた。
手に触れる感触は畳。
うちはベッドのはずだからまだ空を掻いてる高さのはずなのに、確かな硬さを伝えてくる。
慌てて体を起こしてみれば、仕事による生傷の痛みなどまるでない。
手を翳せば、両手がセットで付いており、見慣れた肉球も十本一セットで付いていた。
ホッとするのも束の間、先ほどを上回る強烈な違和感。
吹き出る冷や汗を無視して、明かりを付けようと布団から出ようとする。
立ち上がり、その第一歩が引っかかり、…強烈に隣に眠る人を蹴りつけた。
「ぐぼぉっ!?」
何かに引っ掛けた、と咄嗟に両の手のひらを指先で触れ、壁に足から着地した。
「ご、ゴメンね！」

「…な、何すんねん…お茶子ぉ…」
「ゴメンね、デクく…ん?今の声…父ちゃん…?」
今度は引っ掛けないように、ゆっくりと移動し、明かりをつける。
「ここ…実家やん…?」
「凄い声が聞こえてきたけど、何してんの?」
襖の開く音に振り返ればエプロンをつけた母。
その見た目は幼い頃のままのよう…。
そこでようやく自分の異常が何なのか気付いた。
「…コレ、タイムリープってやつとちゃう…?」

――――――――――――――――――――

「それで、カレンダーやら自分の個性のこととか色々確認してるうちにデクくんから連絡来たんよね」
時は流れ、麗日建設会議室。
僕と母さんは一足先にお茶子さんと再会出来た。
お義父さんが打ち合わせの関係で十五分ほど遅れるとのこと。
お互いにもう既に慣れたが、出会ってすぐはお互いに三分ほど固まってたと思う。
僕も彼女も上から下まで舐めるように視線を動かす。
だって、あんな可愛い子見たことないよ?その服装も精一杯背伸びしたオシャレをしているように見え、輪をかけて可愛く見える。それに加速度的に染め上がるその頬の丸みもまた可愛らしい。
たっぷり時間を溜めたのちに、僕らは奇遇にも同じセリフを吐いた。

「「…天使か…」」

それを聞いた瞬間、二人して声を上げて笑った。
その後はお茶子さんが認識している限りの情報を聞かせてもらって、ようやく現在に戻る。
母さんは気付いたら部屋から居なくなっていたが、しばらくすると

麗日夫妻と共に部屋へと入ってきた。
「こんにちは、初めまして。僕は緑谷出久です。未来から戻ってきました」
まず挨拶のストレート。
挨拶と目的を簡便かつ強烈にイメージさせる文句。
様子見のジャブじゃ余計に時間かかるので効率化。
ぶっちゃけ、頭が悪いと思うけど現状をありのまま伝えれば、このようになるので仕方ない。
「こんにちは、麗日お茶子です。未来のデクくんのお嫁さんです」
隣で母さんに挨拶するお茶子さん。
更なる協力者を得る為に必要な説明会が始まった。

9. Three family conferences（三家族会議）

「まず、状況を掻い摘んでご説明させていただきます」

そう言って僕は話し合いの口火を切る。

「先ほども言ったように僕とお茶子さんは未来から戻ってきました。ちょうど２Ｘ３９年の９月１日に就寝したところ、２Ｘ１９年９月２日にお互いの実家にて目を覚ました、というのが僕らが認識している状況です。現在のところ何が理由で戻ってきたのか不明ですが、僕はこの状況を喜ばしく思います。」

そう言ってお茶子さんの目を見ると、僕の言いたいことを汲んでくれたようだ。

「私とデクくん…出久くんは二人ともトップヒーローとして仕事をして充実した毎日を送ってました。まだ、子供は出来てなかったけど、それでも幸せな毎日でした。そんな幸せな日々を過ごしていても、望まない結末ってのはいくらでもあると思います。」

少しずつ、伏し目がちになるお茶子さん。

続いて目を向けるのは母さんにだ。

「インコさん。もう出久くんからお聞きになって、その事を信じていると思います。本来私たちが高校生で出会うはずが、１２年も先んじて会っているのは、私たちのタイムリープの証明になると思いますが、信じてもらえますか？」

母さんは言葉は出さず、首肯だけで答える。

「父ちゃん、母ちゃん。信じてもらえると思えなかったから、デクくんと相談してこの場を設けさせてもらったんよ。出来る限り、説明するから私のお願い聞いてもらえんかな…？」

母さんに対する話し方と違って、幾分砕けた話し方。

僕と話す時とそう変わりない。

あまりに突飛すぎる話である。

お義母さんは目に見えて慌て、お義父さんをチラチラと見ている。

逆にお義父さんは両腕を組み、背凭れに体全体を預け、瞑目していた。
「緑谷…出久くん、と言ったかね。」
「はい。」
「ウチの娘が君のことを『デク』と呼んでいるがその経緯について説明してもらえるかい？」
僕はその質問に思わず首を傾げてしまう。
何故今その質問なのだろうか？
「…もともとは僕の幼馴染がいつまでも個性が出なかった僕に対して名前の読みと何もできない『木偶の坊』を捩(もじ)った蔑称でした。」
机の下で指遊びをする。
遠回りに、コレは馴れ初めを聞かれているのだと、答えながらようやく気付く。

「まだ自己紹介もしていなかったので幼馴染が叫んだデクが僕の本名だと勘違いした彼女に初めてそう呼ばれたんです。その時、彼女がこう言いました。『デクって頑張れって感じがして好きだ』と。その時嫌いな蔑称が好きなあだ名になりました。」
あれは入学日、二度目の邂逅。
僕らＡ組は式やガイダンスをすっ飛ばして個性の把握テストを行ったあの日。
まだ０か１００かしか調整できなかった僕は、人差し指の痛みとともに覚えている。
気づかぬ間に机に落ちていた視線を持ち上げ、お義父さんと目を合わせる。
「そうして、自らに付けたヒーロー名がデク。いつの日か役立たずになるための名前です。」
目を開け、聞いていたお義父さんは再度目を瞑り、姿勢は変わらず不動のまま。
一呼吸吸って吐き、そこに微かに納得を思わせる唸りが混じった。
「２０年後と言ったね。高校を卒業してプロとして働き始めてそこそ

この頃合いだろう？若手注目とかで取り上げられたりとかしていないのか？」
　これまたひょんな質問だ。
　意図が分からず、聞き返そうかと思ったが、お茶子さんに機先を制される。
「ウチらの代は『次代の象徴』って呼ばれてるんだから。デクくんだって、師匠に恥じない人気っぷりだよ？」
　何たって三強の一角ですから、と腰に手を当て胸を張るお茶子さん。
　見たまま幼いなりなので、思わず「可愛すぎか!?」と叫びそうになるのをぐっとこらえる。
「…名門出で、稼ぎよし、性格も良く、夫婦仲も良好…。」
　…顎に手をやり、呟くお義父さん…なんだか不穏だが、よく僕がやるポーズだと対岸から指摘を受ける。
「よろしい。ならば、俺は全てを信じよう」
　結論、お義父さんが出した答えは全肯定だった。
「いいの、父ちゃん？自分で言うのもなんだけど、相当荒唐無稽だよ、私たちが言ってること？」
「構わんさ。会話の端々で分かる知力と堂々たる様、目に映る覇気。どれを取っても齢（よわい）４つの子供に出るもんじゃない。未来から戻ってきた、なるほど十分納得出来る。」
　そう言ってお義父さんは初めて見慣れた笑みを顔に浮かべた。
「母さんは質問大丈夫か？慌ててる間に俺が仕切っていくつか聞いたけどよ」
「私はええよ？お茶子とあなたが納得してるならそれで」
　お義父さんの隣でお義母さんが、お茶子さんの麗らかな微笑みよりもいくらかおっとりさせた笑みを浮かべる。
　本当に気持ちのいいご両親だ。
　２年ぶりに会った義父母は最後に会った時よりもはるかに若い姿だった。
「それで、お茶子？お願いっちゅーのは何なんや？」

「あ、それなんやけど。」
言われて思い出したかのようなそぶり。
一瞬のタメの後、彼女は言う。
「父ちゃん、母ちゃん。私、デクくん一緒に暮らしたい！」
空気が瞬間凍結する。
凄いや、お茶子さん。
いつのまに轟くん張りの冷却が出来るようになったんだ？
椅子の上に立ち上がり、机に両手を叩きつけたお茶子さんは気炎を上げながら、尚も息を巻く。
視線で彼女を追うと、僕の口からは意図せず「へ」と「あ」の中間音が出ていた。
「私たちは未来から戻ってきてるから、助けられなかった命が助けられるかもしれないんよ。先手先手で、対処出来るから、対策も取りやすいし、更に一緒に居れば互いにトレーニングもできるし、支え合うこともできる。それに何よりも好きな人と一緒になったのに１０年単位で別居とかやってらんないし、幼い見た目の好きな人とかむしろ近くで見ない方が無理っていうか、つまりはそう言うことなの！」
…沈黙が更にもう一枚降り掛かる…。
でも、言われてみればその通りだ。
今まで手を出せなかった事件もオールマイトやサーに協力を頼んで、手を回してもらうことだって十分に可能なはずだ。
僕の求める最高へのステップとして中核になるオール・フォー・ワン征伐戦を前回よりも少ない被害で終わらせ、オールマイトの現役を維持させ、平和の象徴を存続させる。
それから、トレーニングの件もそうだ。
同世代のヒーロー科の仲間にも出来るだけ早くコンタクトを取っておこう。
出来ることは沢山ある。
失わずに済む未来を勝ち取るために…。
それにお茶子さんと離れて暮らすのは、好きになってから別居の期間がなかったからか出来るだけ一緒にいたい…。

あっても一月程度の出張のすれ違いくらいだったので、この数日間とてもモヤモヤしてた。
そして、好きな人の幼い頃を写真でなく生で見れるんだ。
この天使を収められるなら同居、ナイスな提案だ！
「異議な…「認められるわけあるかボケぇ!?」ですよねぇ…」

冷静、沈着だったお義父さんはその態度をガラリと変えて、椅子を蹴飛ばして机に両手を叩きつける。
僕は賛同して挙げかけた右腕をおもむろに下ろす。
お義父さんの言うことはもっともだ。
どうにかこの無茶な要求を通すことは出来ないのか…。
「アホ抜かせ、お茶子!?お前中身は大人でもナリはまだ子供やぞ!?」
「なら、父ちゃんは母ちゃんと別居してても平気だって言うんやね!?」
「それとこれとは話が…っ!?」
「いーや…!!」

会議テーブルの対岸でオロオロ慌てるお義母さんを挟みながら、二人は喧々囂々と声を上げている。
隣に座る母さんを覗き見ると困っているのに笑っているような不思議な表情をしていた。
「ねぇ、母さんはどう思う…？」
母さんにだけ聞こえるように小さく問い掛ける。
母さんはすぐに視線をこちらに向け、片手メガホンの要領で、耳元で呟いた。
「…ウチでお茶子ちゃんと一緒に暮らせるのが一番よねー？」
キョトンとした。
驚きのあまり母さんと目を合わせる。
ハト豆状態で目を合わせると数秒しないうちに母さんが噴き出した。
ややあって、笑いを抑え込むと、咳払いを一つ。
「ねぇ、麗日さん。」

母さんが声を掛けると、お義父さんもお茶子さんもパタリと言い合うのをやめた。

「娘さんをウチに預けるだけで構いません。特に問題が無ければ、夏休みとかの期間で帰省することも出来ますし、この子たちも思考の上では大人なので出来るだけ、自ら動けるようにしてあげたいんです。先程言ってた先手先手の対応をするにも必要ですし。親として出来る限りの譲歩を私はしてあげようと思うのですが、ご協力していただけませんか？」

母さんの静かなのに芯の通った声は、決して広いとは言えない会議室の中に転がった。

「そりゃあ、娘たちの言い分を信じるって言った手前、出来る限り手伝ってやりたいって思うに決まってるじゃないですか。でも…それとこれとは別でしょう？」

勢いそのままお義父さんはお茶子さんの両脇を抱えて持ち上げる。

「可愛い盛りの娘を手放す親がどこにおりますか!!」

今日で一番熱の入った言葉だった。

たしかに…同じ立場なら僕でも手が出るかも。

10．My decision＝Our decision（僕の決意＝僕らの決意）

お義父さんが号泣しながら、自分の意見を叫ぶ。
ここは無理を言ってはいけない場面。
当初の目的はお茶子さんと会うこと。
それが満たされ、今後も定期的に会えるよう理解してもらえたのは、望ましい結果だ。
お義父さんの言い分は十二分理解できる。
娘を何処の馬の骨とも知らぬ子供に連れ去られるのと同じだ。
同じ状況になったら、例え大人であっても僕は取り乱す自信があるぞ。
「時たま、ウチに帰ってくるんやからそれで妥協してよ、父ちゃん。一生帰ってこん言うてるわけとちゃうんやし」
椅子に立ったまま、腕組み、頬を膨らませてご立腹ポーズ。
学校にいる間は天真爛漫な彼女しか見てこなかったし、幼い見目もあって、僕とお義父さんに大ダメージ。
「…んん…。それでもダメだ。親には子供の成長を見守る権利と義務がある。例え、好き同士で将来を誓い合った仲だとしてもその権利は主張させてもらう」
先ほどまでえらく剛健な態度を示していたために、そのカッコつけながら弱気な発言をする姿はどこか滑稽だった。
どちらも攻勢を崩さず、にらみ合いが続く。
「ほんなら、出久くんをウチで預かるんはどうや、父さん？」
動かぬ情勢に一石を投じたのはお義母さん。
確かにそれならば、お義父さんとお茶子さんの意見に食い違いは出ないが、あちらを立てればこちらが立たぬ…。
母さん的にはどうなのだろうか…？
「ええ、いいじゃないですか。そうしましょう。」
え。

どうしてそんなアッサリ？
「デクくんと居れるんなら私はウチでも構わんよ？」
お茶子さんもその提案に同意する。
…あー…状況が読めてきた。
母さんとお義母さん、お茶子さんの女性陣が巧みなアイコンタクトを交わしているのに今気が付いた。
とどのつまりは心理学的セールスの応用のなんと言ったか…？
「無茶な大きな頼み事の後に本命の通したい頼み事をすると断りにくい」と言う人間的心理を巧妙に突いた二段構えの【オネダリ】だったようだ。
僕は気付けたが、術中にハマっているお義父さんは「それなら…」と見事に要求を飲まされている。
「ウチで一緒に暮らすんやけど、東京方面には何度か行く必要があるし、相手方が捕まらなければ日を跨ぐこともあるから、毎日家に帰って来れるとは約束出来ないけど、それは仕方ないよね？」
「まぁ、そう言うこともあるだろう。」
「その時はデクくんとインコさんのところにお泊りするからいくらか向こうに着替えを送っといた方が都合がいいと思うんよ？」
「いちいちお借りするよりも自分のがあればそれが使えるし、合理的だな。」
「じゃあ、何日か分の着替えとお泊りセットをデクくんたちが帰るときに持って行くね」
お義父さんは話の流れに沿って首を縦に振ってい続けていたが、突然出掛けるよ、と言われギョッとする。
「いやいや、待ちなさい。なぜそのまま向こうに行くような話になっているんだ？」
「今後はデクくんと常に行動しようと思って。今回別れたら、また会う時に二度手間になっちゃうんよ？移動するときも常に一緒なら合理的よねー？」
ハイ、論破。と言いたげなお茶子さん。
お義父さん、目に見えて萎れている。

「大丈夫よ、父ちゃん。あくまで拠点はここやから。急に居なくなったりせんよ？」
「お、お茶子ぉ…」
　潤みきった両目から滂沱の如く涙が溢れる。

…ちなみに。
彼女が通した【オネダリ】は以下の通り。
・同居の許可
・長期外出の許可
・長短期の外泊許可
・合理的判断の優先
僕を除くお義父さん以外のみんなが敵の状態で説得と言う名の悪徳セールスに僕は発言していないにもかかわらず居た堪れない気分になった。
　お義父さん、なんかすみません…。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「それじゃあ、今夜はここをお使いください。後で布団を用意してお持ちしますんで」
　部屋へ案内してくれたお義母さんに会釈を返し、母さんと中に入る。
　特に荷解きする意味もないので、母さんに先ほどの話し合いの件を聞いてみることにした。
「結局、母さんも保護者として常に同行。ここに半同棲の状態なんだけど、それで良かったの？」
　母さんはボストンバッグを開けて、中をみて足りないものの有無を再度（４回目？）確認しながら僕に目を向けて答える。
「だって、旦那さん。折れるはずないもの。奥さんもそれが分かってたから、ああ言う助け船を出したのよ」
　まぁ、その後のお茶子ちゃんの詰め方はお上手だったわね〜、とやや呑気なコトをおっしゃる母さん。
「途中でアイコンタクトに気付いて、三人で結託してやってるのに気

付いたけど、女性陣の絆が怖いと思ったよ…。」
あの後も何だかんだで小学校はお茶子さんの地元に、中学校は折寺中に通う事を確約させられていた。
勢いに飲まれて「男に二言はねぇ」なんて言ってしまうものだから、もう引くに引けなくなってしまった。
お義父さんは漢だった。
しかも、漢を見せれば損をするタイプの漢…。
烈怒頼雄斗…切島くんもそうだったな…。
ふと、トンガリ赤髪がトレードマークだった同級生を思い出し、口角が弛む。
最後に見たのはかっちゃんより前だったから3年前かな…。
デトラネット社強襲の際に情報リークによるカウンタートラップをうけた。
地下フロアを丸ごと水に沈める大雑把かつ大胆、そしてこれ以上ない策で、僕ら強襲部隊を大混乱に陥れた。
何とか水の出入りは轟くんの氷結で事を収めたものの、スケプティックの機械人形が至る所から現れ、階段へ殺到する僕らの後ろから急迫してきた。
その時に殿を務めたのが切島くんだった。
ここは俺が食い止めるから先に行け、と階段入口の両端を両手で穿ち硬化させた彼は叫んでいた。
問答は覚えていない。
ただ、かっちゃんが待っててやるからすぐに来いと、言っていたのだけは覚えている。
その数十秒後に見慣れた光と音を伴って下階に振動。
その後すぐ様階段の踊り場までが暗く淀んだ水で埋まった。
施設破壊用にと全員に配給していたかっちゃん製の手榴弾だ、と誰もが皆すぐに分かった。
それが故意になのか敵によるものなのかは判断が付かなかったが、彼の最期である事は皆理解していた。
殿には彼でなく、僕やかっちゃんが回っていれば…。

「デクくん？」
思考の海から引き揚げられる。
顔を上げれば数ミリ先に彼女の鼻先が有って、思わず飛び跳ねた。
「お、おちゃぁ!?ちかぁっ!?」
唐突にやられると心臓に悪い。
いくら、慣れがあるとは言え、覚悟なく急にド至近距離に異性の顔があって驚かない人間がいるだろうか、いやいない…こともない…？
「もう。四回は呼んだよー？後一回呼んで答えなかったらチューしてやるとこだったのにー」
むぅ、と焼けた餅の如く頬が膨れる。
かわいい。
周囲を見渡せば、考えているうちに母さんはどこかに行ったらしい。
それを確認してから膨れた彼女の頬を指で突いてやれば溜まった空気が強制的に排出される。
お付き合いを始めてからお約束の一幕。
こうすることにより、お互い自然と笑みを浮かべられるからだ。
「誰のこと考えてたか当てよっか？」
微笑みのまま彼女は僕に問う。
「誰だと思う？」
「切島くん」
僕が問い返せば、間髪入れずに正解を口にする。
「なんでそう思ったの？」
「父ちゃんの態度がなんか似てるなぁって私もそう思ってね。デクくんなら、昔のことを思い出してたんじゃないかなーって。」
すごいや。
「ピンポン。大正解」
「わーい！賞品はデクくんからのチューが良いな！」
はしゃぐ彼女を見ると未来の彼女よりも幼い身なので、見た目に沿う態度を取ろうという姿勢が見て取れた。
彼女のリクエストに応じ、柔らかな頬に唇を一つ落とす。

数秒、和気藹々とした空気が流れるも次第に鎮静。
「…頑張ろうね…」
「うん。」
文法的に色々欠如した会話。
通じているので関係はない。
僕の決意はその時、僕らの決意であると再確認したのだ。

11．Naked relationship（裸の付き合い）【暴走回】

あれから、数時間後。
麗日家の皆さんと夕飯を食べ、1番にお風呂に入る権利をいただいた。
一通り身体を洗い、少し高い縁をよじ登りお湯の中に身を投じる。
移動続きで多少凝り固まってる身体をほぐしながら、肩まで浸かる。
座高が小さいため、足を伸ばして座ると頭まで湯船にカブる羽目になるとは…。
小さい頃はこんなだったかな、と思い返すも遠い記憶なので思い出しようもない。

「はー…。思ったよりもすんなりことが進んでくれてよかった…。最悪、説明に説明を重ねるか、説得の粘り勝ちを狙うかの二択かと思ってたし…。」
手の椀の中を覗き、自分の目と視線を合わせる。
そのまま、顔に叩けつけ暗く曇った考えを押し流す。
「お茶子さんと母さんたちには感謝だな…すごくゾッとしたけど…」
女性に多数決を挑むのは出来るだけ避けるべきだと、心の掟に一条付け加えることにした。
もしも、紙や情報媒体に残して漏洩でもしてみろ…余計怖い目が待っているに決まってる…。
自分の想像に掻き立てられて、温かな湯船の中にいるのに身を震わせた。
そろそろ次も支えているし、上がろうかとした時。
第六感、虫の知らせ、妖怪センサー…なんでもいい。
それらのいずれかが反応したような気がした…。
そのため立ち上がる途中で動作が止まったまま、ものすごい勢いで

開いた扉に目が向いたまま…僕は固まった。
「デクくーん！一緒に入ろー!!」
そこには産まれたままの姿のお茶子さん。
突撃してくるそれを見た瞬間、僕はこの後の展開を１２８通りほど刹那のうちに脳内を巡らせて…僕の意識は遠のき掛けた。
そのまま手放すところだった意識がつなぎとめられたのは、次の言葉によってだ。
「お茶子ぉ!?父ちゃんがダメでなぜ出久くんは良いんだぁ!?」
「父ちゃん。さっきも言ったけど、私中身はオトナの人妻なんよ？旦那と一緒に風呂入ったってええやん！」
「大人なら恥じらいや常識、分別を持てぇい!?」
「そこはほら、幼い幼馴染同士が一緒にお風呂入る…みたいな流れに出来るやん、今まさに子供やし」
あー…いけない。
こうなったら止まらない。
何が何でも自分の望みを通す、いつも何も言わずに我慢するお茶子さんのバーサーカーモード…。
初めてこうなった時は、帰りたくないってなって寮則破る羽目になったんだったな…。
「あー…すいません、お義父さん…。今日だけお願いします…。明日からはきっと大丈夫なんで…」
僕が恐縮しきりに願い出るのを見てお義父さんは何かを納得したようだ。
「む…そ、そうか。なら、君からもちゃんと言うように頼む…。お茶子、今日だけだからな？」
「えー、今日からだよー！」
荒ぶる駄々っ子、お茶子さん。
ぐっ…駄々のこね方からして可愛い…。
「何か事故が起きてからじゃ遅いからな、男女別れて入るべきだ」
「何か事故って私たちまだ子供出来ないよ？」
「お茶子!?」さん!?」

「て言うか、ちっちゃいデクくんほんま可愛いな…昼あった時、天使かと思ったもん…手ェ小ちゃいな…肌もプニプニ、筋肉全然ないなー！あのバッキバキの身体どこいったん！髪もまだ柔らかいなー、典型的なお子様へアーやん。未来の私にキューティクル分けて欲しいくらいやわ…」ブツブツ

なんだか、お偉いさんに会う時のボディチェックを受けている気分になってきたが、それ以外の高揚もまた感じている。

「お?デクくんのデクくんもこの頃はこんなんやったんねー?夜は猛々しいモンスターやったのにー」

その言葉を最後に僕は逆上せ上がり記憶を飛ばした。

飛ぶ寸前にお義父さんがお茶子さんを怒鳴りつけているのが、聞こえた気がした。

ーーーーーーーーーーーーーーー

次に気を取り戻した時は、縁側。

目を開けた瞬間、中庭が目に入る。

「あ、デクくん起きた?」

上から掛かる声はお茶子さん。

どのくらいの時間か分からないが、膝枕をしてくれたみたい。

団扇で緩く風を送って、熱を冷ましてくれていたみたいだ。

「あー、逆上せたのか…迷惑かけてごめんね。」

「んーん、私こそ…調子に乗り過ぎてた…ごめんなさい。」

二人で謝り合う。

許しの言葉はあえて口にしなかった。

お互い喋り出さない数十秒。

僕はこの間は嫌いじゃない。

停滞した空気に穴を開けたのはお茶子さんだった。

「昔ね、父ちゃんも母ちゃんも優しいし、私も怒られるようなことってしてなかったから、殴られるほど怒られるようなことって無かったんだけど…父ちゃんに初めて頭ブン殴られたわ…ほぼ手加減なしだったみたいで、今おっきなタンコブが居るんよ」

中庭に向けたままだった顔をお茶子さんに向けてみると、苦笑を浮

かべるその頭にはオレンジ色の氷嚢とタンコブ、頭の鏡餅が出来上がっていた。
「まぁ、仕方ないよ…最後にマトモにイチャイチャ出来たのって作戦決行の…三ヶ月前だっけ？」
「もう四ヶ月前だよ、デクくん。結婚記念日に祝えないから、サプライズで前祝いしてくれたんじゃない」
お互いに多忙が続き、家庭内でも仕事上でもすれ違いが長く続き、どうにか互いに時間を取ろうとして、ようやく愛を睦み合うことが許された。
その分で溜まっていたフラストレーションが、今日爆発してしまった、と言うわけだ。
「いやぁ、溜まっていたとはいえ、今更ながら何の恥じらいも無く、裸見せるわ、あちこち触るわ…今になってなにやってんだ…って思っとるよ…」
後頭部に手を回すお茶子さん。
彼女が照れた時のクセだ。
後ろ髪をかき回す内に氷嚢に触れてしまい、タンコブの表面を軽く削った。
「アイタタタ…今夜寝れるかな…。」
氷嚢を押さえ付け、落ちないよう確認する。
結構な痛みがあるようで、眦が潤み始める。
その溜まった潤みが瞬きとともに決壊して一滴頬を伝った。
それを見て僕は腹筋の力のみを使って体を跳ね上げ、その雫を舌で掬い取る。
その瞬間、呆けたお茶子さん。
次の瞬間は視線だけが交錯した。
「不満が溜まってたのはなにもお茶子さんだけじゃないんだから、そこのところは忘れないでね？」
お茶子さん顔が下から順に赤くなる。
それが天辺に到達した時、頭の氷嚢が漫画的にピョンと跳ねた。
「…あかん、キュンときた」

…キュンと来たなら、抑えるのは左胸じゃないかな…？
何でお腹押さえてんのかな…？
「…ウチの嫁さんは意外とエロ可愛いなぁ…」
「エロ可愛いって何なん!?」
怒ったフリで声を上げても、キスには応じてくれた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「それじゃ母さん、お休みー」
客間に戻り、寝支度をしていた母さんに声を掛けて布団に潜り込んだ。
声をかけた時、後ろを向いていた母さんを枕から見るとこちらを見てキョトンとしていた。
「出久、アンタお茶子ちゃんと一緒に寝ないの？」
「え」
とりあえず、そういった諸々はお義父さんとも相談して決めよう…そうじゃないとあちこちから針のむしろにされてしまう…お義父さんによって…。
「うん、一応今日のところは」
「美茶（ミサ）さんは、お風呂も布団も一緒でいいって言ってたんだけどねぇ？」
…なんでもお見通しかな、女の勘。
恐れ入る。
「まぁ、実際結婚してたって言うんだし、本人同士に好きにさせるべきってのが、母親ズの認識だから。照仁（テルヒト）さんは断固反対みたいだけど、アレは娘を持つ父親が罹る特有の病だから気にしなくていいって。ウチのおじいちゃんと一緒。」
あー…母さんラブのおじいちゃんか…。
確か寿命で１０歳の時に亡くなったけど、この頃はまだ生きてるのか…。
「タイミング見て会いに行こう」
きっと会ったらめちゃくちゃ可愛がってくれるんだろう…記憶の中の彼がそうしてくれていた。

Ｔｕｒｎ：ｐａｓｔ
１２．　Ｍａｓｔｅｒ　ｔｅａｃｈｅｒ（師匠の師匠）

Ｓｉｄｅ：???

私が日本に戻ってから既に数年の時が経つ。

当時はヒーローの本場アメリカで経験を成し、頼れる相棒と別れを決めて、夢を達成するべく満を持して帰国したのだ。

帰国したその日にビル一棟丸々焼ける大災害に直面したりして、私の日本デビューは鮮烈な物となった。

一昨年、総キャリアも十年に満たないものの誰もが憧れるビルボードチャートＮｏ．　１ヒーローに選出され、名実ともに私の夢であるヒーローの化身『平和の象徴』になれたと思う。

そんな私の毎日は朝のランニング兼パトロールから始まる。

朝早くは都市部では窃盗、強盗の類。

地方部では暴走やひき逃げなど車に関する事件が起こりやすいものだ。

誰かを呼ぶ声あれば、そこへ急行し、さっと片付ける。

笑いとともに現れ、笑いを残してその場を去る。

ヒーローとは時間との勝負。

然れどもファンサービスを怠ってはならない。

私のコースである一都三県を巡り終わり、六本木のメインに使用している事務所兼我が家へと戻る。

なお、ランニングは決めた時間で行うものだ。

「おはよう、オールマイト。本日も時間厳守で何よりだ。」

「おはよう、サー。今日はちょっぴり寝坊してしまってな。いつもより巻きで走ったが、いつも通りにこれて良かったよ。ＨＡＨＡＨＡ!!!」

ヒーローたるものスマイル上等。

いついかなる時も自らさえ騙して笑顔の仮面を貼り付けるのさ！

「なるほど、いつもよりも脈拍が高いのはそのせいですか。」
毎度思うが、サーの目の付け所が怖いんだよ。
何でぱっと見で脈が分かるんだい？
「それはそうとオールマイト。本日もまた緑の封筒が届いていましたよ」
既に開封済みのファンレターを私のデスクへと投げて寄越す。
やれやれ、何度も言うが手渡しで渡してくれてもいいじゃないか…。
「んん！熱烈なファンも歓迎だがね…こう何度も会いたいと言われてしまうとこちらの気がそがれてしまうね。」
鉛筆で書いたと思しきその手紙は幼げな筆圧と相反して教養の高さを伺わせる内容だ。
これは幼く扮した大人が子供なら相手してもらえると思って書いているのだろうと思っていたが、内容は『顔を合わせてお話ししたいことがあるのでお会いしたい』の一点張り。
空欄の目立つファンレターはいつも緑の封筒に包まれていた。
「差出人は緑谷出久…聞き覚えのない名前だ。」
「一度、サインでも送って会う気は無いとハッキリ伝えてやればいいんじゃ無いですか？ここまでしつこいとこちらが見なくなる可能性だってあるはずなのに…既に1日1通、15通目ですよ？」
「逆にここまで話したいことが何なのか気になるけれどね。とりあえず、いつものように保留にしておこうか。」
「はい。それでは、先日神奈川県警から委託された件の裏取りの話からですが…」
＜デンワガ…キタァー！デンワガ…キタァー！
「すまない、先に出ていいかな？」
「構いません。今日は時間がある方ですから」
「もしもし、オールマイトですが」
『おお、俊典。連絡も寄越さんと随分ぶりじゃな！』
「そ、そのお声は先生ですか!?ご無沙汰しております!!」
『う、全く…昔から声のデカいやつじゃな…』

「も、申し訳ございません…。音信不通の非礼も重ね重ね…」

『良い良い。便りがないのは元気の印と言うが、お前さんの場合テレビを付ければ嫌でも知れるからの。最近も手を抜かず頑張っているようで感心だ』

「ご存知いただけて恐縮です。…それで、先生のご用件は何でしょうか…？」

『おお、それなんだがな…』

『お前に客が来とるんだ。今日明日で都合付けて来れないか？』

は？

先生から言われた言葉の意味を図りかねて私は敵前では晒すことのない硬直に見舞われたのだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

――――――――――――――――――――

「今、俊典…オールマイトに連絡してやった。一応、今日これからなら都合がつくらしい。すぐに向かうと。」

「急な訪問の上、ご丁寧に対応していただきありがとうございます、グラントリノ」

僕とお茶子さん、そして母さんの三人は甲府にあるグラントリノの事務所にお邪魔している。

麗日邸で2日過ごした後に僕の家へと帰り、ここ何日かは遊びという名のデートやかっちゃんたちを交えたトレーニングをしたりして過ごしていた。

爆豪ヒーロー事務所ＶＳデク・ウラビティコンビで行った模擬試合の数はここ数日だけで五十を超えた。

既に数えるのが億劫だが、当たり前なことに未だ黒星無し。

幼いかっちゃんを合法的にイジれるとお茶子さんがガンヘッド仕

込みの無重力柔術で反抗するたびにコテンパンにしていたり、僕は僕でデラウェアスマッシュ（1％）でいなしているのでかっちゃんの競争心がうなぎ登りの様相だ。
この折れない心は、昔かっちゃんから教わったんだよなぁと懐かしくなるものの、同時に子供相手に何をしているんだ、と虚しさと切なさを覚える。
そんな日々を過ごしつつ、オールマイトにコンタクトを取ろうと共通の緑の封筒を使って連絡していたが、応答を得ることかなわず、母さんにお願いしてグラントリノの事務所へとやってきた。
まさか固定電話が無いとは思わず、ノーアポの突撃訪問になってしまったのは、申し訳ないの一言だ。
そして、扉を開けた開口一番に懐かしのセリフを聞けると思わずちょっと涙が出そうになったのは内緒だ。
「それで、緑谷出久。お前さんの先ほどの与太話を信じるとして、お前さんはどの程度扱えるんだ？」
現在、母には席を外してもらっている。
この場にいるのは、僕とお茶子さんとヒーロースーツを着ていないグラントリノの三人だけだ。
応接テーブルの上で湯気を上げるお茶を手に取って啜りながら、僕が差し入れたたい焼きを口にしつつグラントリノは続ける。
「お前さんらが未来から戻ってきたって話を信じるなら、俊典の後継ってことも分からなくはない。だが、戻ってきて早々に俊典にコンタクトを取って伝えたいことと言うのがイマイチピンと来ない」
「宿敵との決戦についてとその手伝いをさせていただきたいと思っております」
ブフゥッッ
!?!?
グラントリノが飲み込み損ねたお茶が僕の顔面目掛けて吹き放たれた。
「何をバカなことを言ってる!?ガキにそんなことをさせられると思っ

ているのか!?」
「見た目はガキでも中身はプロです。その為に先手を取るべくオールマイトに、そしてあなたにコンタクトを取ったんです」
「話にならん。帰れ。俊典にもキャンセルしといてやる」
「グラントリノ」
話を中断して、電話へと向かうグラントリノの背中に僕は出来得る限りの低い声で呼び止める。
「一手、お相手願えませんか？どれほど扱えているか、お分かりになると思いますよ？」
僕はその場で立ち上がり、両手を軽く握り構える。
隣のお茶子さんはお茶を啜ってこちらを覗いていた。
「なるほど、どいつに仕込まれたかは知らんが、合理的だ。部屋の損害は気にせんでいい。全力で打ってこい」
パゥっ！
小さな破裂音とともにグラントリノの姿が掻き消える。
否、掻き消えるような速度で動き出したのだ。
壁を天井を時には空中さえも足場として、高速で跳ね回る、師匠の師。
職場体験の時も早いと思っていたが、今の方がまた更に早い。
だが、追えなくはない。
おもむろに出した右手で空を握る。
そこには滑り込んできたグラントリノの細い足首があった。
勢いのまま体を回転させ、回転軸を九十度回す。
そうすることでグラントリノは受け身も取れず、飛び込んだ勢いのまま、地面へと叩きつけられることとなる。
「先生！今の音は何の音ですか!?」
…そこに筋骨隆々の黄色地の鮮やかなスーツの紳士が現れたことで現場の状況は悪化する。

13．Past Master vs Future Disciple（過去の師匠vs未来の弟子）

「…どういうことか、説明してもらえるね、少年少女？」

彼が扉を開け放ったところでその目で見たのは、床を蜘蛛の巣に割り、倒れ伏す師とそれを成したであろう少年が恩師の足を握っている。

かと思えば、我関せずとばかり、茶碗を煽り、悠長にその中身を飲み下す少女。

そりゃあ、如何なヒーローであっても現場だけを見れば知り合いのヒーローを打ち倒す見知らぬヴィランの図である。

ただし、それを成したであろう存在が、腰に届くかも怪しい幼子であった。

うん、意味がわからないよね。

僕もオールマイトの立場なら理解することすら放棄すると思う。

ましてや恩師が打ち倒されているのを見て、冷静でいられるはずもない。

…とりあえず、制圧してから考えよう。

No．　1ヒーローと言えど人の子であるがために、その怒りに身を任せて握ったままだったドアノブを思わず握り潰した。

「DETROIT　SMAAASH!!!」

本気の右拳。

恩師のピンチに箍が外れたのだろう。

振り向いたままでいた僕の右頬に突き刺さるコース。

振り下ろす形で放たれるそれを首を戻す勢いを使って打ち出された方向に合わせて回転。

それだけで直撃を躱した。

オールマイトが瞠目するも僕はそれで終わりにしない。

伸びきった右腕を左上腕で受け、右腕を右脇へと伸ばす。
飛び上がる勢いに合わせて左手を引き下ろせば、あら不思議。
２７４ｋｇの巨体が簡単に宙を舞った。
ドスン、とおよそ人が地に叩き付けられる音とは思えない音が響き、オールマイトはその腹を天へと晒す。
視線はこちらに向けたまま瞬きすらせず、僕を見つめる。
「随分早く到着したね、デクくん。オールマイトの事務所って六本木じゃなかったっけ？」
「多分、全力疾走したんじゃないかな？周りの被害を顧みずに済むようなるべく高いところでＮＥＷ　ＨＡＭＰＳＨＩＲＥ　ＳＭＡＳＨを使ってぶっ飛んできたんだと思うよ？」
空になった茶碗を応接テーブルに戻して、お茶請けの封を切っているお茶子さん。
世紀の頂上決戦をお茶の間で楽しんでいるかのようにくつろいでいらっしゃる。
「君たち…初犯でこれは覚悟しなさいよ！」
ネックスプリングに捻りを加えて、ワンアクションで僕に向き直るオールマイト。
なるほど、復帰動作もそう言う工夫ありきか。
手合わせだけでも勉強になるなぁ…。
「少年、さっきのは君の個性かい？」
一分の油断もせず、構えたまま問うオールマイト。
「ご冗談を。さっきのはカビが生えるほどに古いただの技術ですよ？」
表情に変化はない。
しかし、身体機能は嘘をつけず、そのコメカミに一筋、キラリと光る汗が見えた。
「遠いところからご足労いただきありがとうございます。ちょっと予定とは違いますが、このまま一手、御指南ください」
自然体から半身に構える僕。
右手は拳は握らず、平手。

その甲を差し出す形で指を伸ばす。
動かぬ巨像に対して、僕は指を数度曲げ伸ばし、挑発する。
曰く、「来いよ」と。
すぐさま変化は訪れた。
オールマイトが地を蹴って、グラントリノ以上の速度で肉迫してくる。
踏み込みを載せた右、右を引く力を押す力に加えて載せる左、再度右。
秒間何十合と言うデタラメな速度で繰り出されるラッシュ。
僕は紙一重を見極めて、避け、流し、合わせ、打つ。
怒りに満ちていたオールマイトの顔は、最初の一合で驚きが混じり、回数を重ねていくうちにその割合を逆転させていった。
余裕が一切なく、笑みすら浮かばない。
自身の出し得る最速のコンボを呼吸を乱すことなく捌き続ける幼子を見て、驚きを超えて恐れさえ抱いているようだ。
やや大きく右拳を弾くと、僕から打って出る。
小さな体躯を生かして股抜け、その腰へと飛び付いた。
オールマイトは背に回られた為に打ち出す直前だった左手を咄嗟に引き剥がそうと背に回してしまった。
右を弾き、左手を後ろに回したためその巨体の重心が大きく右へと流れてしまう。
体が流れるに任せ、僕はさらに体を振って崩しにかかる。
たたらを踏むことも無く、そのままオールマイトはバランスを崩し、倒れてしまった。
今度は、キチンとマウントポジションを取り、太く頑強な首に貫手を添える。
「僕の勝ち、でよろしいですね？」
くっ、と喉の奥から音が漏れる。
まだ抗えると力を入れたのだろう。
体が跳ね上がるのを感じた。
「参ったなぁ…体重が軽いってのも大問題だ…。でも、こればかりは

成長に身を任せるしかないよね…」
次の瞬間には両足を片手で掴まれ、さながらタロットの「吊られた男」の様に拘束されてしまった。
握り込んだ左拳を添えて。
両手を挙げ…この場合は両手を下げ?て降参の意を示す。
「そこまでだ、俊典」
その声にハッとしたのか、首から上だけを巡らせ、発声源へと視線を向ける。
「ご無事でしたか、先生」
「無事も無事よ。全く、たったの一合で意識を持ってかれるとか何年ぶりだ?とんでもないな、小僧」
「恐縮です、グラントリノ」
グラントリノと普通に言葉を交わす僕に理解が追いつかないのか、僕と恩師を交互に見ているオールマイト。
普段の凛々しい姿からは思いも寄らぬ茶目っ気。
僕の知ってるオールマイトと変わりがない。
「改めまして、緑谷出久です。よろしくお願いします」
僕は、吊られて逆さまのままに頭を下げた。
「ほれ、いい加減離してやれ。さっきの電話の客ってのは、このチビたちだ」
そう聞くとオールマイトの顎が外れたかの様にストンと下に落ちた。
空間全体が一瞬の硬直。
その様を見ていた僕の背後で小さな破裂音が鳴る。
「ぷっ…ブフーっ!!も、もう無理、笑うの我慢できない…ッッ!!」
口元を押さえるもお茶子さんは笑いを吹き出した。
アハハハハハ、と響く幼女ならではの高い声。
この上手い具合に勘違いが呼び起こした掛け合いが一昔前のお笑いのようなものに見えたのだろう。
僕も傍観者ならきっと笑ってると思う。

二重三重の驚きのために硬直したオールマイトは未だ、僕の両足を持ったままだ。

――――――――――――――――

「全く、屋内だってのに無茶苦茶しやがる。見ろ、この眺めのいい風景を」

一発目のＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨで僕の背後にあった壁は見事にぶち抜かれ、外の私道がよく見える。

体を入れ替えて行われたラッシュの影響で、扉は原型も残らず木屑と成り果て、その壁は中にある鉄筋が顔を出している始末であった。

また部屋の中にあったロッカーや応接セットはお茶子さんが座っていた三人掛けソファとテーブルを残し、あちらこちらへと飛び散っていた。

「も、申し訳ありません。先生がやられていると思い、頭に血が上ってしまいました。当然、補修費用等は全額負担させていただきます…」

僕らは少し片付けをしたのちに、本題を話そうと顔を付き合わせたところだ。

一人掛けソファ二つの内、一つは大穴の空いた窓から外に飛び出しており、それは後ほど入れるということとなって、本来それが鎮座する位置にオールマイトが正座して縮こまっている。

一人だけ違う画風の人が床に正座をして、縮こまっているのが、面白いのかお茶子さんは必死に見まいと目を逸らしながら、口元を押さえてプルプルと震えていた。

「当たり前だ、全く…。その上、子供にいいように遊ばれたとか俺もお前も恥ずかしいもんだ。今度みっちり鍛え直してやる…」

「ど、どうぞお手柔らかに…っ！」

正座して頭を下げた彼はさらに縮こまり、その身をブルブルと震わせる。

うーん、床が震えるほどに怖いのか…。

「それで？もう一度聞こう。誰だ君は？」

玄関を潜る際に聞かれた言葉。

職場体験以来聞かれなかった懐かしいフレーズ。

「ヒーロー名デク、こちらはウラビティ。僕らは二十年後の世界から戻ってきた、未来のヒーローです」

一度、グラントリノには話していたが、初耳であるオールマイトは見たこともないほど真ん丸に見開き、首を傾げた。

14．Heroes like bone（骨のようなヒーロー）

「未来から…？君か彼女の個性の力によって戻ってきたと？」
正座のままのオールマイト。
しかし、ソファに座る僕らと視線の高さが同じとは、成長の差を感じて苦笑が漏れる。
「いえ、彼女の個性は【ゼログラビティ】五指で触れたものの重力を無くすものです。また、僕にそう言った力があるのも否定は出来ませんが、確証はありません」
「随分と曖昧な物言いだが、君は君の個性を把握出来ていないのかい、少年？」
ごもっともなご指摘だ。
普通であれば、自らの個性を把握してしかるべきである。
「僕の個性は、その全てが明らかになっていないんです…でも、その名称は分かってます」
この場でただ1人、そのことを聞いていないオールマイトが首を傾げる。
顎に添えられた右手が意外なほどチャーミングだ。
「随分とおかしな説明をするね…。その個性の名前は…？」
「その前にオールマイトもそろそろお辛いでしょう？少々お待ちください。」
右手を壁の大穴へ向け、僕の指先に黒いモヤが現れる。
それが指先から勢いよく外へ飛び出して行き、数秒後にはソファを絡め取って、それを部屋へと引き込んだ。
「どうぞ、お掛けください」
ソファをオールマイトの側に寄せ、受け取ったのを確認してから個性を解除する。
「それが君の個性かい？」
「いいえ。これは僕の個性の一部の【遠隔視（ホークアイ）】と【黒鞭】を使った合わ

せ技です。ここからじゃソファが見えなかったので、デモンストレーションがてらに使いました。」
　個性の名前を二つ上げるとオールマイトの眦が尖りを見せる。
「さて、今二つの個性を見せましたが、思い当たるものはございませんか？」
「…まさか君の個性は…オール・フォー・ワン…と言うものでは…」
「まぁ、オールマイトが間違うのは分かっていましたが、予想通りの間違いでなんか話の進め方が下手なんじゃないかと、僕自身疑ってしまいそうです…」
「デクくんは昔から突発的なもの以外の話の進め方は下手くそだよ？」
　隣からトドメの一撃が飛来するも、なんとかその場で耐え抜いた。
「お茶子さん、ホント手厳しい…高校時代の優しいあなたが恋しいよ…」
　ほろりと涙が溢れそうになるのも許してくれるよね…。
「話運びの下手さを彼女に駄目押しされたので、回りくどいのは無しでいかせていただきます…。僕の個性はワン・フォー・オール…第９代継承者です」
　オールマイトの驚愕ランキングをまたも更新した。
　そろそろ、トップ１０が僕で埋まるんじゃないだろうか？
「先ほどの黒鞭は４代継承者、四辻　藍道の元々持っていた個性。遠隔視は３代継承者、紅　御代のもの。ワン・フォー・オールの歴代継承者の個性を使うことが出来る…それが僕の個性、と言うことになるでしょうか？」
　そこで言葉を止めると、今まで口を開かなかったグラントリノが、唸り声を上げて会話に乗る。
「志村のヤツもそんな話はしてなかったが…今のを見させられりゃ信じる他ねーな…」
「…ええ、もしかしたら私も更に力を使えるかもしれません…」
　何か希望を持ったかのようなオールマイト。
　絶望に変わる希望は持たせてはいけない。

「いえ、多分オールマイトには出来ないと思います」
そう、僕はバッサリと切り捨てる。
そう言った瞬間に怒り、悲しみ、絶望が綯い交ぜになった表情をこちらに向ける。
「…何故だい、少年？どうしてそう言い切れる…？」
「僕は個性の中にある歴代継承者の残滓と会話することが出来ました。その際に、この個性の力を蓄える者としてオールマイトが培い、僕に継承する段で初めてそう言う能力として開花した…と。なので力を蓄えているオールマイトがこの力を使うのは難しいかと…」
握りしめた拳がギチギチと異音を奏でている。
対オールフォーワンに有効な手立てが出来たと糠喜びすればそうもなる。
「未来の話をします。オールフォーワンが黒幕となって様々な悪事を働いてきた通称ヴィラン連合との戦いが終わったその日に命を落とした僕らは、何故か二十年前の九月二日に戻ってきました。今からオールフォーワンを叩けば、未来まで波及する悲劇を食い止められる可能性があります。どうか力を貸してください」
僕が改まってソファの上で正座をし、土下座の姿勢でお願いすると、隣のお茶子さんも僕に倣って頭を下げた。
「…ああ、勿論だ。この先の悲劇を全て纏めて救ってみせよう！」
すぐさま快諾してくれるオールマイト。
しかし、それは僕らが望まぬもの。
「オールマイト、僕らは情報を渡すだけではありません。身体は幼いままですが、力は依然変わらずプロのままです。オールフォーワンとの最終決戦では、僕らも戦います」
先ほどの戦いで如何に強いかは分かってくれたと思う。
「承服しかねる。見た目のまま子供なのだから、大人の私たちに任せたまえ」
当然、断ってくるオールマイト。
そりゃあ、見てくれだけなら守るべき対象だ。
戦わせるわけにもいくまい。

「オールマイト、あなたは五年後にオールフォーワンとの全面戦争で左肺全損、胃袋全摘の重傷を負います。そのせいでその後の数年は落ちて行く体力と狭まる活動限界時間の中を縫ってヒーロー活動を行います。しかし、後に復活したオールフォーワンに対し、僅かに残ったワン・フォー・オールを振り絞って、打倒するもヒーロー生命が絶たれる。それが今から約十一年後の夏の話です」

出来るだけ声を荒げずに紡ぐ。

一度制御を誤れば何を口走るか分かったもんじゃない。

「今は万全の体調で、力も漲っているでしょうが、あなたはたった五年で見るも無惨なほどに痩せてしまう。筋肉などみる影もなく、骨と皮ばかりの骸骨のような姿。そうなって血を吐きながらも歯を食いしばってヒーロー活動をし、その果てには…『平和の象徴』の瓦解による世の混乱…分かりますか…？貴方が倒れては元も子もないんです。それを防ぐ手立てがある。僕らが救える、戦えるんだ。今後、大怪我をして引退するのが分かっていて助けに行かないほど、僕も彼女も利口ではない。承服してくれなければ、どんな手を使ったって…」

「少年」

徐々に早く捲し立ててしまう僕を止めたのは、小さく呟くような彼の声だった。

「ありがとう。君を選んだ未来の私は間違っていなかったようだ」

そう言って腰を納めていたソファから立ち上がり、僕の目を見据える。

「緑谷少年。私の不義で連絡を取れず申し訳ない。改めて私からお願いする。かの帝王を倒すため、その力と知識を貸してくれ」

そう言って深々と頭を下げた。

話がまとまったとホッとするのも束の間。

隣でガラスにヒビが入るかのような異音がした。

「ねぇ、オールマイト？私は？」

にこやかな顔で威圧する僕の嫁がいる。

あー、背中に般若が見える…。

「えー…と、お茶子少女、で良いのかな？緑谷少年にお願いするのも心

苦しいのに、君にまでお願いするなんて、とてもとても…」
「デクくんはさっきの手合わせで力を見せたからいいんや…？なら、私とも手合わせ、お願い出来ませんか…？」
「お茶子さん…？笑顔がいつもの麗らかな笑顔じゃないよ？そんなに凄まなくても、きっと認めてくれるから大丈夫だって…」
「デクくん、黙って。舐められたら、終わりなんや…」
どうしよう…なんだか、某幼馴染の後ろ姿に滅茶苦茶似てるんだけど…。
「来ないんですね？なら、こちらから行きます！」
そう言って戦いの火蓋は切って落とされた。

１５．　１０ｔｈ　ｓｕｃｃｅｓｓｏｒ（第１０代継承者）

距離にして二歩分。
相対するお茶子さんとオールマイト。
最初の一合は飛び出したお茶子さんを片手で往なすことで終わる。
危なげなく着地し、再びオールマイトに向き合う彼女。
地を這うような低い姿勢で構え、両手は指先を床に当てている。
「お茶子少女、落ち着きなさい！何もここで手合わせしなくとも…！」
「いいえ、やります。私が戦力外でデクくんだけ連れていくとか承知しません。」
再び駆け出し、その土手っ腹に向けて掌底を繰り出す彼女。
先ほどの話があってか、オールマイトはその手を注意深く払う。
「触れれば、終わりか…単純ながら怖い個性だ！」
「まだまだぁ!!」
着地し、振り返り、突撃。
着地、突撃、着地、突撃、着地、突撃…

幾度も突撃を繰り返し、その度に払われる。
無情にも速度が足りず、進展はなかった…。

そのままでは。

パリッ…

何かが閃き、迸る音が聞こえた気がした。
ハッとした僕は、口から出るままオールマイトに叫んだ。
「全力防御おおおおお!!」
「…ＳＭＡＳＨ」

次の瞬間にはお茶子さんの姿は掻き消え、刹那の後にはオールマイトの代わりに粉塵と轟音だけが残された。
あまりの勢いでの衝突のせいか、壁がオールマイト型に空き、隣の部屋が窺える。
「ゲホッ…ゲホッ…ま、マジかよ…。これってまさか」
「さっきまでの突撃が無策の本気だと思ってました？まだ、全部は扱えていませんので、たかが５０％ですよ？」
イタズラが成功したかのような満面の笑みで構えを解き、悠々とオールマイトへ近付く。
「改めて自己紹介します。麗日お茶子、ヒーロー名ウラビティ。個性は【ゼログラビティ】そして…」

「ワン・フォー・オール第１０代継承者です」

あちゃあ…オールマイトの驚愕Ｎｏ．　１、間違いなしだぁ…。
「戦力外だなんて、言わせません！」

ニシシ、と歯を見せて笑う。
その笑顔はまるで悪魔で天使、と言ったところだった。
「侮ってすまない…見た目に騙されていたよ…。手合わせ、だったね？そちらの攻撃は受け取った。今度は……私の番だ!!!」

突風巻き起こる踏み込みから右腕一閃。
余りに早く、僕でさえも見切るのは一苦労…。
しかし…

「な…っ!?」
「『柔、能く剛を制す』ですよ、オールマイト」

オールマイトの拳を平手で受けたお茶子さん。
右手でその豪腕を押し上げて、突っ込んできた勢いそのままに後ろへ投げ飛ばし、壁の大穴から外へ真っ直ぐ放り捨てた。
物凄い速度で飛んでいくオールマイト。
無重力のために向きを調整出来ず、グルグルと無軌道に回転してしまっているようだ。

「解除、っと」
左右の指先を全て合わせ、ようやくこちらへと向き直った。
「デクくんの仇、取ったよ！」
満面の笑みをこちらへ向けてくる彼女。
彼女の麗らかな微笑みに癒される一方、ブツブツと呟くグラントリノの方が怖くて向けないや…。

ーーー

死んでしまいます…。
「私は受けたのは合気ですけど、投げたのは柔術ですよ？」
「僕は避けたのが太極拳、受けたのが八卦掌、投げたのが合気です」
…
…
…何で黙るの？
「…き、君らは…一体誰に師事したんだ…？」
「私は…三年後にデビューする武闘派ヒーローのガンヘッドに基礎を教えてもらいました。」
「僕はオールマイトに師事して、個性の使い方を教わりました。昔の拳法などは二人とも全部動画等で独学、ですね」
グラントリノとオールマイトは二人で顔を見合い、二人して頭に手を当て天を仰いだ。
そのリアクションは何なんですか…？
「いやはや参った。二人とも技術的に大成しきっている。今から何かを指導できるか分かったものじゃないな…」
「少なくとも、お前が教わることになるだろうな、俊典」
「そ、そう言われてしまうと恥ずかしい限りです、先生…」
床に正座したオールマイトはグラントリノへと恨めしげな顔を向けた。
そんな折、思い出したかのようにグラントリノが僕に問う。
「ところで、小僧。聞きたいんだが…」
「何で小娘にワン・フォー・オールを渡しているんだ？」
あー…恥ずかしいので出来れば黙秘したいが…まぁ、許される話じゃないか…。
「あー…その…個性の譲渡の方法って遺伝子を取り込むことじゃないですか…だから…ね？」

「…納得したから皆まで言わんでいい、聞いた俺が間違いだった…」
「恐縮です…」
分かってもらえて助かった…。
何が悲しくて夫婦の営みを事細かに説明しなきゃならないのだろうか…？
否!!断じて否!!
見よ！お隣のお茶子さん顔を!!
恥ずかしくて顔が赤く燃えそうなのに、嬉しくもあるからニヤケ面が混じっている。
百面相も斯くや、と言ったところだ。
「細かいことは省きますが、お互いに譲渡して、サイクル作ったら互いの中でワン・フォー・オールが定着した形でして…余剰の力が無くなるよう均等になりました。お陰でじゃじゃ馬感が無く、扱いやすくなったのを覚えています…」
「一応、未来で私には超パワーの力はないことになっていたので、５％程で常に運用していました。瞬間的には２０％程度が限界だったはずですが、戻って来て以来、何故か更に扱い易くなっているようです」
「僕に至っては１００％の力を常時運用することができるようになった次第です」

そこまで言うと二人は顔を見合わせて、何かを通じあったのか、互いに頷き合っていた。
「とんでもない、じゃ済まされねぇな…力だけで言っても俊典が一人と半分増えたようなもんじゃないか…」
「敵対するオールフォーワンが少し不憫に感じて来ました…」
グラントリノは腕を組み、唸りながら瞑目し、オールマイトは惚けるように上の空。
「裏技的に更に一人ずつ継承者を増やすことも出来るかもしれないので、最大六人で滅多打ちに出来るかもしれませんね」
ニコニコしながらそう言うお茶子さん。
「それはもうシャレになってないよね!!」

ごもっともです、オールマイト…。

「さて、力量も見てもらい、認めていただいたところで、次の問題に移りたいのですが…。現状、僕らは子供です。個性の使用に関して法律上何一つ合法性が有りません。故に、その辺りの問題を解決したいと思うのですが、この時代に何か解決策はないのでしょうか？」

「実情としては難しい。最悪自警団（ヴィジランテ）として逮捕されてしまう可能性も否めないな」

それは歓迎できない結末だ…。

将来の活動に支障が出かねない。

「どうにか出来ないかウチの相棒（サイドキック）にも相談してみるよ。」

「サー・ナイトアイですね。是非お願いします。ただ、会っても居ないのに信用していただけるはずもありませんので、僕からも直接お話しさせていただきたいです」

グラントリノとオールマイトとの接触、協力の取り付け、個性使用に関する合法化…また一つステップを踏むことが出来た。

「ところで、お茶子少女…改め、麗日少女。どうして、そんなに私の顔を見ているのかな…？何か付いているかい？」

話がひと段落したところで、オールマイトはお茶子さんに話を振る。

「いやぁ、意外と腕が平気だったので、もうちょっとカマしておけば良かったかなぁって…」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!君は私に何か恨みでもあるのかな!?」

画面越しで見るオールマイトのままのオーバーなリアクションで返していた。

16. A little step, Maximum change（小さな一歩、最大の変化）

Side：Katsuki Bakugou

俺はどうやら凄いらしい。

幼稚園の誰より早く個性が出て、しかも自分の意思で爆発させられる汗って言う強い個性だ。

先生も言ってた。

凄い個性だ、強い個性だ、ヒーローに向いてるって。

みんな言ってる。

俺は凄い。

俺以外は凄くない。

…あの二人以外は。

俺は勝己。

負けるのが嫌いだ。

負けを認めたくない。

けれど、アイツらには勝てない。

今はまだ。

いっぱい鍛えて、絶対に勝ってやる。

ヒーローで一番凄いオールマイトにだってそのうち勝つんだ。

だから、あんな奴らに負けちゃダメだ。

「…ちくしょお…いずくのヤツ…なんで急に強くなったんだ…？」

帰り道、いずくとあの女を空き地に置いて走ってきたけど、息が切れて今は歩いてる。

随分視界が悪いけど、コレは涙じゃない。

汗だ。

汗って言ったら汗なんだ。

ついこの間、いずくにも個性が出たらしい。

どうやら、デタラメに強い個性らしく、何がどうしてそうなるのか分からないくらい強い。
この俺が吹き飛ばされるくらいの風をデコピンで作れる。
どう言った個性なのかは聞いてない。
きっと風を操る個性なんだ。
風を出される前にいずくを捕まえれば勝てる…と思う。
それにあの女だ。
アイツも強い。
今すぐには勝てないくらい強い。
なんでも、触った相手を浮かすらしい。
たったそれだけの弱個性。
俺が勝てないわけがない。
…なのに。
「なんで触れないんだ？目の前にいるのに手が届かない…」
悔しい悔しい悔しい…。
強くなるにはどうしたらいいんだ？
「ちくしょお…」
「どうした、坊主？喧嘩でもしたか？」
不意に知らないおじさんに声を掛けられた。
「なんだよ…見んな…！」
総白髪の背の低い爺さんだ。
足が悪いのか腰が悪いのか杖をついてる。
それなのに、白のボディスーツを着て黄色のマントとグローブ、ブーツを付けている。
爺さんのヒーロー？
少なくとも見たことがない。
「ハハハ、元気があるなら結構。何やら悩んでいるように見えたが、どうかしたのか？」
「別に…なんでもねーし…」
強がりなのは分かってる。
そうやって自分を大きく見せるしか、こういう時どうしたらいいか

知らない。
「実はな、大分前からお前と友達のことを見てたんだ。随分遊ばれていたな？」
胸の辺りがカッとした。
右手を握る時にパチッと弾ける音がする。
「知ってて聞いてんのか…？」
「さあな」
どっこいしょ、と近くの電柱の脇にあるゴミ捨て場のブロックに腰を下ろす爺さん。
その誤魔化す言い方が気に食わなかった。
「強くなりたいのか？お前さんは、どんな大人になりたい？」
両手で杖の柄頭を押さえ、視線をこちらに向けている。
「俺は…ヒーローになりたい」
口からスルリと答えが出た。
捻くれてるのは自覚している。
そんなすんなり出て来るほど弱っていたのか…？
「ほう、ヒーローか。君の個性は掌の爆破能力、で良いのかな？随分、汎用性に富んだ良い個性だ」
「でも、アイツらには敵わない…どうしたらアイツらに勝てるように強くなれるんだ？」
「なるほど、それが小僧の悩みか」
左手で顎を抑える爺さん。
ヒーロースーツのようなものに身を包んだ爺さんだ。
きっと強くなる方法を知っているかもしれない。
俺は四の五の考えるのを辞めた。
「どうやったら強くなれる…んですか？」
一応目上だから、と敬語にする。
先生にもそうするのが正しいって言われた。
素直に聞いたんだから教えろ、じじぃ。
「ワシも教鞭を取ったし、弟子も取ったことがある。お前さんも知っとるヒーローを育てたこともあるんじゃが…」

「とあるヤツにな、困ったことに負けてしまっての。今鍛え直しとる最中なんじゃ」
俺でも知ってるヒーローって誰だろう？
まさかオールマイト…？
いや、そんなバカな。
こんな爺さんに教わってたなんて考え…ありえない。
「お前さんも一緒にやるか？」
そう誘われ、俺は…。
「やる」
間を置かずに即答。
当たり前だ。
俺は誰にも負けない、そんなヒーローになるんだ。
その後、爺さんとウチに帰って、色々母ちゃんにお願いした。
幼稚園は辞めて、修行するって言ったらめちゃくちゃ殴られたけど、最終的に許してもらった。
爺さんのところで色々教わるつもりだ。
小学校は家から通う約束をして、その日のうちに家を出た。
こうして爺さんは親公認の師匠となった。

師匠の名前はグラントリノと言う。

ーーー

そんなことを考えながら僕はお茶子さんと電車に揺られ、家から一時間ほどのところで降りた。
二度ほどしか来たことのない土地なので、イマイチ土地勘がない。
都内の住宅街を抜け、やや人も疎らだ。
記憶を頼りに歩くとその土地の地主だろうか、大きな日本家屋の並びが見えてきた。
道に影を落とす竹笹が秋が深まる中でも青く揺れている。
「はー…空気が澄んできたねぇ…」
そう言うお茶子さんは目を閉じて、鼻から深呼吸をしている。
左手で繋ぐ彼女の手は、僕の手をしきりににぎにぎとさせており、少しむず痒い。
「携帯、買ってもらえたから遠出したけど、母さん心配してないかな？」
一般的に見て、幼稚園児の僕らが二人きりで出歩いているのを見掛けられれば、補導されても仕方ないが、一応そう言った場所は狙って通らなかった。
別にやましい事をしているわけでもないし、逃げなくても良いんだが、対応を考えると面倒で…。
「ＧＰＳも有るし、大丈夫やと思うけど？最近、パートを休みがちだったから、良い加減出ないとって言ってたし、仕方ないんじゃない？」
「一応、一回連絡しておこう」
そう言ってショルダーバッグから取り出したスマートフォン。
小さくなった僕らには少し使いづらい。
『もう少しで目的地、心配しないでね』送信、っと」
打ち終わると画面をロックし、バッグに戻す。
一度離した手をまた繋ぐ。
その顔を見てみれば、いつもの麗らかな笑みにパッと変わった。
「前のゴツゴツした手も好きだったけど、まだ小さくて、可愛い手も好き」
そう言いながら、僕の手を引いて腕に左手を這わし始める。

「はは…歩きにくいから、それは辞めてほしいな」
「やー、なのー」
今度は僕の手の甲を自分の頬に押し付け始める。
困りはするが、この様子を見るのも好きだ。
しかし、その時間に終わりを告げる。
「ここ、だね」
「私は一度も来た事ないから知らなかったけど、大きなお屋敷だねー…」
開かれたその門扉と武家屋敷のような高い漆喰の壁。
日本家屋と言えばこの形、と想像出来る風貌だ。
「あちゃあ…インターフォンは後付けか…。仕方ない。中に入って声を掛けよう」
門の周りを見渡すもそれらしきものが見当たらないため、諦めて侵入する。
ずっと繋いでいた手を離し、身嗜みをお互い再確認。
気付かないうちに彼女の頭に赤い楓の葉が付いていたので取ってやる。
「すみません、どなたかいらっしゃいませんかー!」
すみませーん!と玄関の前で声を張り上げる。
そうするとどこか遠くから「はーい」と応答があった。
待っていれば1分もしないうちに、その引き戸が開かれる。
「どちら様ですかー?」
現れたのは小学校高学年くらいのお姉さんだ。
銀色に輝く髪に疎らに赤が混じる彼女。
何度もあったことがあるから知っている。
「こんにちは。焦凍のお友達かしら?」
記憶の彼女と違い、まだメガネをしていない。
「初めまして、緑谷出久と言います。こっちは麗日お茶子です。」
この世界では初めて会う、轟くんのお姉さんだ。

１７．Ｏｌｄ　ｍａｉｄ（ババ抜き）

僕らがやって来たのは、Ｎｏ．２ヒーローエンデヴァー、轟　炎司氏のお宅だ。

そして、僕らの同期の家でもある。

ニコニコ微笑みながら挨拶をし、持たされた、と言って用意していた葛餅の菓子折りを渡す。

そのまま、何かを聞かれる前に上げてもらい、中庭に面した和室へと通された。

「今焦凍を呼んでくるからねー？」

小さな子が二人きりで来ていることに疑問に思わなかったのか、舌足らずな話し方をする冬美さん。

潜入作戦の第一段階は成功だ。

「デクくん。エンデヴァーと戦うって本気なの？」

ざっくり言うけど、まさにその通り。

実際僕には、それ以外に解決法が見つからなかった。

「うん。エンデヴァーが家にいるだろう情報は押さえてあるから問題はないはず…それで、轟くんのお母さんと轟くんのケアをお願いしたいんだけど、本当に大丈夫？」

「それは任して！リカバリーガール監修のカウンセリングセミナーの首席だよ？まだ実害が出てなければ、十分にケアできるよ！」

両手を握り、腰溜めに構えているお茶子さん。

ヤル気モードの時、良くやる構え。

それを見て僕は…

「はあああ…かわいいいいい…」

口から本音がまろび出ていた。

それを聞いてお茶子さんはキョトンとした目になり、首をそのまま落とすように傾げた。

いちいち仕草が可愛いな、本当に…。

「焦凍連れて来たよー！」
くだらないやり取りをしているうちに冬美さんが戻ってきた。
襖を開け、中に入ってくる轟くん。
ミニマムサイズだが、整った容姿は知ったままだった。
「お前らだｒ「こんにちは！お茶子と遊ぼ！」」
誰何する轟くんに被せるように声を上げるお茶子さん。
今は冬美さんに疑われるのはよろしくないので、良い判断だ。
轟くんの両手を取り、笑顔を見せている。
…少しムッとしたが、顔には出さないよう努める。
「デクくん、何して遊ぼっか！」
「僕トランプ持って来たよ！これで遊ぼう！」
咄嗟にお茶子さんのテンションに合わせ、僕はそう答えた。
少し気恥ずかしいが、子供同士だから問題ない…そう自分に言い聞かせるも顔が熱いや。
「待て…お前ら…「簡単なババ抜きが良いかな？一緒にやろ？」」
会話の主導権を握らせない…こちらの都合を押し付ける形だ。
相手に悪印象を与えかねないので、本来悪手だが、子供の図々しさならそれほど問題じゃない。
「待てって…それに俺…ババ抜き？のルール…知らない」
所在無さげに指先を弄り出す轟くん。
そんな姿を見て、込み上げるものがあるが、それを押さえ付けてお茶子さんとアイコンタクト。

「「教えるから、一緒にやろ！」」
出来る限りの笑顔、目線を合わせ、安心感を与える。
幼い轟くんは俯くのをやめ、僕らに視線を合わせてくれた。
「ね？」
駄目押しにお茶子さんが畳み掛ける。
轟くんの顔に朱が射すのを僕は見た。
お茶子さんは上げないぞ…！

「お姉ちゃん、学校の宿題があるから行くね！それじゃあごゆっくりどうぞー」
しばらく様子を見ていた冬美さんが笑みを浮かべたまま襖を閉じて何処かへ行った。
しばらくは待ちだ。
トランプ遊戯に興じよう。
ーーー

エンデヴァー。
オールマイトに次ぐプロヒーローだ。
オールマイトに対し、怨念に近い執念を抱えており、その影響が将来的に轟くんに悪影響を齎す…。
それに…。
「こんにちは、エンデヴァー。お邪魔しています」
精一杯の笑顔を浮かべ、挨拶する僕。
「どちら様かね？悪いが、焦凍は忙しい。お引き取り願おうか」
誰何から一息に帰れとまで。
随分と拗らせているものだ。
「いえ、焦凍くんにも用はありましたが、僕らはあなたに用があって訪ねさせていただきました。」
手に持っていたまだ揃っていない手札を捨て札の山に投げる。
そうしてから僕はゆっくりと立ち上がり、大男を見上げる。
「初めまして、緑谷出久です。デクとお呼びください、エンデヴァー」
握手を求めるように手を差し伸べる僕。
その手は瞬時に叩かれた。
「お引き取り願おう、と言ったはずだ。ウチの焦凍は忙しい。友達と遊んでいる暇などないのだ」
叩かれたせいか、轟くんの扱いに対してのせいか。
どちらかは分からないが、いずれかのせいで僕の脳裏が赤く燃えたのが分かった。
「それはオールマイトを超えるヒーローにするため…ですか？」
知っている情報。
誰であろう、轟くんから昔に聞かされた話だ。
交渉術としては下策だが、本題にメスを入れるには最適解だったと言えるだろう。
「ほう。それは焦凍から聞いたのかね？」
「いいえ、僕の推測です。あなたがオールマイトに敵わないならば、自分の子供に超えさせようと言う言わば都合の押し付け、ですよね？」
核心を抉る決定打を乗っけから打ち込む。

苛立ちからか歯軋りが鳴り、コメカミに青筋が立つのが見えた。
「何が言いたい、小僧…？」
「はっきり申し上げます。あなたのやり方は間違っています。焦凍くんに望まない訓練を課すのはただの虐待、それ以外の家族には見向きもせず、奥さんや焦凍くんにキツく当たるのはあなたのエゴです。そんなやり方ではその内、ご家族からヴィランが出てしまいます…よっと!?」
言葉を紡いでいる間に僕の顔面目掛けて掬い上げるような拳が飛んできた。
拳から視線を離さず、スウェーの要領でやり過ごす。
空振った拳はすぐに引き戻され、再装填。
怒りに身を任せて振り回す素人と違い、堂に入った構えは、超常黎明期以前に風靡したプロボクサーを彷彿とさせる。
「…君はヒーロー志望かい？」
「ええ、オールマイトに憧れて自らを鍛え上げました…簡単には倒されませんよ？」
「随分な自信だな…良かろう。焦凍の前に貴様から揉んでやる」
付いて来いと踵を返し、廊下へと出て行ったエンデヴァー。
その後を追おうとするとシャツの裾を誰かに握られる。
振り向いて見れば、涙を湛えた轟くんの姿があった。
「で、デク…父さんはすごく強いんだ。だ、だから戦うなんて…無茶だよ…！」
先ほどまでの笑顔は何処へかいってしまった様子。
震える右手で僕の裾を握るため、震えが体表面を撫で、少しむず痒い。
更に彼のコントロールを逸した冷気が周囲を覆い、熱された気温が急激に冷え込んできた。
寒さに負けず、震えを抑えながら轟くんの肩に手をやる。
「大丈夫、僕は負けないよ！お茶子さんと一緒に見てて」
ニッと歯を見せる笑い方を敢えてする。
そうすることによってか、彼の手からスルリと僕の服が抜ける。

「お茶子さん、彼のお母さんは後だ。まずはあの頑固頭を小突いてくるよ」
「ちょーっと、私もあの言い方には私もおこだから…私にもやらせて欲しいなー…なんて。ダメ？」
満面の笑みに青筋を浮かべる彼女の表情は、アンバランスながらその性根を正しく表す。
僕はその笑みに笑みで返し、平手一発なら、と応じた。

18. Slap with your hand（平手打ち）

結果から言おう。
一合で決着が付いた。
訓練場に入った後、互いに構えてすぐにお茶子さんの開始の合図が入る。
数瞬の間、エンデヴァーの呼吸に合わせて、僕が大きく飛ぶと、視点が下がっていたためにその視界から逃れた。
視界のやや上方から回し蹴りをお見舞いすると、過たず彼の顎に掠めるように当たり、そのまま昏倒。
無抵抗に後ろに倒れるエンデヴァー。
その後頭部を掬い上げるように平手打ちをかましたお茶子さんのお陰で、地に沈まず今は空中に浮かんでいる。
「…!!」
先ほど以上に煌めく轟くんの瞳。
轟家の絶対者たる父親を伸したのが、同い年の男の子であるのが、相当以上の衝撃を与えたようだ。
「ふふん、心配いらんかったやろ?デクくんは強いんだよ!」
宙に浮くエンデヴァーの傍で腕を組み得意げに言うお茶子さん。
「デク…!強い…!それにお茶子も速かった!…すげー…!!」
目をキラキラさせて言う轟くん。
ああ…!なんで彼を見てそんなにだらしない顔してるの!!
浮気は許さないからね!
「はぁ…轟くんかわええなぁ…。なんで幼い男の子ってこんな可愛いんやろか…?」
持って帰って飾りたい…などと申しており…。
絶対に許しませんからね!!!
「な…なぁ、デク…。俺、父さんに勝ちたい…!どうやったら強くなれる…?」

「エンデヴァーが起きたら、色々お話しするよ、エンデヴァーと。そうしたら、きっとお父さんも優しくなるし、二人で一緒に強くなれるよ」
オールマイトの笑顔を元に僕の顔に再現させる。
安心させられる笑み、歯を見せて不敵に笑む。
返される笑みは今日一番の笑顔だった。
「個性無しでも、十分戦えるねー。」
「まぁ、侮られてたみたいだし一瞬だったから、何をされたのか分かってないんじゃないかな？」
鍛えた技で足刀一閃。
その技は当代最強に次ぐＮｏ．２にも通じた。
やはり、鍛えて損はない。
僕は再度決心する。
このやり直しの世界でも刃を研ぐことを。
「ぐ…ぬ…？な、何だこれは!?」
昏倒から覚めたであろうエンデヴァーは宙に浮いて身動き出来ないことに驚いている。
「私の個性です。倒れてしまうと頭を打ち付けるところだったので」
本来叩く必要はないのに、後頭部を引っ叩いたのを言わず、助けた点のみを強調する。
全く…シレッとしてるなぁ…。
「僕の勝ちでよろしいですね？」
下から見上げながらエンデヴァーに問う。
真一文字に結んだ口からは何の音も出なかったが、その喉は唸り如実に心内を表していた。
「お話ししたいことがあるので、二人きりにさせていただけませんか？」
お茶子さんに能力を解除され、足から床に降りる彼にそう告げる。
「焦凍くん、お母さんに会わせてくれる？」
お茶子さんは彼の手を取り、部屋から出て行く。
当初の予定通り、お母さんのメンタルケアをしに行ってくれるようだ。

「二人きりになったが…話とはなんだ？」
「僕とお茶子さんについてとあなた方轟家の未来についてのお話です」
「占いなら結構。そう言ったものに用はない」
話を中断して、立ち上がり退出しようとする彼を次の一言で引き止める。
「轟燈矢さん。あなたの第一子ですね…このままでは確実にヴィランになりますよ」
僕の横を通り過ぎて、部屋を出ようとする彼の足音が止まった。
「どう言う意味かね？」
「あなたは『荼毘』と言う言葉をご存知ですか？」
「ダビ…？語感から仏教用語に聞こえるが…どう言う意味かね？」
「インドに於る四葬の一つ、水葬・火葬・土葬・風葬の四つの内の火葬に当たり、『苦菜』に毘沙門天の『毘』を当てて『荼毘』と読みます。」
「将来的に彼が名乗るヴィラン名です」
「…貴様、何を言っている…？」
「正しく、自己紹介させていただきます。緑谷出久、２５歳。ヒーロー名デクと申します。未来より還って来ました」
伸ばしに伸ばした本題に足先を突っ込んだ。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「つまりは、そのオールフォーワンとやらを倒す際にオールマイトがやられてしまうと…その手助けをしろと言うのか…」
一通り話した。
未来の話、オールマイトとの協力体制の件。
最初は半信半疑だったが、僕の電話からオールマイトにかけ、そこから一言二言エンデヴァーに対するフォローを入れてくれたので、信用していただけたようだ。
板張りの剣道場のような部屋の中央で楽に座りながら対面する僕ら。

エンデヴァーはやや濃いめの髭を撫でつけながら、考えをまとめているようだ。
「貴様の言うことを全て鵜呑みにするつもりはないが…燈矢のヤツがその荼毘と言うヴィランになって、将来焦凍の同級生を殺してしまうと言うのならば、その前にケアをする…と言うわけなのだな…今は反抗期で家にも中々帰ってこない馬鹿者だが…話の席を用意するべきか…」
「一度ヴィラン化してしまえば、まともに戻るのに時間がかかります。それは精神的にも社会的にも同様です。なる前であれば、まだどうにでも出来るはず…なので、エンデヴァー。あなたの職務としてでなく、親としての姿勢が大切です。あなたのエゴなく接すれば、いずれ必ず答えてくれるはずです。それで聞くことが無くとも、根気よく続けてください。『言われる相手が誰なのか、何をしてくれた人なのか』これは高校生の時、焦凍くんから聞いた言葉です。今まで何もしてくれなかった親の言葉を聞くはずもないことを心してくださいね…？」
分かっとるわ、と言いながら頬杖を突く。
絵面的には子供に諭される拗ねた大人の図だ。
随分と子供らしい拗ね方をするもんだな…。
轟くんは落ち着いた天然さんだったけど、その性格は母親似だったのかな…？
「奥さんのこと…どう思っているんですか？」
「そ、そりゃあ、結婚しとるんだから、大切だと思っているに決まっていよう…」
「個性目当ての個性婚ではない…そうですね？」
「当たり前だ、誰がそんなことを言った！」
未来の焦凍くんだよ、と言えれば…。
「…未来の焦凍くんですよ」
あ。
言うつもりなかったのに…口から出てしまった。
顔を顰めるエンデヴァー。
その怒りの矛先はどこに向けられようか…。

「今、奥さんは相当なストレスを溜めてるはずですよ。何せ、衝動とはいえ焦凍くんの左側憎しと煮え湯を浴びせるくらいですからね…。大事ならばもっと大切にしてください」
　ぐうの音も出ないだろうと思ったが、辛うじて「ぐぬぅ…」と言う音は出たようだ。
「確かにここのところ、怒鳴り付けてばかりだ…。自重するよう省みよう…」
　バツが悪く感じてか、幾分か小さくなったように感じる。
「デクよ。この話はオールマイトのほかに知るものは何人居る？」
「僕の母とお茶子さんの両親には過去に戻ってきたこと、未来への根回しをすることを伝えてあります。将来的に起こる事象についてはオールマイトとその師のグラントリノ、そしてあなたにだけお話ししています。また、荼毘やあなたの家庭内問題についてはあなたにしかお話ししていません」
「うむ、承知した。拡散する際は出来るだけ相談してもらいたい。こちらでも把握していなければ、もし漏洩した際は対処が遅れる」
「ええ、勿論です。そちらも同様にお願いします」
　そう言って、差し出す右手。
　今度は叩かれず、しっかりと掴まれた。
「未来で起こる問題の大元を叩くと。しかもそれがオールマイトに匹敵する大物だと…。腕がなるわ…！」
　ガッシリと握られた右手に力を込めるエンデヴァー。
　顔周りで火の粉がいくらか散る。
　じわじわと力が強くなる。
「え、エンデヴァー…？どうしてそんなに強く…？」
「…先程は簡単に伸されてしまったからな…少し意趣返しだ。甘んじて受けろ」
　ギリギリと握りが強くなる中、パリッと光が迸る。
「あっ！貴様！それがお前の個性か!!」
「ええ、先程お話ししたオールマイトから継承した個性ですよ！僕を超えれば、オールマイト超えですよ！」

「くくく、なるほど面白い！表に出ろ！」
ＶＳエンデヴァー２回戦。
…それは部屋に飛び込んできた女性に止められた。
「他所の子に手を挙げるなんて、何をしてるんですか!?」
ＳＬＡＡＡＡＡＡＰ!!!
情け容赦ない強烈な平手打ちがエンデヴァーの左頬に打ち込まれる。
僕はといえば、握ったままだった右手の力が一瞬で抜けたので、おもむろに離す。
姿勢もそのままで、急にエンデヴァーが殴られた事態に心も追いつかない状態で呆然としていた。

１９．Ａｄｖｅｒｓｉｔｙ Ｂｕｉｌｄｓ Ｃｈａｒａｃｔｅｒ（雨降って地固まる）

「いっ!?いきなり何をする!!」

「もうあなたの言いなりになるのは辞めです！大切な焦凍や冬美、夏雄、燈矢だって…あなたのオモチャじゃ無いんですよ!?それなのにあなたときたら…義務だなんだと自分の都合ばかり…!!子供達にだって自分の未来を選ぶ権利があるのよ!?親がそこに責任はあれど、義務を押し付ける権利なんて無いわ!!」

早口で捲し立てる白髪の女性。

エンデヴァーの上に跨り、左右交互に平手を打ちかます。

一撃一撃に腰が入っており、それらを受けて辛うじて、ガードが出来ている程度のエンデヴァー。

初撃から凡そ十発は食らっているが、未だに目を白黒させて、ただ漫然と攻撃を受けている。

「…ゴメン、デクくん。ちょっと煽り過ぎてもうた…」

足音を殺してそばまで来ていたお茶子さんが、顔の前を手刀を立てて謝罪している。

ああ、カウンセリングとやらが覿面だったわけだ。

「…何言ったの、お茶子さん？」

「いやぁ、このままだとあなたも子供達も耐え切れず、家庭崩壊を招いてしまう…って言うのを懇切丁寧に並び立てて説明してたら…思ったよりも冷さん溜めてたみたいで、結果がああに…」

…ああ、すごく納得だよ…。

「子供にも権利があるのを棚上げにして、自分のものの様に扱い、何でも『個性』『個性』『個性』って!!!!いい配分で現れた焦凍以外に見向きもしないで、何が親よ!?ふざけないでよ!!」

「冷」

「その上、『最高傑作』ですって!?子供を望んで産んだのよ!?せめて『作った』言うのは私よ!産んだどの子も私の『最高傑作』よ!!あなたの作品なんかじゃ無いわ!!」
「冷」
「そんな単純で大切なことも分からない人の言いなりになっていたなんて…思い返しても腹が立つわ。親権なんてあげない。全部私が貰う。実家に帰らせてもらうわ。離婚よ!!」
「冷!!!」
今!!まで叫んでいた冷さんに代わりエンデヴァーが更なる大声で呼び止める。
「な…何よ…」
「麗日のお嬢さんに何を言われたか知らんが、俺も同じように緑谷くんに色々聞かされて間違っているのを自覚した…すまない」
落ち着き払った声で、冷さんに組み敷かれながら謝罪の意を述べるエンデヴァー。
それは相当に衝撃だった様で、冷さんはマウントポジションのまま目を見開いて固まっていた。
「冷よ。俺には体温調節という難がある。それを克服出来る焦凍は俺を超え得る逸材だ。期待している。故に行き過ぎ、結果他の子らを軽んじていた。ヒーローとしても人の親としても誤った行動だった…すまなかった…。本来であるならば、等しく、均等に愛を注ぐべきだったのだ…まだ間に合うか分からんが、そうなるべく俺も親として成長しようと思う…。だから、離婚は待ってくれ。俺を見ていてくれ」
そう言って、冷さんの両手を取る。
そこで耐えきれなくなったのか、冷さんは声を上げて泣き始め、身体を全てエンデヴァーに預ける。
その冷えた身体を熱く滾るその身で抱きしめ、ようやく動いたそのままに頭を撫でつけ始めた。
「結果オーライ…かな?」
「うん、そうだね…とりあえず、僕らは移動しようか…」

ぐすぐすと鼻をすする音が響く中、僕らは気配も音も消して、そっと部屋から抜け出した。
「雨降って地固まる、ってヤツかな？」
「それにしてはドラマを見せつけられた気分だよ…」
ジャンル的には相当古いメロドラマの雰囲気だ。
完全に僕らのことを忘れられてたと思う。
まぁ、いい方向に転がったし、良しとしようか。
そう結論付けて振り返れば、廊下の角に轟くんが白い髪の側だけを出して覗き込んでいた。
「デク、お茶子…。母さん、大丈夫かな…？」
その目にはありありと心配の気配を浮かばせ、微かに潤んでいた。
僕とお茶子さんは顔を見合わせ、笑い合う。
「もう大丈夫だよ。お父さんと仲直りしたみたい」
「で、でも、母さんのあんなに怒った姿…初めて見た…」
「大丈夫。もしかしたら、焦凍くんの弟か妹が出来るかもしれんよ！」
お茶子さん、何言ってんの？
「弟か妹…？俺の!?」
ああ…食いついちゃった…。

ーーー

れば、分かりやすく朱が射していた。
「君たちは見た目だけ子供だが、そのやり取りを見ていると新婚夫婦のままだな…」
苦笑いを浮かべながら、そう言うエンデヴァーに何一つ言い返せない。
「デクとお茶子はもう結婚してるのか…？」
キョトンとした顔のままそう言う轟くん。
まぁ、確かに結婚しているけれど、それは未来の話だ。
「ちゃうよー？いつか結婚しようね！って約束してるだけだよ？なんて言うか知ってる？」
「え、と。えと。こん…こんやくしゃ、だっけ？」
「そう！凄いやん、やっぱ頭いいんやね焦凍くん！」
お茶子さんに褒められて顔を赤くし縮こまる轟くん。
満面の笑みはやはり誰にでも効果のある劇毒だ。
お茶子さんが取られないように僕もしっかりしなきゃ…！
「あ、そうだ。一応来た時に冬美さんに菓子折りをお渡ししたんですが、中身が葛餅なのでお早めにお召し上がりください」
「何!?それを早く言わんか！冬美！どこにいる!?」
パッと踵を返し玄関に戻ろうとするエンデヴァーを冷さんが服を掴んで阻止する。
「あなた。せめてお見送りくらいしっかりしてください」
「こうしてる間に冬美が全部食ってしまう！早く俺たちの分を確保しなくては!!」
そう弁明するも冷さんはどこ吹く風。
冷さんの個性で足元を凍らされてまでいるのに砕いて進もうとしている。
「見送りはここまでで結構です。また来る際はご連絡いたしますので。それでは」
「それでは失礼します」
ペコリと二人合わせて頭を下げる。
その後踵を返して門に向けて歩き出せば、轟家の面々も家へと入っ

ていくようだ。
「母さん、俺に弟か妹が出来るかもって言ってたけど、ホント？」
「なっ!?何を言っている、どっちに言われた！」
「お茶子」
「あらあら、それもいいかも知れないわね」
「…冷」

これ以上はプライベートだし、耳をシャットアウト。
門をくぐり抜けた先で、僕はお茶子さんを抱え、お茶子さんは個性で僕の重さを消した。
「行くよ、お茶子さん」
「うん」
誰もいないことを目視で確認してから僕らは、家へと向かって最短距離を走り出した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

Ｓｉｄｅ：???
今ありえないものを見た。
ここで有名なＮｏ．２ヒーローの屋敷から出てきた子供。
見た目的には俺と同い年だ。
男の子が女の子を抱えるとピンク色の薄いモヤみたいなのが男の子を包み、その後緑色の稲妻が男の子の全身を包んだかと思うと、二人の姿が消え去った。
強風が吹き荒れ、２人のいたところへ走り見上げると、物凄いスピードで屋根伝いに飛んでいくのが見えた。
「すげぇ…」
見上げたままポカンとしてしまっていた。
彼らの姿が見えなくなるまで見ていたが、それほどの時間は経っていないようだった。
「アイツらもヒーロー目指してるのかな…？」
凄い奴がいるって知った。
俺も頑張らなきゃ…。

「カモシレナイナ…同ジクライダシ、頑張ラナキャダナ！」
後ろに伸びた影にそう言われた。
「そうだな…相棒」

２０．Ｒｅｄ　Ｒｉｏｔ（烈怒頼雄斗）

翌日。
僕らは多古場海浜公園に来ていた。
「こんな汚いんね…」
「僕が掃除した時はこれ以上だったよ…」
見渡す限りのゴミの浜。
砂よりも目に付くのは大小様々な流木やら不法投棄物など。
今より十年後に清掃した時は今は無い軽トラックなども放置されていたほどだ。
現在は大きくともまだ冷蔵庫程度で済んでいる。
それより小さくなると液晶が割れ、横倒しになった４５インチのテレビくらいか。
「裸足で走れるくらいを目指して片付けよう」
「そうやね…こんなんじゃ、マトモなトレーニングすら出来ないね…」
「と言うわけで…お茶子さん。両手出して？」
うん？と疑問を顔に浮かべるも素直に両手を差し出すお茶子さん。
僕はその両手の中指に少し大きめの絆創膏をして指サックを付けた。
「大丈夫？緩くない？」
「キツくも無いし簡単にすっぽ抜けそうにも無いよ？それでこれは何？」
「五指の肉球に触れたものの重さを無くすお茶子さんの個性を簡易にだけど封じたんだ。筋トレするんだし、負荷を掛けなくちゃ」
ニッコリと笑んで顔を見やると、お茶子さんの顔は分かりやすく青褪めた。
「ま、待って、デクくん？コレを個性無しでやるん？」
「そうだよ？僕も使わない。基礎筋力を鍛えるためにもゼロにしちゃダメでしょう？」
筋トレするのにダンベルの重さをゼロにしちゃあ、何のトレーニングにもならないじゃないか。

そう思っている僕の目の前で、青から白に変わった顔色でお茶子さんはその場で固まっていた。
「さぁ、少しずつでも始めよう！」
そう言って僕は手近にあった千切れたゴムタイヤを担ぎ上げた。
「…お、おー…」
数秒のラグがありながら、お茶子さんは片手を握り、天へと突き出した。
両肩にタイヤを抱えて、砂浜を仕切る防波堤の階段の手前まで駆ける。
帰りは軽いので出来るだけ早く。
行きは持てるだけ持って、重心等バランスを考えながら足元に気を付けて駆け足。
そうやって僕らは約二時間ほどで、ゴミの無い縦横５メートルほどの空間を作り上げた。
「はぁ！はぁ！…はぁ…。もう、今日はムリ！…明日絶対筋肉痛や！」
「お疲れ様。僕ももう腕上がんないや」
そう言って両手に持ってたペットボトルの水の内片方を差し出す。
「ありがと。でも、コレより酷いのを一人で…かつ十ヶ月で片付けろってオールマイトも酷やなぁ…」
両手をその水で洗い流し、残りを一気に？み下すお茶子さん。
傍から見てる僕は口の端から零れる雫に釘付けになり、襟首に消え行く水滴を見送った。
不意に視線を外して、僕も同じように手を洗い流し、残りを口に含む。
「今、『雫がエロいなぁ～』って思ったでしょ？」
飲み込む前に吹き出した。
僕は我慢出来ず、凄絶に咳き込んで口内のあらゆる水分を砂浜に撒き散らした。
「な、何を言ってるのかなぁ!?そ、そそそんなこと思ってないよ!?」
僕は否定を込めて両手を、口が開いたままのペットボトルをも振り回し、その中身が四方八方に散っていく。

「うそ。だって私もおんなじこと考えたもん」
はえ？
「デクくんも口の端から溢れてて、それが胸元に伝い落ちてたんだよ？気付いてないでしょ？」
そう言われて僕は乱暴に袖口で頬から口周りにかけて拭い取る。
確かに、頬から顎から喉元に向けて少し濡れていたようだ。
「ホント、考えること一緒、だね？」
砂浜に座り込んだままお茶子さんはこちらに笑顔を向けてきた。
「わっ⁉いつものブサイク顔！」
ブッ、と少しはしたない笑い方。
それでも彼女の笑みには力があった。
「も、もう！休憩は終わり！次の訓練やるよ！」
僕にはそんな照れ隠ししか出来なかった。
「えー、全然休めてへんよー。もうちょっと休憩しよーよー」
両手を振り上げ、そのまま後ろに倒れ込むことで抗議を示すお茶子さん。
そんな仕草にクスリと来た。
「もう…もうちょっとだけだよ」
「うん」
少し肌寒くなってきた潮風に火照った体を委ねて、僕らは砂浜に並んで横になった。
横になって…目を閉じて…しばらく。
危うく寝てしまいそうなほど心地よい空間に雑音が混じる。
ざりっ…ざりっ…と砂を噛む音。
僕は体を起こしてその音源を辿ると
「あれ？君は…？」
「なぁ、何でこんなゴミだらけの浜辺で寝てんだ？家出？」
鼻頭に絆創膏を貼った如何にも〝ヤンチャ坊主〟な男の子が一人立っていた。

髪色は暗めな茶色。
親譲りか開く口にはギザッ歯が見え隠れしていた。
その面影に見覚えがある。
だが、彼のイメージとは大分違う気もする。
「僕、緑谷。」
「私は麗日ー。君はー？」
寝転がったまま顔を向けて、そう問うお茶子さん。
秋も深まり、涼しい気候だがタンクトップにハーフパンツの出で立ちの男の子は特撮のヒーローのように格好付けて自己紹介を始める。
「おれは切島！友達はエイちゃんとかって呼ぶぜ！」
ギザッ歯を噛み合わせて、笑んだその顔はかつての級友の笑顔のままだった。
少し潤みそうになる涙腺を必死に押し殺し、震える声を抑えるだけで精一杯だった。
「それじゃ、私もエイちゃんって呼んでいいー？」
「おー、良いぞうららかー。んでお前らここで何してたんだ？」
円らな瞳に疑問を浮かべて、再度僕らに問う切島くん。
「僕はデクって呼んで。僕らここを綺麗にして特訓場にしようとしてるんだ」
「特訓場！カッケェ！なぁなぁ！おれも混ぜてくれよ！」
ものすごい勢いで距離を詰められた。
近い、そして近い！
「う、うん。二人だけの特訓場にするつもりはなかったから大歓迎だよ」
「おお！二人はヒーロー目指してんのか？だから、掃除して綺麗にしようとしてるのか！おれな！ヒーローならクリムゾンライオットが一番好きだ！なんたって後ろに引かないカッコいい男だぜ！おれもああいう漢になりたいって前からずっと…」
お、おう…子供のテンションってこんな感じだったっけ…？
と言うか僕がヒーロー談義してる時ってこんな感じなのかな…改めないとかっちゃんがまた怒る…。

捲し立てる切島くんにたじたじな僕。
そんな姿を傍から見て、また吹き出すように笑い出すお茶子さん。
「ぶっふ!?デクくんがたじたじや!!」
お腹を抱えて文字通り転げ回るお茶子さん。
笑われるのは良いけど、流石にそれははしたないよ…？
ほら、切島くんがポカンとしてるからそろそろやめて、ほら立って。
「麗日とデクは仲が良いんだな！」
「んっふ！フィアンセだからね！」
そう言って胸を張るお茶子さん。
控えめに言ってクソ可愛い…！
「ふぃあんせ…ってなんだ？友達より上の親友みたいなやつか？」
そう言われるや否や文字通りズッコケるお茶子さん。
いや、そんな芸人根性出さなくていいよ？
と言うか、そうか。
地頭がいいかっちゃんと轟くんとしか同年代の子たちと会ってないから分かってなかった。
通常の四歳児は知らない…知っている方がマイノリティなんだ。
つくづく思う。
幼い頃からかっちゃんって凄かったんだな…。
「婚約者、ならわかる？」
「それなら分かるぜ！将来結婚して父さんと母さんになる、だろ？」
立ち上がって、同じ目線で切島くんと話すお茶子さん。
精神年齢を抜きにしてもお姉さんっぽい…。
「…ん？ふぃあんせって婚約者の事なのか？ってことはデクと麗日は結婚するのか？」
「そーやよー？大人になったら一緒になろーね！って約束しとるんよ！」
再度、腰に手を当て胸を張る。
切島くんの目の彩度が爆上がりした。
「おおおおおお！そうなのか！おめでとう！ん？おめでとうでいいのか？いや、嬉しいことだもんな！おめでとう！」

脇を締めて拳を握り、そう言う切島くん。
その身体に力を込めて喜びを露わにするその様は小さくなっても
変わってなかった。

２１．Ｆａｃｅｌｅｓｓ（無貌）

Ｓｉｄｅ：Ｓｉｒ　Ｎｉｇｈｔｅｙｅ

「さて、それでは会議を始める」

総勢２０名にも及ぶプロヒーローとそのサイドキックたちだ。

いずれも一線級の技量を持ち合わせ、その力量も折り紙つき。

そんな彼らが一堂に会するはマイトタワー６６階多目的会議場。

私はその彼らに向かう形で上座に座している。

「司会進行は私、オールマイトのサイドキックを務めるサー・ナイトアイです。よろしくお願いします」

起立し一同に頭を下げる。

小さく返礼があり、それが無くとも皆黙礼で返してくれている。

「さて、本日お集まりいただいたのは、事前の連絡の通り、将来的な危険因子の排除が目的です。お手元にお配りしております全３０部に渡る資料は将来的にヴィランとなりうる者たちの個性と大まかな犯行場所を記録した資料となります。それらの資料は部外秘となりますので、お取り扱いには十分にお気をつけください」

机に着くなり、大前提の項目を並び立てる。

一斉にその資料を皆めくり、中身を大雑把にだが、確認する。

「一つ質問いいか？」

全身にチェーンを纏った男がジャラリと音を鳴らしながら右手を挙げた。

どうぞ、と意味を込めて片手を差し出すとその場で立ち上がり、続ける。

「ここ二十年近く先のデータが纏められているが、これらの資料は何だ？何故ここまでのデータを集めることが出来ている？例えばヴィラン名”血狂いマスキュラー”町尾拳、『個性・筋力増強』殺人９件未遂１８件『予定』とはなんだ？何故、まだ起きてもいないことが書かれている？」

その通り。

この資料は全て『未来』に起こる事象を纏めたものだ。

その質問は最もなものだ。
「そちらについては私から説明させていただこう」
そう言って立ち上がるのは、Ｎｏ．　１ヒーロー。
フォーマルなスーツで会議に臨んだオールマイトは私の隣から声を上げる。
「えー。まずいつもの挨拶としてだが、今回の目的を合わせて【私が協力を求めに来た】と言うことで今回の会議の主目的にあたる本資料の作成に至った概要を大まかに説明させていただく。まず、隣にいる私のサイドキック、サー・ナイトアイの個性はご存知『予知』だ。しかし、彼は二十四時間につき一人の未来しか見れない。今回彼にお願いしたのはその人物の追跡、未来予知を通じて大元の資料の検分を行ってもらった。
大元の資料の作成者は彼より確度の高い予知能力を持っているが、本人の意向で匿名とさせていただく。ヒーローでは無い為、個性の無断使用に関しては既にお説教済みなので、今後その作成者を追及するのは控えていただくようお願いする。」
事前に緑谷出久には会っている。
オールマイトに聞いた話だけでは眉唾物だったが、実際に会って、『個性』を見せてもらい、そして『個性』を使った結果、真実だと認めざるを得ない状態であった。
アレが生まれた時からほんの数年の間に完成したとすればそれは事だ。
有り得ない。
故に認めるしかなかった。
”時間遡行”の話を。
「さて、本資料について、極めて確度の高い”犯罪予報”の資料となるので、これによって個人を”先制攻撃”するのはヒーローとしての行いではないので、辞めてくれよな。このまま何もしなくてはヴィランになってしまう者たちばかりなので、先回りして救出しようと言うのが、今回の会議の主目的となる。そのためには私の２本の腕と足では足りないのでね…是非とも皆に協力していただきたい。よろしくお

願いする!!」
ヴィランになってしまう者は簡単に分けて2種類いる。
精神的によるものか、環境的によるものかだ。
環境的なものならば、環境そのものを変えてしまえば良い。
ただし、精神的なものは悪質になりやすく、極めて厄介だ。
そう言ったものにも救いの手を差し伸べると言うのは、余りにも無理な話。
救えるならば救うが、そうでなければ最小被害で抑えるために即座に捕縛する。
そうし得る為の協力体制をこの場で築き上げたいのだ。
「事情は承知した。私はこの資料をもとに全面的に協力しよう」
「俺もだ。将来の不安の芽を摘むことが出来るのであれば、それほど良いことはない」
参加してくれていたＮｏ．３のベストジーニストとＮｏ．２のエンデヴァーが賛同を示してくれた。
元よりこの二人には緑谷出久から直々に説明をしていると事前に聞いているので驚くことも喜ぶこともない。
トップ中のトップの賛同を得たと思えば、その他のヒーロー達は己のサイドキックと何事かを話している。
「こんな眉唾資料じゃ協力してやれねーよ。実例をくれよ。この資料の中ですぐにでも現れる都合のいいヴィラン候補はいないのかよ？」
突如声を上げたかと思うと乱雑にその持っていた資料を机の上に投げ捨てる。
後ろでサイドキックが慌てふためいているぞ？
単独行動か？
「気に入らないのならば、おかえりいただいて結構。ちなみにこれは国とも話が付いていることだ。既に保護したヴィラン化予定の女の子もいる。親からのネグレクトも有り、保護施設で問題なく保護・教育が出来ている。」
「へぇ。そんな女の子がいるのか。名前は？個性は？予定の事件件数は？」

「未成年なので控えさせていただく。個性は『変身』予定事件件数は…」

「認知している件数だけで殺人３９０件超。内プロヒーローの被害が５０件以上。組織内部から破壊工作、暗殺行動による疑心暗鬼を誘う超級ヴィランだ。通称”無貌（フェイスレス）”。将来的に組織されるヴィラン連合の初期メンバーで最年少の殺戮者だ。」

―――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：Ｋａｔｓｕｋｉ　Ｂａｋｕｇｏｕ

「こんにちはぁ…トガです」

「なんだテメェは」

「トガです。ボロボロですね…大丈夫ですか？」

師匠にボコボコにやられた俺は休憩を言い渡され、倒されたままに空を見ていると逆さまな頭が俺を見下ろしていた。

「見んな、クソが」

その後も怪我した膝が痛そうですね、とか血が出てますよ？とかいちいち話しかけてきやがる。

少しでも体を休めたい俺は、完全に無視を決め込むことにした。

目を瞑り、全身の力を抜く。

ザリザリと靴の裏が土を削る音が聴こえて少しずつ遠退くのを感じた。

やっと諦めたか…と思った次の瞬間。

れろん。

経験のない不快感が膝を襲う。

腹筋を使ってパッと飛び起きるとさっきの女が俺の膝を舐めてやがった。

ＢＯＯＯＯＭＭＭ!!!

「何してやがる!?」

俺は両手から爆炎を吹き出して、その女を吹き飛ばした。
「あいったぁ!?せっかく人が好意で傷口綺麗にしてあげてたのに何するんですか!?」
「うるっせぇ!!頼んでねーわ、イカレ女!!」
「イカレ女とは言ってくれますね!?個性が爆発してるせいで頭の中身も爆発してるんじゃないんですか!?」
「つーか、転がされて土付いてんのに汚ねえだろ、舐めんじゃねぇ!!」
「怪我が悪化するかもしれないでしょう!?だから、とりあえず舐めて綺麗にですね…」
「だからって、お前は土を食うのか!!やっぱりイカレ女じゃねぇか!!」
「トガです!!イカレ女って呼ばないでください!!もしもそう呼ぶなら…爆発…そうあなたなんて爆発さん太郎です!!」
「誰が爆発さん太郎ダアアアアアア!?」
ＢＯＯＯＯＯＭＭＭＭＢＯＯＯＯＯＯＭＭＭ!!!

俺の両手は許容限界を物ともせず爆裂し、その言い合いは師匠と師匠が連れてきたデクとあの女が来るまで延々と続いた。
…徐々にエスカレートしながら…。

「このイカレ女がああああ!!」
「爆発さん太郎おおお!!」
最初はおれが頭や肩を殴ったり引っ叩いたりする一方だったのに、少しずつ避けられ、今や個性を使って移動しながらでなければ、上手く当てられないし、避けられない。
「クソクソクソ…クソがあああああ!!」
「辞めんかバカ共!!」
そうこうしてるうちに師匠の靴の裏を舐めさせられ、そのまま昏倒する羽目になった。

22. Ｐｅａｃｅｆｕｌ　ａｃｔ（平穏な一幕）

Ｓｉｄｅ：Ｋａｔｓｕｋｉ　Ｂａｋｕｇｏｕ

「…？……ハッ!?」

目を覚まして、自分の状況をすぐに考えた。

確か師匠に転がされた後…頭のイカれたの金髪女と悪口が原因で喧嘩して…それから…

「そうだ！確かデクと肉球女が…!?」

「誰が肉球女よ」

いつも使わされてるベッドの脇に座りながら何か難しい本を読んでいる肉球女が居た。

「麗日お茶子やって何万回言わすん？そんなんだから、ひーちゃんに『頭の中身爆発さん太郎』って呼ばれるんよ？…ぶふっ！ダメだ…笑いが堪えきれん…」

口元を押さえながらくつくつと喉の奥で笑う肉球女…もとい、麗日。

寝かされて落ち着いていた気分が台無しだ。

思い返したのも、今言われて再燃したのも合わせて、さっきよりも遥かに怒りが燃え上がる。

「こ…っんの野郎!!」

Ｂｏｏｏｏｏｍ!!

両手で爆ぜ、体を反動で吹き飛ばし、麗日に飛び掛かる。

が。

「多少速なったけど、まだ遅いよ？後直線的だし、いつもの大振り…治ってへんね？」

起き上がって勢いに任せた右の大振りに左の手刀を合わされる。

そのまま手首を掴まれ、グルリと部屋の中を大きく一周。

頭からベッドに叩き込まれた。

立たすことすら出来なかった。

つーか、本から目を離しすらしねぇ…。
「くっそ…重力無くすとか反則だろ…!!」
「それが私の個性やもん。私から言わせれば爆発だって十分反則やと思うよ?」
ぐぬぬぬぬ…と唸ることしかできない。
姿勢を逆さまから戻り、いつでも飛び掛かれるように四つ足で構える。
そんな俺を見て、麗日は一瞬目を見開くと、すぐに細めた。
「へえ…さすがグラントリノ…やっぱそう言う構えになるんね…」
よく分からないけど、なんか感心されたらしい。
パタンと厚い本を閉じて立ち上がる麗日。
その後ろ姿に声をかける。
「おい、てめぇ!まだ話は…」
「今何時やと思っとるん?もうご飯の時間だよ?」
ぐぅ…と言葉を聞いたせいか、腹の虫が悲鳴を上げた。
パッと腹を抑えると意地の悪い笑顔を浮かべた麗日はそのまま出て行く。
扉が一度閉まりかけたところで再び開き顔を覗かせた麗日は一言。
「可愛いお腹の虫やね」
「てめっ!?」
怒りをぶつける前に扉が閉ざされ、そのまま足音が遠ざかっていく。
やり場のない怒りに震える俺は歯軋り。
やっぱりアイツ、嫌いだ!!
ーーー

出来れば、一緒に学び僕らの味方であってもらいたい。
敵であればどれほど厄介かは既に身に染みている。
「トガちゃん、ご飯の準備してくるね？」
まだ幼い彼女に合わせて、二人でトランプを使って七並べをしていたが、一時中断。
えー？と少しごねられたが、お腹が空いているのは彼女も同じなのですぐに素直に応じてくれた。
「爆豪くん起きたよー。あ、インコさん、私も手伝います」
階段を降りてきたお茶子さんがそう告げる。
母さんはそれに応じ、お茶子さんは手を洗いに向かっていった。
「うーん、低い身長が惜しまれる…どうにか早く成長出来ないものかなぁ…？」
食器類一つ取るにしても台が必要。
ここは家ではないのでいつも使っている踏み台がなく、母さんに取ってもらう他なかった。
「はい、お願いね。転ばないでよ？」
「もう母さんったら。確かに見た目は子供だけど、このくらい平気だよ」
６人分の食器を持ち、軽々運ぶ。
手が小さいため、持ちにくいがいい加減慣れてきた。
「おお、奥さん。悪いねぇ。誰かの手料理なんざいつぶりか分からんな」
風呂上がりのグラントリノ、いつものドミノマスクすらないスッピンに簡素なジャージ姿だ。
冷蔵庫に飛び付き、個性を使いながら中からビールを取り出して、蹴りで閉めた。
「工藤さん、それは流石に行儀が悪すぎますよ」
「ワシの家だ。このくらい勝手にさせてくれい」
呵々、と笑うグラントリノ。
未来では知らなかったが、本名は工藤空彦さん。
あの小さかった体躯よりはまだ高く、１４０ｃｍくらいか？

未来の姿でも、今の僕より大きいけど。
「…身長を早く大きくするにはどうしたらいいかな…？昔に流行ったぶら下がり健康器みたいに背骨を伸ばす方向で負荷を掛けるのはどうだろう…？そのついでにチンニング…所謂、懸垂をして筋力の増強を図るのもいいな…よし、少しずつ回数と時間を増やしていこう。休養日にはぶら下がるだけでもして、少しでも早く大きく…「出久、ブツブツはやめなさいって何回言えばいいの？」…はい、母さん…！」
怒られた。
いや、直したいっていったのは僕だから何も反論出来ない。
「デクくんのブツブツは最早癒しだわぁ…」
「…ケッ。ウルセェだけだろ…」
「あ、かっちゃん。二ヶ月ぶり」
後ろから声が掛かったので、振り向けば薄手のスウェット姿のかっちゃんと、短パンとロングのTシャツ姿のお茶子さんが並んで部屋に戻ってきた。
その後ろには一緒に手を洗ってきただろうトガちゃんもいる。
「ごっはん！ごっはん！」
八重歯を見せながら、下手なスキップをして食卓に向かうトガちゃん。
幼い姿と挙動だけを見てると未来の姿には到底結び付かない。
「さぁ、席について。今日は簡単にカレーにしたからみんな好きなだけ食べてねー？」
そう言いながら食卓に鍋を持ってくる。
キッチンがやや離れているので、合理的にそうしたのだろう。
ここは田舎なためか部屋の作りが全体的に大きい。
「カレー！いずくの母ちゃんのカレーはめっちゃうまいから好きだ!!」
満面の不機嫌面がパッと華やぐ。
昔からかっちゃんはウチのカレーが好きだったっけ？
「工藤さんはキチンと野菜食べてからにして下さいね」
「野菜なんぞ、いつも食わんからなんか新鮮じゃな」

家主のグラントリノの分を先に取り分け、全員分のカレーを皿に盛る。
お茶子さんは脇で炊飯器からご飯を盛って母さんに手渡していた。
香辛料が香るカレーがみんなの分行き渡るとグラントリノは持っていた缶ビールを飲み干し、脇に置いた。
「それじゃあ、いただくとしよう」
「「「「いただきます！」」」」
各々箸やらスプーンやらを手に取り、並ぶ料理に舌鼓を打つ。
ガツガツと熱いのにも関わらず、掻き込むように食べるかっちゃん。
美味しいねー？とお互いに口に運びながら笑い合うお茶子さんとトガちゃん。
真っ先に野菜を食べ終え、福神漬けを充てに新たに取ってきた缶ビールを飲むグラントリノ。
全員を笑いながら見渡す母さん。
ふと、同じくみんなを見ていた僕と母さんの目が合った。
「どう？美味しい？」
「うん。いつも通り美味しいよ」
やり直す以前は友人と家族で食卓を囲む機会は幼い頃にかっちゃんとしか無かったため、凄く新鮮に感じた。
未来では敵同士だった彼女らが笑い合っているのも、いつからかギクシャクしていた彼とも以前と違う形で付き合えているのも、柱の中の柱となれと言葉を遺した師匠とまた食事出来ているのも。
その全ては奇跡（やり直し）があったからだ。
これらを守るために…僕は…僕らは出来る限りの全力を尽くそう。
そう考えていたら、正面に座っているお茶子さんと目が合った。
何を考えているのか、全てお見通しのようで、そのまま薄く微笑んでくれた。
僕もその笑みに笑みで返す。
そうやって食事を続けていると、バンッと観音開きの扉が開け放たれる。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!!爆豪少年!!渡我少女!!遅ればせながら私が来た!!!…って、アレ？緑谷少年に麗日少女まで？」
「オールマイト！スーツ姿もカッケェ!!」
食卓の椅子の上に立ち上がるかっちゃん。
トガちゃんはスプーンを取り落とし、扉を見たまま固まっていた。

２３．　Ｌｉｍｉｔｅｄ　ｌｉｃｅｎｓｅ（限定免許）

「お、お、お…オールマイト!?え、本物!?ですか!?」
数秒前のフリーズから解消され、かっちゃんと同じく椅子の上に立ち上がるトガちゃん。
「ひーちゃんあかんよー?どっかの爆発さん太郎みたいなお行儀の悪い子にはサンタさん来ないよー?」
そんなトガちゃんの隣に座るお茶子さんがすかさず戒めに入る。
立ち上がった勢いと同じように、すぐにお尻から座面に着地した。
「爆発さん太郎って誰のことだ!?」
「そうやって反応するっちゅーことは、自分でそうだと認めてるようなもんやと思うけどなー?」
そう言いながら、意地悪い笑みを浮かべかっちゃんに目配せするお茶子さん。
あんまり見せないその姿に少しドキリとするが、ゆっくりと呼吸することで事なきを得る。
高校時代もヒーロー時も朗らかな笑みばかりが印象に残っているので、そんな表情も出来たのかと改めて驚いた。
そう言う言い方をする事で子供自らに考えて学ばせるのは合理的だ。それなら今後誰かを教育する際はこう言う方法も一種の手段として…「出久、口に出てる」…ハッ!?」
口の前で止まっていたカレーをそのまま収める事で、言葉ごと飲み込んだ。
癖というものは中々に難儀なものだ。
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!そう!本物のオールマイトさ、渡我少女!!何を隠そう、この私の第二の師匠の家だからね!仕事明けにトレーニングにも来るのさ!」
ＨＡＨＡＨＡ!とアメリカンな笑いを上げるオールマイト。
その姿を見ながら、固まっているトガちゃんはお茶子さんに新しく

用意してもらったスプーンを握らされながら、食事そっちのけで見ている。
僕も同じ立場なら同じ行動を取っていただろう。
いや、もっと酷い対応をしていたに違いない。
食事を投げ出して、サインを求め、溢れる行動力のままに行動し、全霊を持って突撃していただろう。
そう考えると僕も大人になったものだ…とそこまで考えた。
トガちゃんに何事かを耳打ちし、意識をカレーに再度向かわせたお茶子さんがこちらを見る。
「デクくん、楽しそうやね？」
そう僕に問いかけてきた。
「そりゃあもう。仲のいい人たちとご飯が食べれるんだもの。楽しいよ」
そう答えれば、一層笑みを深めて返してくれた。
「よぉし、いずく!!ご飯食べ終わったら勝負だ!!あの頃とは違うから覚悟しとけ!!」
先程お茶子さんに揶揄われてから黙々とカレーを掻き込んでいたかっちゃんがスプーンをこちらに向けて宣戦布告してくる。
「それは行儀が悪いよかっちゃん？」
ニッコリと笑んで返してやれば、喉に詰まったなような音を出した後、再度食事にガッつき始めた。
「おっと、申し訳ないが爆豪少年。食事の後は緑谷少年と麗日少女への用事を優先させてくれないかな？私はトレーニングをしに来たからね。早めに済ませておきたい」
そうオールマイトがお願いすれば、二つ返事で了承するかっちゃん。
僕らへの用事って何かな？
…まさか、アジト襲撃の予定とか？
「以前、打診のあった件、結果が出たからそれを伝えるよ。それに後でサーも来るから」
打診…？

ああ、《アレ》のことか。
「分かりました。二階の応接室で良いですかね？」
「勿論だ。なぁに、数分で済む。悪いが辛抱してくれ、爆豪少年」
何も乗っていないスプーンを噛んでいるかっちゃんに両手を合わせ、軽く頭を下げるオールマイト。
相変わらず見た目にそぐわず、可愛い仕草の人だなぁ。
「オールマイト！後で私にサインください！大ファンなんです！」
速攻で食事を片付けたトガちゃんがテーブルをそのままに立ち上がり、オールマイトへ駆け寄る。
突撃されるオールマイトはその脇に手を差し込み、持ち上げ、自らの肩に担ぎ上げた。
「元気なのは良いことだ！ＨＡＨＡＨＡ！サインは勿論さ！まだ緑谷少年も麗日少女も食事中のようだから、少しお相手しようじゃないか、レディ！」
わーわー、きゃーきゃーと子供ながらの甲高い声で喚きながら、オールマイトに遊んでもらっている。
昔の自分が見たらものすごく羨ましい状況だなぁ、と微笑みながら最後の一口を口にする。
ーーー

に、どうやって認可資格を渡せば良い、と言うのが国からの見解だな」
分かっていた。
簡単にそんなものが手に入るはずもない。
ならば、無許可のまま、ただの一度だけを見逃してくれ、と言うのも問題になってしまうであろう。
どうするべきか、と僕の脳内に幾重にも考えが広がっていく。

「とここまでが表向きの筋書きだな」

え、と力の入っていた全身が弛緩した。
「あくまでも法律に則った形式的なもので考えればそうする他ないが、今回法律を動かすと言う荒技でその括りを捻じ曲げると言う判断をしていただく運びとなった」
バッとお茶子さんと顔を合わせる。
それってつまり…。
「一度きりの特例とも行かないだろうからな。手順さえ踏めばどのようにも使うことが出来る制度を作ることとした。”限定的ヒーロー活動認可資格”と言う新制度。コレは現職プロヒーローの五人に認証されて初めて国より認可が下りる、謂わば”ヒーローの推薦制度”のようなものだ。敢えてコレに年齢の制限を付けないことで君らの活動が可能となるようにしていただく方針だ。その認証した五人の下でのみヒーロー活動を可能とする仮免よりも縛りは厳しいが、非合法よりは問題が少ない。既に根回しは済んでいるので、可決を得られればすぐにでも発行してもらう手筈となっている。コレで合法的にオールマイトの手助けを可能とする」
「と言うわけだ。少年少女。話の都合上、驚かせたみたいだが悪いね。サーも人が悪い。先に結論から述べてやればよかったじゃないか！」
「あくまで順序立てて説明したに過ぎません。結果は問題ないでしょう？」
カチャリとメガネのツルを押し上げるサー。
その鉄面皮にわずかに笑みの色が滲んでいるような気がした。

「わざわざ対応していただきありがとうございます！」
「僕からも、ありがとうございます。…ちなみにつかぬことをお聞きしますが、その五人と言うのは誰でしょうか…？オールマイトとサー、エンデヴァーとベストジーニストなのは分かりますが…」
「おいおい、俺を勘定に入れてねーじゃねぇか！」
　そう奥の席から声が掛かる。
「グラントリノ!?え、それじゃあこの話は元々ご存知だったんですか!?」
「当たり前よぉ？結論が出るまで黙っとけって言うから黙っておっただけじゃ」
　呵々、と沈めたデスクチェアで腹を抱える。
　参った、ドッキリにハメられた気分だ！
「そう言うわけで緑谷少年、麗日少女。改めて協力お願いするよ！」
「「はい！」」
　僕とお茶子さんは声を合わせて、返答を返した。
　コレで奴を合法的に叩くことが出来る。
　未来に於いても一度として拳を交えることはなかったが、悪の大将を叩くチャンス…未来で殺された幾人もの人々の敵討ちのチャンスであると、先ほどとは違う意味を込めて両の拳を握り締めた。

２４．ＶＳ Ｃｈｉｌｄｈｏｏｄ Ｆｒｉｅｎｄ（ＶＳ幼馴染）

翌日。
本来ならば麗日家へ向けて出発する予定であった今日。
昨日、僕らが話し合いをしているうちに疲れていたのかリビングで爆睡していたかっちゃんとトガちゃんの要望によりもう一日お世話になることとした。
オールマイトと遊んでもらうなり、サインを貰うなりするつもりだったトガちゃんは明るくなった外を見て絶望した顔をしていたが、貰っておいたサインで一応大泣きするところを免れた。
が、沈んだ表情で床を眺める姿はやはりオールマイトに遊んでもらいたかったのだろう。
その様子を写真に収め、オールマイトへ送ると今夜も何事も無ければ来れるとのことなのでそれを伝えれば陽を浴びた向日葵の如く明るい笑顔が咲いた。
…この笑顔のために必ず来てください、オールマイト…。
「…デクくん…浮気せんよね…？」
「しないよ…お茶子さんに呆れられないように頑張らなきゃいけないんだからそんな暇ないよ？」
そう振り返りながら話し掛ければ、顔を背けられ、ブツブツと何事かを呟いていた。
辛うじて拾えた単語は『惚れた弱み』とかなんとか。
「いずく！もう準備出来たか?!昨日出来なかったから、これからやるぞ！師匠にも許してもらってるから裏行くぞ！」
バンッと勢いを付けて開かれた扉から顔だけ覗かせたかっちゃんはそれだけを捲し立てると足音を消した走りでそのまま階下へと駆けて行く。
「はは…本当に元気やね、爆豪くん…。昨日あんなにボロボロだったのに、一晩寝たらケロっとしちゃってさ」

「まぁ…子供だし回復力もあるんだよ、きっと。筋肉痛とかまだ無縁そうだし」
ダイニングの椅子から飛び降りると扉の方へと向かう僕。
「でく、あたしも行っていーい？」
そう後ろから声を掛けてきたのは、今の今までお茶子さんとお人形遊びに興じていたトガちゃんだ。
今まで持っていたウサギさんの耳を片手にぶら下げ、引き摺ったままこちらへ掛けてくる。
「え？別に良いけど、模擬戦闘だから見てても面白くないんじゃない？」
「爆発さん太郎がボコボコにやられるところが見たいです！」
そう言ってキラキラしたお目々をこちらに向けてくる。
何かのビームが発されているような気がするが、気のせいだろう。
「私も見たいし、一緒に行くよ！何かあれば私が助けられるしね！」
そう言ってクマさんを抱き抱えたお茶子さんはトガちゃんの隣に並び立つ。
二人セットで並ぶと天使度が増す気がして、心臓が跳ねたが顔に出さないよう尽力した。
…お茶子さんの顔が微妙に笑んだからバレバレかも知れない…。
「そ、それじゃあ、一緒に行こうか！」
「「うん（はい）！」」
言及されなかったし、これで誤魔化せたと思っておく。
ーーー

切れば勝ちとする。なお、出久は守りのみ、且つ個性の使用を禁ずる。
それでは、始め!!」
グラントリノの号令を皮切りにかっちゃんは個性を使わずに真っ直ぐ駆けてきた。
立ち合いの距離は凡そ３ｍ程だったが、それを数秒で食い潰した。
思いの外早い。
僕は個性を警戒して、振りかざされた右をケアするために直角方向へサイドステップ。
元の位置へと飛び込んできたかっちゃんとすれ違いざまに右足を軸に１８０度反転。
かっちゃんの真後ろを取ったところで右を振ったがために後ろへ回った左手を極めながら回転した勢いのまま足を払う。
走ってきた勢いがそのまま載っており、急に軸が無くなったため、空中へと回転しながら飛び出していくかっちゃん。
いつもなら、これで一本。
立ち上がるまで残心を保つ僕だが…。
二ヶ月の修行は伊達ではなかったらしい。
空中での制御を諦め、かっちゃんは片手で地面に接触。
その手を爆ぜた勢いを載せて高く跳躍。
空中で上下を反転させ、綺麗に足から着地した。
僕は思わずほぉ、と声が漏れ、目を大きく見開いていた。
最初の立ち合いよりやや開いた距離で相対するも刹那の後には直ぐにまた詰めてくる。
両手を使って身体を押し出す、高校時代に名付けられた、曰く『爆速ターボ』で先程より速度の載った攻撃をするようだ。
コレは選択肢が狭まる、ある種の悪手ではあるが、速度を生かすヒットアンドアウェイの戦法であれば十分に効果的である。
爆速ターボを続けながら、急加速した飛び蹴りを顔面目掛けて行ってくる。
顔面狙いなのはバレバレ過ぎて、避けるのも受けるのも思いのままだ。

右手の届く範囲に入った瞬間に手の甲を使って彼の身体を接触する範囲から弾き出した。
「チィッ!?これもダメか!?なら、これならどうだ!!」
直ぐ様反転し、片手のみの爆速ターボ。
回転を使って後ろ回し蹴りの様相になるものの、スウェーの要領で回避。
その後、回転の勢いのまま左手が顔面を襲うも、それを右手で捕まえ回すように上げる。
空いた左手で吊り上げた彼の腕の付け根を押してやれば、ストンと座り込むように身体が下へと崩れる。
「ほら、これで一本。でも、勝利条件は違うからね。まだ、時間はあるよ、かっちゃん」
そう言うと奥歯を噛み締め、その奥から唸り声が漏れ出す。
「クソ!!まだまだぁ!!」
闇雲に発せられた爆破を読んで、飛び退くとかっちゃんは、すぐに立ち上がる。
と思ったらしゃがみ込んだ?
「まだ完成してねぇが関係ねぇ!!全力で行くぞ!!」
そう言うと両足とも靴を脱ぎ捨て、履いていた靴下までも脱ぎ捨てた。
一体何を…?
そうしてから、かっちゃんはクラウチングスタート…いや、どちらかと言えば肉食獣の…虎やライオンを想起させる構えを取る。
…まさか!?
「…ふふ…やっぱりグラントリノに預けて正解だ…!!」
「行くぞ、いずく!!」
そう言うや否や、盛大な爆音を奏で僕へ向かってくるかっちゃん。
ミサイルの如く、真っ直ぐ向かってくるも、直前に左を爆発させ、飛び込む速度に切り揉み回転を付属させる。

そのまま、大振りの右を放つ彼の技は高校一年生の体育祭でお目見えしたかの必殺技を思い出させる。
「…もうここまで来たか…!!」
しかし、僕もタダではやられない。
飛び込みに合わせ、僕も間合いを詰める。
詰める勢いに任せて、かっちゃんに背を向け、右腕を脇の下を通すように上げる。
「ぐっ!?…ぬぉおお!?」
いきなり距離を詰められたからか、背を向けられたからかは解りかねるが、かっちゃんが呻く。
肩から伸びた彼の腕が大爆発を起こすが、左腕でそれを押さえつけ、反動で逃げられないように確保。
そのまま腰で打ち上げるようにして、爆炎の中へと彼を放り投げた。
黒煙で姿が見えないものの、警戒して二回バックステップ。
その煙の中で数度爆発が起きると上の方から黒煙が尾を引いたままかっちゃんが飛び出してきた。
両の手のひらを重ねて前に出し、開いた隙間で更に爆破。
コレも見たことがある。
閃光弾（スタングレネード）。
所謂目潰しだ。
反射的に片目を閉じるも対応が遅れ、少しばかり目を焼かれた。
ぼんやりと視界の真ん中が暗く沈み、周囲のみしか確認出来ない。
音を頼るも目の前で爆風が閃き、身体が少し流される。
たたらを踏んで、数歩後ろに下がったところ、殺していた足音が砂を踏む音で聞こえた。
「うおおおお!!」
叫ぶことで彼の位置が丸分かりになった。
勿体無い。
正中線を大きく動かすように避けたところで、かっちゃんが突撃。
空を殴ったその腕を絡め取り、身体を回すように遠心力を加えて、

地面へ引き倒す。
しかし、別のところからの爆発により、その状況が崩された。
倒される寸前に爆破の勢いを載せた脚が僕の横っ腹へと刺さる。
「そこまで!!」
そうグラントリノが宣言したところで模擬戦は終了。
やり直してからは初めてかっちゃんに白星が着いた。

25．”Together” increase s（『一緒』が増える）

「一泡吹かせてやったぞ、いずく!!」
ビシッと指差し勝ち誇るかっちゃん。
確かに条件の通り、体勢を崩されたので僕の負けだ。
ハーッハッハッハ！とオールマイトリスペクトな笑いを高らかに上げ、喜色を満面に映し出す。
しかし…
「調子に乗るな、と何度言えば分かるんじゃ勝己ぃ!!」
ジェットの噴射で飛び上がり、落ちる勢いにまでジェットを載せたグラントリノの無慈悲なストンピングがかっちゃんの無防備な顔面を襲う。
勢いそのままに叩き付けられたかっちゃんは、抗う間も無く意識を飛ばした。
「ああ!?かっちゃん!?」
「ふん、調子に乗られちゃ今後の修行に悪影響だ」
慌てて抱き上げるが、コブなどは出来ていないようなので、意識を刈るだけの技だったようだ。
ホッとするのも束の間。
外野にいた二人は口々に…
「チッ…不意打ちが上手くいったからって調子付きおって…」
「…さん太郎…ボロボロじゃないです…」
怖いよ…特にお茶子さん…。
「…起きたら次は私が行ってこようかな…」
全力で止めにかかった。
ーーー

「んあ…？」
ノートにいつものように書き物をしていると隣で大の字で寝ていたかっちゃんが目を覚ましたようだ。
「…あれ？…俺…いつのまに寝て…？あっ!?いずく!!さっきの勝負俺の勝ちだよな!!夢じゃないよな!!」
目覚めて数秒で状況把握。
しかし、夢との境界が分かってないようだ。
「うん。今回は負けたよ。凄いね、かっちゃん。脹脛（ふくらはぎ）を爆破するなんて思いもしなかったから、思わず食らっちゃったよ」
「へへん！どうよ！師匠が足の裏から吹き出すのなら俺はどうなのか、って試して出来たんだよ！」
「かっちゃんの個性はニトログリセリンみたいな汗だから、手のイメージが強かったけど、実際は全身の汗で出来るんだね…盲点だったなぁ…」
「まだ、手と違って他の場所だと皮膚が耐えきれないみたいでさ、三回もやると血だらけになっちゃうんだよなぁ」
「そこは修行、だね！何度も使ってればその内皮膚も硬く、厚くなるよ!!」
未来のかっちゃんが辿り着けなかった一つの分岐点。
掌だけでも十分に強かった彼が、その他に選択肢を得たらどうなるのか。
想像も付かない。
「あと、師匠みたいに足の裏を爆破させて俺も跳ぼうと思うんだけど、どうもバランスが取れなくてさ…」
「そこは回数を重ねてけばきっと出来るよ。何たってかっちゃんだもん」
「そ、そうか？いずくにそう言われると何か出来そうな気がしてきた！」
「うん。次はそれ込みで対策立てるから今日みたいな勝ちは無いと思ってね？」
「ぐっ…いずくのくせに…」

「いつも僕が勝ってるからね！」
数秒、渋面で互いに睨み合っているとどちらともなく笑い出す。
コレで良い。
コレが良い。
かつては辿れなかった、無個性だからヒーローに憧れててもなれるわけがない、と諦めていた自分では有り得なかったこの時間。
互いに切磋琢磨し合えるのは、本当に貴重で大切なことだったんだ。
暫くそうして笑い合っているとビルの方からお茶子さんに呼ばれる。
そろそろ麗日家へ出発する時間だ。
「いずく。次も負けねーぞ！」
「次も楽しみにしてるよ、かっちゃん」
そう言って、互いに拳を差し出すグータッチ。
教えたらカッコいいって理由でいつからかやるようになったそれ。
奇跡前（やり直す）は、最期に送り出した時にやったのが最初で最後だった。
「じゃあね、かっちゃん」

ーーー

「て、てめぇイカレ女!?いつからそこにいたんだ!?」
「あなたが起きる前は出久くんとお話ししてましたよ?それとトガです」
　木の影から顔だけ出してコチラを見てるイカレ女。
「爆発さん太郎…昨日の喧嘩で大体の強さが分かったと思ってましたけど、見直しました。凄かったですね、出久くんとの模擬戦」
「そう呼ぶな、って言ってんだろ」
「あたしもイカレ女って呼ばないで欲しいです」
「名前」
　女と話したのは母ちゃんといずくの母ちゃん、幼稚園の先生、肉球女に次いで五人目かも知れない。
　男と違って接し方が分からなかった。
「名前ですか?トガです」
「フルネームを聞いてんだよ。」
「人に名前を聞くなら自分から名乗るべきだってテレビで言ってたですよ?」
「ケッ…爆豪勝己。てめぇはよ?」
「渡我被身子、です。ひーちゃんって呼んでも良いですよ、かっちゃん」
「絶対呼ばない」
　そう言って、建物に戻る。
　そろそろ昼飯だ。
　振り返れば、頬を膨らませたイカレ女。
　今日はあのいずくに勝ったし気分もいい。
　だから、気紛れにこう呼んだ。
「オラ、飯だから行くぞ、ヒイコ」
　そのまま気にせず歩き出せば、幾らかの間を置いてから、慌てて駆け寄ってくる。
「かっちゃん!?今なんて言いました!?聴き間違えじゃなければ、ヒイコって呼びませんでした!?ねえ、かっちゃん!?無視しないでかっちゃん!?かっちゃん!!」

「カッチャカッチャうっせえなぁ!?」
そこから、また殴り合いの喧嘩に発展したため、師匠に落とされる羽目になった。
イカレ女はイカレ女でいいや、二度と呼ばない。
ーーー

昔、貧乏だって言ってた窮状は少しは良くなってきているようだ。
「全く…父ちゃんと来たら…」
「まぁ、娘さんを心配するのは当然だし、遅れたのは僕らなんだからしょうがないよ」
「そうは言っても毎度毎度仕事ほっぽってるんは許されんでしょ…」
「まぁ、それはアカンとは思うけど…」
そう言うとお茶子さんが一瞬目を丸くして固まった。
次いで、ニンマリと意地悪い笑みを浮かべると…。
「うつったね？」
「うつった…？」
「デクくんが『アカン』やって！」
そう言われてようやく気付いた。
僕も気付かないうちに訛ってしまうのだろうか…？
でも…
「まぁ、一緒が増えるのは良いこと…かな？」
そうぽそりと呟くも隣の彼女には聞こえていたようで、静かに顔色を赤らめていた。

２６．Ｄａｎｃｅ　＆ａｍｐ；　Ｃｈａｓｅ!!（ダンス＆ａｍｐ；チェイス!!）

Ｓｉｄｅ；”Ａ”　ｇｉｒｌ

先週、変な二人組がウチの教室に入ってきた。

緑のモサモサした髪の男の子と茶色の髪のふわふわした女の子。

初めて来た日、綺麗なお姉さんに連れて来られた。

多分似てるし、緑くんのお母さんだ。

「基礎コースの体験に来ました。よろしくお願いします」

そう二人して頭を下げてお辞儀する。

多分同い年だと思うんだけど、喋り方とか動き方が何となくお兄さん・お姉さんっぽく思えた。

初日は体の動かし方、何度もやった簡単なステップ、身振りの心構えなんかを先生が付きっきりになって教えていた。

茶色ちゃんは何となく出来ていたけれど、緑くんがてんでダメ。

初歩のボックスステップを繰り返しているうちに頭がこんがらかったのか、足まで縺れて転びそうになっていた。

その度に茶色ちゃんが手を差し伸べて、緑くんを宙に浮かして助けてたり。

それを見て先生が注意するんだけど、

「いやぁ…つい手が出てしまいましてー…」

と頭を掻きながら言っていた。

なんだか、二人のやり取りが大人の…それこそ夫婦の様なやり取りで少し羨ましく思えたのだけど何でだろう？

それからも一通り教わって基礎コースはお終い。

むりょうたいけんコースだから、これで終わりなんだって。

その後は、私たちの練習の見学をして教室の雰囲気を感じてもらって、入るかを決めてもらうんだって。

さっきまでの退屈なメトロームの音から解放されて、課題にされてる曲が何度も掛かる。

そうやって練習を続けてたんだけど、茶色ちゃんは手拍子打って見てたのに、緑くんは何かをノートにガリガリ書いていた。
休憩と言われてコッソリ近づいて覗き見たけど、まだ習ってない字がたくさん、小さく並んでてあたしは読むことを諦めた。
何となく読めたのはカタカナばかりで『ダンス』と『ステップ』と『カウント』くらい。
もしかして習ったことを書いて覚えてるのかな？
そうだとしたら字がたくさん書ける緑くんは頭が良いのかもしれない。
天才、って言うのかな？
そのまま練習を続けていると鏡越しに見える二人が気になった。
何やら書いていることを二人で相談してるみたい。
ひと段落付いたのか、ノートと鉛筆を鞄にしまって、そこから代わりに携帯電話を取り出した。
ズルい、いいな、羨ましい。
あたしも欲しいってお願いしたけど、小学校に上がってからって約束をして諦めた。
それで後ろから写真？を撮っていたみたい。
良いな良いな、羨ましい。
その次の練習の日。
今日。
また二人が来ている。
そうしたら、驚いた。
前の練習の時はダメダメだった緑くんがステップをバッチリ覚えてきたのだ。
まだぎこちない所もあるし、リズムがズレる所もあるけど、それでも二度目にしては凄すぎる。
茶色ちゃんにおいてはほぼ完璧。
きっと凄い練習をしてきたんだなって、そう思った。
でも、驚くのはそれだけじゃなかった。
その後の曲を掛けた練習にも参加したいと二人が言うので一番前

の先生がよく見える所に呼ばれた。
真ん中があたし。
左右に二人の並び順。
イントロが流れ始めて、カウントを始める先生。
先生のカウントがないとまだあたしも入りがズレてしまうステップ。
中級コースに上がって初めての課題で何度も練習してるけど、それでも出来ない。
なのに二人はピッタリ合わせてきた。
他のみんなも驚いたみたいで先生と少しずつズレていた。
あたしは先生の背中を睨んで、必死に着いていく。
ふと、その先の鏡に映る二人が見えた。
緑くんはまだ余裕がなさそうだったけど、先生が言ってた『身体を大きく見せる様に』ってダンスの心構えをすごく意識しているのが分かった。
手の振りが指先まで伸ばし切ってて、すごくカッコよく見えた。
反対の茶色ちゃんは余裕がありそう。
目が合うと振りとは関係なしに小さく手を振ってくれていた。
ニッコリと可愛い笑顔で笑いながら、楽しそうに踊ってる。
そうだ、ダンスは楽しいんだ。
だから、勝手に笑っちゃうよね？
さっきまで先生の背中を睨んでてしかめ面になっていたけど、茶色ちゃんに笑い返してからあたしも楽しく踊ることにした。
ダンスは大きく、鋭く、そして楽しく。
振り付けがズレたのは知ってた。
左右のステップも踏み間違えた。
いつもならやらない。
そんな失敗。
でも、楽しかった。
「ねぇ！」
練習が終わった後、お母さんが迎えにくる前。

あたしは二人に話しかけた。
「ダンス！凄かったね！びっくりしちゃった！」
そう言うと二人は同じ仕草をしながら照れていた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
Ｓｉｄｅ：”Ｉ”　ｂｏｙ
僕は兄さんを尊敬している。
まだ高校生ながらヒーローの心構えが出来ていて、父と母にも恥じないヒーローになるであろう。
自身の鍛錬に一部の隙も無い。
それでいて周囲への気配りも完璧だ。
近所の皆さんの評判も凄くいい。
将来はお兄さんのようなヒーローになってね、とスーパーのおばさんにも言われてしまうほどだ。
無論、僕もそうならんと努力している。
まだ４歳だが、ねだって買ってもらった辞書を使いながら難しい本も読んでいる。
兄さんに教えてもらった本を片端から読み、既に２０冊は読んだだろうか？
段々と辞書を使わずに読めるのが楽しくなってきて、つい兄さんに図書館に行って見たいとねだったこともある。
その時、印象的な二人の男女を見た。
兄さんと一緒に走り込みをし、一緒にお風呂に入ってから出かけたその日はありきたりな冬の晴れた日だった。
風もなく、歩くに合わせて体が温まり、過ごしやすい日だった。
初めて行く図書館に浮かれていた僕は、やや先行して兄さんの前を行く。
兄さんが来ているか確かめるのに振り返ったその時、いきなり突風が吹いて、思わず目を閉じた。
それは一瞬で過ぎ去ったので、その風の行く末に目を送ると、遙か遠くへ行く同じくらいの子供が目に映る。
「あの子ら個性使ってるなぁ…一応、止めておいた方がいいか。悪い

がここで待っててくれ。すぐに戻るから」
そう言って僕が了解の意を返すや否や、兄さんが駆け出す。
速さを史上とする我が家で現最速の兄さんだ。
きっとすぐにあの二人を捕まえて、個性の無断使用はいけないと注意してくれるだろう。
だから、僕は待つ。
兄さんからきっとすぐだ。
だから待つ。
昨年の誕生日に買って貰った腕時計で２０分が過ぎた頃、兄さんが戻ってきた。
「お待たせ。待たせて悪かったな」
「大丈夫だ兄さん。あの二人にちゃんと注意できたのかい？」
当たり前にそうだろうと思っていた。
しかし、兄さんの表情は芳(かんば)しくない
指先で頬を掻く仕草は、気不味いと思う時だと兄さんから借りた本に書いてあった。
「すまない。追い付けなかったよ」
とても驚いた。
誰より早いと信じて止まなかった兄さんが”速さ”と言う種別で負けるとは思いもしなかった。
「大通りに差し掛かったところで大きく飛び越えられて、そのままビルの上を行かれてしまったよ。足には自信があったんだがなぁ…」
女の子を抱えた男の子の速さはそれほどの物だったのか。
確かに先ほど通り過ぎた突風を考えればあり得なく無い話だ。
「兄さん。彼らはきっと僕の同世代だ。いつか兄さんの仇を取るために今からもっと鍛えるよ」
どちらかと言えば身体を動かすよりも本を読んでいる方が肌に合っているが、それは置いておく。
「我が家が速さにおいて劣らないことを僕が証明するよ」
「エンジンが足についているお前ならきっと俺よりも早くなるはずさ」

兄さんに手を引かれ、図書館へ向かう道すがら。
僕は決意を新たにした。
かの印象的な暴走二人組に勝たんと。

27．Training／Dark clouds（トレーニング／暗雲）

「えいちゃん、個性の制御はどうなん？」
「おう。大体思い通りにオンオフは出来るようになったぜ！」
練習場として作った砂浜の上。
僕とお茶子さんは自分の鍛錬に追加して一緒に鍛えるようになったえいちゃん（切島くん）の指導をし始めて既に三ヶ月が過ぎた。
あと数日でやり直してから半年が過ぎようとしていた。
目標としていたオールフォーワン対策、ヴィラン　の先回り対策は概ね順調だ。
ＵＳＪを襲撃した際に居た脳無の素体にされた男の保護ができ、仕事の斡旋が出来たので推定ヴィランより除外することと相成った。
コレで少なくとも『ショック吸収』の個性は持たないし、対オールマイト用脳無の根幹を絶った為、あのＵＳＪ襲撃事件は起こらない。
その他にも犠牲になる”予定”の人々は多々いるが、オールマイトやサー・ナイトアイ他全国に散る協力者のおかげで『脳無素体犠牲者』や”犯罪予報”に列挙された『推定ヴィラン』をも保護・監視下に置くよう着々と進んでいる。
その上、ヴィラン　連合の中核を成したトゥワイスこと分倍河原仁とＭｒ．コンプレスこと迫圧紘の確保に成功したとナイトアイより連絡があった。
どちらもまだ軽犯罪程度しか犯しておらず、十分に社会復帰可能だとか。
それならば、敵に回さず味方に引き入れてしまえ、とばかりに現在グラントリノの下で共同生活をしている。
…かっちゃんに悪影響が無いよう祈るばかりだ。
他にも大きな犯罪を犯す前に捕らえることに成功してる推定ヴィランは他にもいる。
傷害事件で逮捕されたヴィラン名『ムーンフィッシュ』や乱波肩動

など、未来で僕らが脅かされた脅威は徐々にとは言え、減らすことに成功している。
僕らが動いたことによって本来の時間軸では落とすはずだった命を救うことが出来ている。
その結果は僕もお茶子さんも満足している。
そう、満足はしている。
しかし…

「…でく…おい、デク！」
肩を掴まれ、現実に呼び戻された。
「ど、どうしたの、えいちゃん？」
「いや、この後のトレーニングはどうするのか聞いてんだよ？なんか考え事でもしてたのか？」
キュッと口を引き結ぶ。
何か呟いてやしないか、心配になる。
一応、口に出す癖は矯正しつつあるのだが、気を抜くと度々やらかしている為自信がない。
視線をお茶子さんに向けると笑顔のまま首を縦に振ってくれたので、大丈夫そうだった。
「何でもないよ。ちょっと考え事」
「そうか？お前は何でも出来るかもしれないけど、悩み事なら相談くらいには乗るからな？」
彼の心根は以前と変わらず…と言うと変な感じだ。
この年頃からヒーローになってからも変わっていないってことだ。
段々自分でも何を考えているか分からなくなってきて、頭を左右に振る。
「デクくん、何考えてたん？」
「あぁ、お茶子さん」
飲み物を切島くんに渡してから、僕にも差し出してくれるお茶子さん。
その顔はありありと心配を映していた。

「最近、ヴィランの動向が読めなくなってきてるって話があったじゃない？」
　つい先日、ナイトアイとオールマイト、エンデヴァー、ベストジーニストの錚々（そうそう）たる面々で話し合いをした際にそんな話題が上がっていた。
「マグネもマスキュラーも見つからない。監視を振り切ったらしいし、袋小路に入ったと思ったら消えたとかそんな報告ばかりじゃない？何か悪い予感がして気持ち悪くて…」
「そうやね…それにオールフォーワンの動向も何一つ掴めていないのも不気味やね…」
「未だに黒霧の尻尾すら掴めていないしね…」
　僕らは既に知り得る情報は吐いた。
　しかし、これ以上の結果が得られないのか、と考えに暗雲が立ち込める。
「あとは…そうだ、ステイン。彼もまだ行動に移していないはずだ…確か調書や記事では１０代末頃は街頭演説みたいなことをやっていたって書いてあったはず…。どうにかこちら側に引き込めないものか…」
「ええ!?いや、確かに戦闘力やカリスマ性はあると思うけど、素直にヒーローになってくれるかな…？」
　ガチガチに固まった理想を追い求める思想犯。
　そりゃあ、固まり切ってしまえば変わらないだろうが、そうなる前であれば…
「…どうとでも出来る…」
　ギュッと拳を握り締める。
　次第にギチギチと音が鳴るも構わない。
「デクくん…それはヒーローっぽくないわ」
「え」
　握り込んだ拳を両手で包むお茶子さん。
　思わず、込めた力が霧散した。
「その言い方じゃ、悪くも出来るみたいじゃない。私たちは最善より

最高を選ぶ…でしょ？」
そう言われてハッとする。
前提がすり替わっていた。
「そうだね…僕らの思想に染めるんじゃなくて、快く協力者になって欲しいんだもんね…。僕が間違っていたよ…」
「分かればよろしい!!」
両手を腰に当て胸を張るお茶子さん。
むふー！と鼻息を荒く吐き、口角が吊り上がっていった。
「おーい、そろそろ休憩終わりにしよーぜ！」
少し離れたところにいた切島くんから声が掛かる。
いつまでも休憩にしててはトレーニングも意味がない。
「今度は私が指導してくるよ。なんかあったらよろしくねー？」
「あ、うん」
そう言って立ち上がるお茶子さんを見送る僕。
切島くんに駆け寄ると打ち込み稽古を始めた。
まだ始めたばかりなので、ギクシャクしている部分もあるが始めた当初よりも大分速くなった。
基本技、一つ一つを確認するためにあえて緩やかに行う組み打ち。
受けの練習なので、使う型や順序を事前に取り決め、スローモーションの様にゆっくりと動く。
傍から見れば遊んでいる様に見えるかもしれないが、歴とした訓練だ。
特に切島くんの個性に於いては重要な訓練と言える。
「焦らんでいいよ。丁寧に受けることを考えて」
「押忍っ!!」
相手の攻撃をバカ正直に受ければ、それだけ消耗する。
常に気を張って全身を硬化させるよりも、必要な時、必要な箇所に、必要なだけ硬化できる様にする訓練だ。
全身常時硬化状態の『安無嶺過武瑠（アンブレイカブル）』は全盛期でも持って3分だった。
早い内からこの訓練をしておけば、彼の継戦能力は飛躍的に上がる

だろう。
「っ!?…ぐぅ…!」
「ほら、打点をズラす！遅れるとゆっくりやってるとは言え痛いよ!!」
「…お、押忍！」
「無理な姿勢では受けない！下がるか、姿勢を整えつつ前に！今はまだ手技の型しか使ってないんだよ！もっと視野を広く持って！足技や投げ技が増えるともっと周り見ないと対応できないよ！」
「押忍っ!!」
ゆっくりやり始めたはずなのに、結構な速さになってきた。
熱が入り過ぎてるなぁ…。
「お茶子さん、ペース落として！それじゃあ、普通の打ち込み稽古になっちゃうよ!!」
あ！と一言。
そうして距離を取って仕切り直し。
また速くなったら声を掛けよう。

ピリリリリリリ

とオーソドックスな着信音が鳴る。
特に設定していない番号からだろう。
近くに転がしたカバンから電話を取り出し、ディスプレイを見るとそこには『サー・ナイトアイ』の文字。
「はい、デクです」
『緑谷出久。2分ほど時間をもらう』
大丈夫です、と返せば長いため息が受話口から聞こえた。
『お前の協力の下、現在遂行中の作戦の件だが、先日話した通り進捗率で言えば概ね六割を超えた。未だ見つかっていないヴィランないし推定ヴィランも目下捜索中だ。直に結果が出るはずだ』
「はい、その件は一昨日のお電話でお伺いしました。…もしかして何か問題が…？」
『ああ。監視もしくは保護をしている推定ヴィランたちなのだが…監

視担当者、保護監督者数名から突如行方不明になったと報告を受けた』
「ッ!?」
思わず息を飲み込んだ。
それは上手く行っていたがために恐れていた事態だ。
『いずれも本日、先程。脱走や失踪ではなく、つい数秒から数分前まで目の前に居たはずなのに急に姿を消したと言う…。その報告の中に2件『黒い霧の様なものが見えた気がした』と言っていた』
間違いない。
「それは…ヴィラン名『黒霧』で間違いないでしょう…」
『ああ。そして今、私はお前と同じことを考えているだろう』
「ええ」

「オールフォーワンが動き出した」

28．Darkness／Growth（暗闇／成長）

Side：Dark

「お呼びでしょうか」

ディスプレイの画面の明滅のみが照らす部屋の内に滲み出る霧が人の姿を成す。

元々部屋にいたのは二人。

メガネの老翁と灰色髪の壮年、と言った風貌の男。

各所の監視カメラをハッキングしており、数多ある画面があちらこちらの風景を映し出していた。

それは街中だけに限らず、山や海、林をも映していた。

それらに共通していたのは、いずれも一般的に人相が悪いとされる男女が映っていることだ。

「ご苦労。急に来てもらって悪かったね」

「いえ、私の個性に掛かれば時間も場所も関係ありませんので」

「そうは言ってもご足労頂いたんだ。素直に労われてくれ」

「もったいないお言葉です」

やれやれ、と言葉を溢す灰色髪の男。

身を包む漆黒のスーツはややゆったりとしながらもカッチリと着こなしており、体格もあって少し窮屈に見える。

「ドクター、画面に出してくれ」

そう言われた老翁は応答を返さず行動で示す。

シワが刻まれた小さな手を動かし、数秒の内に幾枚かの顔写真が表示された。

「この方々は？」

「まだ”こちら側”に来ていない同志達だ。彼らはどうやらヒーローに監視されている様でね。僕としては窮屈な思いをしているだろうから、こちら側に招待したいと考えていてね。こちら側に来ないとしても彼らの”個性”は有用だ。ドクターが今進めている研究に活用

させていただくつもりなんだ」
「つまり、彼らの勧誘あるいは誘拐をして来いと言うことでしょうか？」
「誘拐とは乱暴だね。〝招待〟してきて欲しいのさ」
結局は誘拐ではないか。
口から出掛かる言葉を飲み込み、了承の意を返す霧を纏う男。
「〝こちら側〟に来るべきなのに牙を折られた者たちもいる様だが、それは捨て置こう。幾らか惜しい〝個性〟の者も居るがね。この資料を持って行きたまえ」
分厚い紙束を差し出す灰色髪の男。
恭しく両手で受け取り、それが幾度も捲られ読み込まれた物だと理解した。
「この資料は…？」
「〝カラス〟から届いた情報だ。こちらで精査し、場所も抑えてある。今画面に映っている彼らを例の施設へ招待してくれ。僕の教え子の為に幾らかの戦力があった方がいいからそれには赤い印を。個性が欲しいものには青い印をつけておいた。監視が付いているからね。出来るだけ素早く招待してくれ」
「畏まりました」
恭しく、執事の様な所作で一礼すると踵を返す。
突如として現れた黒い霧の穴に一歩踏み出し、音もなく姿を消した。
「ホッホ、コレでワシの研究がまた一歩進むわい。先生も届いた暁にはお手伝い願いますぞ」
「こちらこそ、ドクター。出来れば裏切らない様な〝作品〟を頼むよ」
そうして二人は声を出して笑い合う。
暗闇に溶け込む姿は言葉にして表すならば、魔王とマッドサイエンティストという言葉が当て嵌まるだろう。
「しかし、未来を見通す〝個性〟か…。コレが何者か分かれば、先生の安全がより一層高まると言うのに…」
「それを探らせるのは、カラスにとっても危険過ぎる。彼と言う情報

源が無くなるのは痛手なのだよ」
　そう言いながら灰色髪の男は山と海を映し出したディスプレイに目を向けて、ニヤリと笑む。
「子供というのは、なかなかどうして可愛いものだ」
　その映像には数人の子供が映し出されていた。
ーーー

しばし、下ろした画面を覗いていたが、かぶりを振ってからカバンへと戻す。
そうしてから二人に目を向ければ、注意した甲斐があったか、緩やかに打ち込み稽古を行っていた。
お茶子さんは涼しげな顔で行っているが、相対する切島くんは汗を全身から吹き出していた。
慣れない動きと緊張、頼りない足元が相まってこちらが思うよりも疲労しているようだ。
時間にして言えば、まだ3分ほど。
全力で動いていればインターバルを挟むところだが、この打ち込み稽古では凡そ5分と決めている。
今が辛くともその分スタミナが付くと考えれば、心を鬼にして接する他ない。
「ほら！腕が下がって来てるよ！顔面殴られたいの!?」
「お、押忍!!」
「受ける瞬間に個性を使うって言ってないよね!?ガードを上げながら個性を使うの!!上げ終わってから使ってちゃ、硬化する前に撃ち抜かれるよ!?」
「押忍!!」
「片腕の力だけで受けない!!必ず、両腕で受けるか、三点防御!!」
「押ぉ忍ッッ!!」
彼女の教えは的確ではあるが、どうしてかいつもの温厚な性格から変わってしまっている。
前はこんなことなかったはずなのだが、いつからだろうか…？
「ああ…かっちゃんたちに挑まれ出してからか…」
今世の僕ら二人の幼馴染であるかっちゃんは良くも悪くも僕らに影響を及ぼしているようだ。
お茶子さんへの影響は『お姉さん化』と『鬼軍曹化』かなぁ…きっと、自覚はないだろうけど…。
「よし、5分！終了！」
「ありあとしたー!!」

そう言いながら砂浜に背中から倒れ込む切島くん。
大して息は上がっていないが、全身が乳酸を分解したくて酸素を求めるはずだ。
「えいちゃん、訓練の後はすぐ横になっちゃダメだって！ほら、ダッシュ一本!!」
そうだった！と心は逸っているようだが、体が付いて行かずヨロヨロと立ち上がる。
そのまま、疲れた体を圧して壁としている冷蔵庫まで走り、今寝転がっていたところまで戻って来た。
「ああー!!疲れたぁー!!」
「お疲れ、えいちゃん。今日はお終いね」
「おお、デクも麗日もありがとな。自分が強くなってるかまだ実感無いけど、少しずつ体力が付いてるのは分かるわ」
「初日は最後のダッシュ出来なかったもんね」
ニヤリと笑うお茶子さん。
『意地悪な面』もかっちゃんの悪影響なのかなぁ？
「そいつを言わないでくれよ…」
元気印の切島くんが目に見えて萎れる。
幼い頃は高校時代ほど心も頑強ってわけじゃなかったんだね。
「でも、個性の部分オンオフも出来るようになったし、最後のダッシュも頑張れた。確実に強くなってるよ、えいちゃん！」
「せやね。昨日の自分に勝てたらそれだけ強くなってるってことだよ！」
そう言うと一瞬ポカンとするものの、直後にニカッと笑い、ありがとな！と返してくれた。
人好きする笑みだ。
彼の人気の一端であったその笑みは、記憶のものと変わらず一致した。

29．Blood Madness Muscular（血狂いマスキュラー）

Side：Force Kind

何も見えない。

先程まで、作戦のために路地裏を歩いていたはずだ。

見た目が厳ついということもあって、抜擢された潜入任務だが、相手が転移系個性持ちによる半誘拐が一番あり得るとのことでヴィランらしい見た目を心掛けて作成してもらった任侠風ヒーロースーツに身を包み、チンピラ同然に振る舞う日々を送っていた。

路地裏の喧嘩に介入し、ヒーローが来るまでやって逃げる、とほぼヴィランみたいな活動はヒーローになったと言うのにどうしてこうなったと釈然としない。

そんな風に過ごしていたところ…どこからか声がした。

『何やら不満が溜まっている様子。その不満、我々の元で振る舞っては如何ですか？』

偉く紳士的な物言い。

誰だ？と誰何するも答えは貰えず、低い笑い声だけが響く。

『ふふふ、ご心配には及びません。これからご招待いたします』

そう言って黒い霧に全身を包まれた。

（マジかよ…事前の情報通りじゃねぇか…!!）

そう考えるや否や、手首に取り付けられたボタンの横を押し込む。

ＧＰＳとエマージェンシーコールが内蔵されたサポートアイテムで、現在位置とリアルタイム通信、録音が一気に為せる小さいながらもハイテクなアイテムだ。

特殊な電波を使用しているので、阻害されることはほとんどないが…こちらからは送れてもあちらからのは届かないのがむず痒い…。

（頼む…ボロが出る前に救出してくれ…）

そう考えたのが1分前。

気付いた時には、昼下がりの路地裏ではなく真っ暗な部屋にいた。

ここがどこだか見当も付かないが、少なくとも両手を伸ばすくらいの広さはありそうだ。
慎重に手を伸ばすも、壁や天井に触れそうな感じはしない。
自分以外の息遣いや衣擦れなどは無く、多少の心細さを感じる。
下の右手でズボンのポケットを探るも、移動する際に抜き取られたのか入れていたはずの携帯がなかった。
その他に明かりをつけるに相応しいアイテムと言えば…。
「チッ…ライターくらいしかねぇが…燃えたりしねぇよな…？」
カチャン、と音を鳴らして蓋を開き、やや有って慎重に火を灯す。
何かに引火する事もなく、点いた火で辺りを照らすも見える範囲に何もない。
足元の安全が確保出来たので、辺りに伸ばしていた手を戻す。
出来るだけヴィランらしく…そう思い、下の両手をポケットに。
上の両手で辺りを照らしながら歩く。
（風はねぇ…密室なのか…？だとしたら酸欠になる可能性もあり得る…。天井すら照らせないとか相当広い部屋らしいな…）
そうやって歩いていると漸く壁に突き当たる。
（白い防音壁。屋内なのは確定か。こんな高さと広さがある部屋は都内には用意できないか…となると…ここはどこなんだ？）
そう考えた直後、バンッと大きな音を伴って全ての照明が点く。
暗闇に目が慣れ始めていたので、その照度に目を焼かれた。
突然のことに全ての腕を使って目を庇うも、視界が明るさに慣れるにはしばらく掛かった。
『四堂腕くん…だね？』
先程、路地裏で掛けられた声とは違う、低くそれでいて響く声がする。
「おう、コラ。人を勝手に連れてきやがって何様だ。出て来いよ」
ヴィランらしくを心掛けて、声を出す。
出来るだけ悪ぶって、短気的で、自尊心あり気に。
『ここに連れてきた彼には招待するように言ったんだが、お気に召さなかったかな？君の活躍は画面越しだが観ていたよ。ここ数ヶ月で

路地裏の支配者になっていたようだが、君の力を誇示するには足りないようだ。どうかね？私の元で働いてみないか？』
　人の心の内にスルリと入ってくるようなその声に違和感を抱かないことに逆に身震いする。
　恐怖を抱けないことが一番怖い、とはこのことなのだろう。
「ハッ、誰かの下に付くなんて考えたことねぇよ。それとも何か？俺を納得させられるような報酬でも貰えるのか？」
『報酬に相応しいか分かりかねるが、君の力を存分に振るえることは約束するよ？金品が欲しいのであれば、仕事の都度渡すことを約束しようじゃないか』
　もしも、捕まってしまった場合出来るだけ協力的でいろとお達しがあったが、どうにも納得できない。
「招待してもらって悪いんだが、予定があってな？出来れば今日のところは帰りたいんだが、帰してもらえないか？」
『答えを聞いてからじゃダメかい？仲間になると約束してもらえれば帰すことを約束するよ？』
　ならないと言えばどうなるのか…気になるところだが、博打を打つのは嫌いじゃない。
「ならない、と言ったら俺をどうするつもりだ？」
『なに、嫌でもなってもらうさ。君の四本の腕…使い道はいくらでもある』
　敵は個性を奪い取る個性を持っていると聞いた。
　ならば、本当にやりかねない。
　負けるのが分かっているならばコレは博打ではない。
「オーケー、分かった。アンタの下に付くよ」
『ふふふ、素晴らしい。それでは次の話に移るよ？』
　ゴゴゴ、と床に響く音がする。
　視線の先の壁が迫り上がっていくとそこには一人の男がいた。
『四堂くん、街尾くん。申し訳ないのだがね、二人にはコレから戦ってもらいたいのだよ。入学試験だと思ってもらいたい。勿論、どちらかを不合格にするつもりはないが、全力でやってもらいたい。まぁ、ど

ちらかは死んでしまうかもしれないけれど、頑張ってくれたまえ』
そう言うとブツリと音が途切れる。
ああ、参った。
こんなのは想定外だ。
見たところ、高校生くらいの筋骨隆々の男。
どんな個性を持っているか分からない…いや、待て。
この潜入捜査の仕事を受ける際に見た資料に居たぞ…？
「あー…兄さんは仲間になるかも知れねぇんだよな？だけど、本気でやれって？俺は個性を自由に使えるって言うからここに来たんだが…」
そう、確か街尾拳。
その個性は…。
ビュルッと音がしたと思うと皮膚を突き破って赤い筋繊維が肩口から現れる。
腕に纏わり、手首までをガッチリと覆っている。
「最近気付いたんだ。俺って、こんな個性だからか、昔から物を壊しやすくてなぁ？喧嘩の時にも相手を壊し過ぎちまって加減が出来ねぇんだよ。んで、その壊れ方がよ、相手を血だらけにしちまうんだけどな？どうやら、好きらしいんだ。…相手の血がよ？」
そうだ、『筋力増強』
溢れる筋繊維で力を強化する個性。
「兄さんはその腕が個性だよな？なら、力はそこまで強くねぇよな？なら、俺の力には敵わねえだろ…何って？自慢だよ！俺の力は！俺の個性は凄えんだってな!!」
ま、不味い！
「本気でって言うし…兄さん。本気で遊ぼう!!」
足にまで巻きついた筋繊維、距離にして１０ｍほどだが、その強化された筋力ですぐに食い潰されてしまうだろう。
後ろは先ほどたどり着いた壁。
左右の壁までおよそ５ｍほど。
逃げ場はない。

「はぁ…異形型と発動型のミックスか…参った、増強系は苦手なんだ…」
垂れる冷や汗。
それを悟られないよう努めるが…相手の笑みは深まるばかりだ。
「とりあえず…血ぃ見せろッッ!!」
踏み込みの一歩で肉薄され、筋繊維で覆われた巨大な拳を振り下ろされた。
ーーー

「ええ、もっと言ってやってください、エンデヴァー。彼のコレは悪癖と呼ぶべきモノですので」
「ちょ、ちょっと、二人とも…些か辛辣すぎやしないかい？」
「「そんなことはない（です）」」
「む、むぅ…。さ、さぁて出発だぁ！」
「し、締らんなぁ…」
「あ、あはは…」

30．Ｒｅｓｃｕｅ ｏｐｅｒａｔｉｏｎ（救出作戦）

「ここ…だな」
「ええ、彼が持っていたＧＰＳの反応はこの建物からです」
時刻は深夜。
草木も眠る丑三つ時。
僕らは県境にある山奥にいた。
「ここから見た限り、人の気配は無いな。見張りすら見当たらない」
暗視機能付き双眼鏡を覗いていたエンデヴァーが投げて寄越す。
「監視カメラの類も見当たりませんね。廃墟に見立てているなら恐ろしいくらい周到ですね」
「でも、見て？室外機が回っとるよ」
「電気が生きてて人がいるのは確定だな。とりあえず、オールマイトの戻りを待ちましょう」
ここ数分建物周りを見ているが、人影はおろか動くものさえない。
赤外線センサーも疑ったのだが、それに類するものは無かった。
ガサッと木々の音が擦れる音に全員が振り返る。
そこにはいつものヒーロースーツと異なる黒を基調とし、闇に紛れる色合いのスーツを纏う見慣れた金髪の偉丈夫が居た。
「やぁ。戻ったよ」
「オールマイト。気配を消しすぎですよ…」
「ふん」
サーとエンデヴァーが各々リアクションを返す。
一瞬だけ後ろを確認して、すぐに双眼鏡に戻したお茶子さんは見習うべき点だな、流石だ。
僕も気付かず衰えていたのか…習うように目を戻す。
後ろで現役ヒーロー達が情報交換を始めた。
「一周グルリと見て回ってきたが、正面口以外に侵入経路は無さそうだ」

「どこかに人が立っていたりしませんでしたか？」
「いや、人っ子一人見なかったね…」
「となると、正面突破しかないか…」
「お前らが潜入しろ。俺はお前らが入った後に正面口を焼く」
　一分も漏らされていなかったエンデヴァーの炎。
　やる気に乗じてか幾ばくかの火の粉が散った。
「本命は君達だ、緑谷少年、麗日少女」
「彼奴がどれほどの戦力を有しているか分からない以上、戦闘による陽動の危険性は天井知らずだ。出来うる限りの戦闘を避け、フォースカインドに接触するよう行動しろ。ツーマンセルは絶対だ。逃げるにしろ戦うにしろ必ず二人で行動するように。渡してあるＳＯＳ発信装置の起動に躊躇いを持つな。目標との接触前に接敵した場合は戦闘も構わんが、遅滞戦闘に努め私が行くまで時間を稼ぐ事。」
「正面口の陽動の効果が少なくなったならば、俺も突入する。無理はせず、必ず新人を助けてやってくれ」
　大人組３人の熱い視線が僕らに注がれる。
　僕とお茶子さんは一度目を合わせると出来る限りの力強さを持って首を一度縦に振った。
「現在時刻は２３時５５分」
「陽動開始は５分後とする」
「それでは…」

「突入…開始!!」

　エンデヴァーを残して僕らは茂みから飛び出した。
ーーー

目を凝らせば、埃が薄絹のように全てに纏い仄かに月光を反射していた。
両開きのガラス張りのスライドドア。
勿論、電源が切れており軽く動かそうにもデッドボルトが効いているようだ。
それを後ろにいる3人にジェスチャーで知らせるとお茶子さんが拳大の石を括り付けた紐を持ってこちらに来る。
それを大きく振り回して、勢いを付けると僕が離れる前に貼り付けたガムテープへと叩き付ける。
カシャン、と頼りない破砕音が小さく鳴るも数秒待っても変化がない。
その変化を待って、再び近寄るといい具合に割れていた。
慎重にガムテープを剥がし、手を差し込んでシリンダーを回す。
後ろに控えたオールマイトとナイトアイにアイコンタクトをとった後に僕とお茶子さんで静かに突入を始める。
お茶子さんは受信機に記された発信源を確認しているが、どうやらここより下の階にいるようだ。
リノリウムが立てる音を最小限に壁沿いを走り、角から顔を覗かせる。
ナイトアイから渡された暗視装置で周囲を確認しながら、下への階段を探した。
幾度目かの角でハンドサイン。
付いてくるお茶子さんに停止を指示する。
人がいた。
二人組だ。
「こうも暗くちゃ何もしようがないよなぁ」
「まぁ、これだけで金が貰えるんだし、普通に働くよりはマシだろう？」
「それはそうだが…」
いずれも爬虫類型の顔立ちをした異形型だ。
最悪、素の個性に付随して熱探知や暗視能力があるかもしれない。

（…デクくん、どうするん…？）
（…もうすぐ時間だ…少し戻って小部屋でやり過ごそう…）
僕はその場で監視し、その間に部屋が開くかの確認をお茶子さんに頼む。
数秒後、戻ってきたお茶子さんに裾を引かれ僕はその場を後にした。
「多分、あの先やね」
「監視を立ててるんだから、その必要があるって事だよね」
「エンデヴァーが動き出したら、きっと外へ向かうから、入れ違いになるよう行けば」
「うん、そうすればやり過ごせる」
左腕に付けたオールマイトモチーフの腕時計。
盤面を確認すれば２３時５９分。

５
４
３
２
１
０時００分。
轟音と共に建物が大きく揺れた。
ーーー

「ヒーローエンデヴァーだ!!ここにヴィランが集まっている情報は得ている!!速やかに出頭せよ!!」
小脇に用意していた拡声器を用いて声を張る。
赤々と燃えていた炎は弱火になり、多少の明かり代わりになった。
「チッ。目が焼けて、暗闇が見通せん」
顔を覆う炎も出しているせいか、闇夜が一段と暗く見える。
こういう場面では不都合だな。

ヒュッ

顔を掠めるように何かが飛んできた。
それは白い円錐状の何かのようだった。
「どこから打ってきている…？」
身体を覆うように炎を纏うと次弾は体に当たる前に灰になった。
「それずっこくねー!?俺の爪弾（ネイルガン）が効かねーじゃん!!」
ゾロゾロと建物の中から出て来る。
いずれも侵入者対策として置かれていた人員のようだ。
「ハハ、お前は討ち取れねーからボーナス無しだな！」
「て言うか、エンデヴァーが来るとか聞いてねーよ。なんだよ、好き勝手して遊んで暮らせるって聞いてたのに、これじゃあ話が違くねえか!!」
「何にせよ、勝てば良いのよ！好き勝手生きるにはよぉ!!」
俺を円心に扇状に広がるヴィラン共。
その横幅を徐々に広げ、俺を左右に挟む形で対峙したいらしい。
「時間は稼ぐが、こんな雑魚共だ。倒してしまっても構わんだろうな…」
今一度両手に炎を纏わせ、ヴィラン共に対峙する。
右に２０、左に２０、正面に１０。
よく集めたものだ。
「来い、道を踏み外したバカ共。拳と炎で説教してやる」
ーーー

Ｓｉｄｅ：Ａｌｌｍｉｇｈｔ

「始まったようだな」

「ですね」

入ったすぐ側の小部屋に潜んでいた私たちは外の状況を確認した後に、扉の鍵を掛ける。

「どうやら下のようだし、大穴開けて突入してやろう」

「ここは四方が壁ですし、構造上、他の部屋への影響は無いでしょう。私は天井に退避していますので、思う存分お願いします」

「任された!!」

張り詰めた二の腕に更に力を込めて、拳とヒーロースーツを軋ませる。

「ＤＥＴＯＲＩＴ　ＳＭＡＡＡＡＡＡＡＳＨ!!!!」

振り下ろした拳はそのまま床を突き抜け、小部屋の床全てを階下へと叩き落とした。

「ぐぇ…っ!?」

瓦礫となった元床達が降り注ぎ、階下にいた何者かの声が上がる。

グチャリ、と肝が冷える滑りの有る水のような音に最悪を想像した。

「ま、不味い!?例えヴィランでも殺してしまっていては事だぞ!?」

私は慌てて飛び降りるとそこは白一色の広い部屋だった。

病院の一室にしては広すぎるのでこの場を使い始めてから手を入れたのだろう。

それよりも声の主は大丈夫だろうか！

私は瓦礫を払い除け、傷病者の有無を確認する。

しかし、想像していた赤い赤い血の池はそこにはなく、鼻に付く濁り腐った泥水のような何かがあるだけだった。

「オールマイト！怪我人はこちらで治療します！」

すぐさま私の後を追ってきたサーも同じく慌てている。
事情を説明しようと振り返ろうとした瞬間。
視界の端で何かが動いたのを感じた。
視線を戻すとそこには私に覆い被さろうとする泥水が…。